

ほいす

VOICE FROM FUKUSHIMA 2017

ふろむ

ふくしま

はじめに

「今年の福島第一廃炉国際フォーラムの住民向けセッションの実現に協力してもらえないか」という話をもらったのは今年1月のことでした。

大学にて福島の復興についての研究・支援活動を仕事とする私にとって、この6年間、「1月」は繁忙期の真っ只中にある月でした。例年、12月から3月半ば頃までの間は、「3・11に向けて原稿を書いてくれ、番組を作りたい、講演会やシンポジウムに登壇してくれ」といった依頼を受け、それをこなす日々を過ごすことに時間を費やしてきました。

はじめの数年は、とにかく状況が混乱して議論を整理する余裕もないようなことが多かったため、目まぐるしく動く目の前の細かい事実を言語化して記録することに集中していました。

その後、徐々に状況が落ち着く中で、解決すべき課題と解決策が見え始めました。その解決策の多くは、被害の大きかった現場において、一次産業や地域コミュニティなどに関わる多くの人の奮闘の中で編み出されたものでした。私はその現場の奮闘と実状を多くの人ができるよう外部に向けてわかりやすく発信する作業をするようになりました。

ただ、その作業を数年続ける中で、全く手をつけられていない問題があることに気づき始めました。それは福島第一原発の廃炉の問題でした。それは福島にとって、3・11の最も中心にあるものと言ってもよいかもしれません。その最も中心にあるものを、最も中心にあるのにも関わらず全く扱うことができずにきたことに愕然としました。

福島に暮らす多くの人にとって、福島第一原発の廃炉の問題は「3・11後の問題の最も中心にあるのにも関わらず、極めて扱いづらい、見て見ぬふりをしてきたもの」なのではないかと思います。

私が福島第一原発廃炉国際フォーラムに協力するのだとすれば、多くの人と同じように、長らくこの「最も中心にある問題」＝廃炉の問題から目を背けてきた私自身の視点からこの問題を語り直す場をつくることだと考えました。そして、実際にその場を用意して本日に至りました。

福島第一原発の廃炉の問題は既に6年以上前から始まっていました。ただ、私たちがそこに向き合うということは、6年以上が経ってもまだ始まっていないと言わざるを得ません。

本日はその「スタート地点」です。福島第一原発の廃炉作業は、少なくともあと数十年以上続くと言われていています。ここから、3・11の問題として最後まで残ることになるであろう廃炉の問題に持続的に向き合い、語り合う場が生まれていけばと思います。

2017年7月2日 ファシリテーター・開沼博

CONTENTS

- P2 はじめに
- P4 全体の流れ
- P6 廃炉を語る場のこれまでとこれから
- P8 議論し続けるコミュニティづくりへ
- P10 プレリサーチの結果（1）住民からの言葉
- P12 プレリサーチの結果（2）識者からの言葉
- P14 リサーチセッションの調査事項
- P18 リサーチセッションの登壇者紹介
- P20 リサーチ結果の書き込みページ
- P24 インタビュー／座談会の記録
- P68 終わりに・編集委員会

廃炉フォーラム・住民向けセッション全体の流れ

これまで、福島第一原発の廃炉に対して住民が抱える不安や不満、疑問や要望が詳らかにされる機会はあまりありませんでした。一方、一般的なシンポジウムのように、数時間の間にその詳細を明らかにし、解消することにも無理があります。そこで、「プレリサーチ」を行った上で、住民向けセッションを開くことにしました。

事前ワーク

プレリサーチで行った、住民座談会や識者へのインタビューは、冊子の後半に収録されています。ぜひお読みください。



1 プレリサーチ

5回の住民座談会と5人の識者インタビューを行いました。

住民座談会は、元々双葉町に暮らしていきま避難して生活している方々、田村市都路や川内村など避難指示が解除された地域で生活している方々、再開に向けた準備が進む「ヴィレッジで働く方々、福島で暮らす外国人の方々、福島高校の生徒の方々を対象に行いました。

識者インタビューは、三春町在住で芥川賞作家の玄侑宗久さん、県立高校の国語教師で詩人の和合亮一さん、福島第一原発で働いた体験を元にしたマンガ『いちえふ 福島第一原子力発電所労働記』著者の竜田一人さん、原発事故前から福島に通い取材を続ける堀潤さん、福島を世界にPRするユーチューブ動画のプロデュースなどで有名な熊坂仁美さんに話を聞きました。

いずれも2017年5月から6月にかけて行いました。

廃炉フォーラム当日

当日のメインは午後の「リサーチセッション」。福島第一原発の廃炉について分からないことを徹底的に深掘りします。その導入として午前中に「レクチャー&ミニワークショップ」を行います。

2 レクチャー&ミニワークショップ

11:05-11:50



30分で分かる 1F 廃炉 「何が分からないかが分からない」の先に

まずは、「レクチャー」で福島第一原発の廃炉の基本情報を確認。その上で、「ミニワークショップ」を通して廃炉への率直な思いを参加者同士で共有。不安・不満・疑問・要望を明確にした上で午後のセッションにのぞむ準備をします。

3 昼食（なみえ焼そばなど）

11:50-13:20



なみえ焼そばを食べて休憩。フォーラム参加者同士で交流をしても良いですし、3・11後整備された役場周辺の状況を見に行っても良いでしょう。海が見える景色を楽しんでも良いかもしれません。この冊子「ぼいすふるむふくしま」にも目を通して頂ければ幸いです。

4 リサーチセッション



13:20-15:40

そこが聞きたい！ 1F 廃炉のいま：「分からない」を「そういうことか」に

プレリサーチの内容を踏まえて、具体的に私たちが「知りたいこと」を洗い出します。そして、「知りたいこと」を時間の限り、廃炉を進める専門家たちにぶつけていきます。分かりにくい言葉は分かるまで、現時点で答えが出ていないこともどのような可能性があるのか、普通の「公式見解」だけでは知ることができないところまで深めていきます。登壇者は以下の通りです。

ファシリテーター 立命館大学衣笠総合研究機構准教授 開沼 博

地元代表 福島大学経済経営学類助教 マクマイケル・ウィリアム
NPO法人コースター 理事 坂上 英知
福島大学 学生 木村 元哉
川内村商工会 会長 井出 茂
元田村市復興応援隊 小林 奈保子
福島高校 高校生
ふたば未来学園高校 高校生

パネリスト 経済産業省 廃炉・汚染水特別対策監 田中 繁広
原子力損害賠償・廃炉等支援機構 理事長 山名 元
東京電力ホールディングス福島第一廃炉推進カンパニー プレジデント
増田 尚宏

コメンテーター 経済協力開発機構原子力機関 (OECD/NEA) 事務局長 マグウッド四世
米国アルゴンヌ国立研究所 シニア・ポリシー・フェロー P. ディックマン
フランス原子力・代替エネルギー庁 原子力開発局長 F. ゴーシェ
スペイン放射性廃棄物管理公社 総裁 J. J. ザバラ

経済協力開発機構原子力機関 (OECD/NEA) 事務局長 マグウッド四世による総括をもってリサーチセッションは終わります。「『知りたいこと』が分かったけど、さらに深いことを知りたい」という場合には、更に翌日のセッションの深い話を聞きに行くのも良いでしょう。



5 フィードバックセッション

16:00-

この「対話の場」は、今後も廃炉が終わるまで続いていきます。何が分かって、何が分からなかったのか。不安・不満が残っていないか。帰る前に、グラフィックレコードにシールを貼って思いを可視化していただきます。それを元にして次の「対話の場」が積み上げられていきます。

廃炉を語る場のこれまでとこれから

残念ながら、これまで「廃炉を語る場」はほぼありませんでした。

これまでの「廃炉を語る場」は ...

専門家向けフォーラム (学会・国際会議)

メリット

研究者などによる最先端の議論、海外事例なども含めて俯瞰した議論が分かる。

デメリット

一般の人にはハードルが高すぎ。
住民が求めるものと乖離していることが多い。

東電やNDFの関係者による 講演・説明会

メリット

最新の情報が網羅的に説明される。
責任ある回答が出てくる。

デメリット

一般の人からしたら難しすぎる。言葉がわからない。
そもそも何の話をしているのか前提が抜けている。

福島第一原発構内視察 (基本的には東京電力がアテンド)

メリット

現場の状況を自分の目で見て確認できる。
空気感が分かる。

デメリット

人数の許容量が限られて一部の人しか行けない。
行っても、予習しないとただ圧倒されて終わる。
考え・語り合う暇がない。

福島第一原発周辺のツアー (自治体や教育機関・民間団体などが主催)

メリット

複数の主体が開催していて参加しやすい。
語る場が設定されていることも。

デメリット

「見どころ」消えている。現状を読み解くには高いリテラシー必要。「あの時のこと」はあっても「今後どうする」がない

結果

- ・一部の強い関心がある人のみが語る傾向（それも縮小傾向）
- ・語り続けるためには「これまでの経緯」や「今後の展望」を理解するための専門的な知識が必要に
- ・地元住民からしたら「置いてけぼり感」が蔓延

しかし、中長期的に取り組むべき課題は山積!!

いわゆる「風評被害」やイメージの固定化・悪化

地元住民の清掃活動への嫌がらせ、
「650Sv」で韓国航空機の福島空港着の取りやめ、
浪江町の火災・・・

福島第一原発周辺12市町村の復興・再生

元住んでいた住民の生活の再建、新たに住み始めた住民の定着、
営農再開やイノベーションコースト構想など産業の活性化

福島第一原発内でのデブリ取り出し作業の本格化や廃棄物処理

これから、必要なのはどんな場なのでしょうか？



中長期的に取り組むべき課題を解決するために、
透明性の確保&住民参画のもと事実を共有し、
冷静で多様な議論の場を作ること。
そのうえで、
住民が満足できる幸せな未来を構想していくこと。



「伝える」だけ乗り越えて...

議論し続けるコミュニティが 「住民が満足できる幸せな未来」 につながっていく

そのためには、
「ここに生きる人の声」の可視化と、
「納得感」を得るまでの
コミュニケーションが
必要です。

↓ これまでの「伝える」場

行政主導の会議型

「廃炉安全確保県民会議」
「廃炉・汚染水対策福島評議」
など...

こういう場は必要だが、
住民にとっては疎外感。
「偉い人集まって難しい説明」？

説明会型

廃炉についての
地元住民向け説明会

そのほとんどが、関心のない住民に
届けようとしていない。その結果、
避難指示解除に関する説明会などで
廃炉への強い言葉が飛び交ったことも。

また避難するような場所
に戻そうとするのか！
etc...

視察型

地元住民の視察
継続的に続いている

なんとなく「相互コミュニケーション」
に一步踏み込めた感じはあるけれど、
難しい話は伝わっていない。
知識量、関心のバラ付きの中で、
結局、専門家優位の
コミュニケーションが続く。

「伝える」努力と「伝わる」効果 のミスマッチ。
住民に「伝わる」まで至っていない。

一方的に説明して終わり。質疑は噛み合わない。
結果、「議論をし続けるコミュニティ」が生まれない

足りていないのは

「ここに生きる人の声」と「納得感」を得るためのコミュニケーション



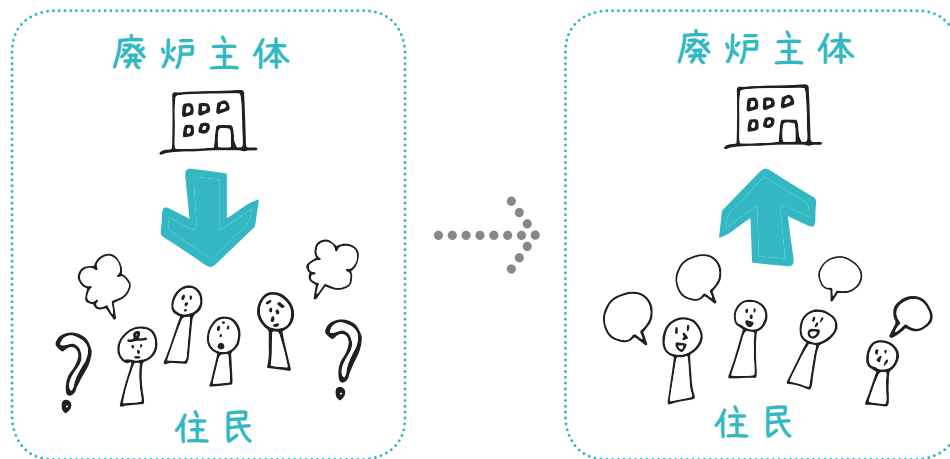
そこで必要なのが、「フリップド・リサーチ型アプローチ」です。



って何？

フリップド（反転）・リサーチ型アプローチ

フリップド・リサーチ型アプローチとは、政府・東電など廃炉の主体「が」住民「に」説明するという関係、これまで固定化していた「廃炉主体=>住民」という矢印を反転して、住民「が」廃炉主体「に」、自分たちが抱える不安、不満、疑問、要望・希望を元にして、徹底的に説明を求めるという「住民=>廃炉主体」という関係が成立する場を作ることを指します。



この廃炉フォーラム住民セッションも、フリップド・リサーチ型アプローチです。いくつかのリサーチやワークショップ、セッションなどで成り立っています。

今回用いたアプローチの一部をご紹介しますと……

プレリサーチ

&

リサーチセッション

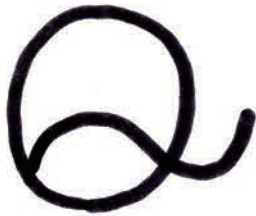
地元の多様な声を拾い上げ、地元に基づいて活動して実績ある人の知見も今回のセッションに組み込んでいくために、事前に、5回の座談会と5人の識者インタビューをしました。

地元住民の立場で「知りたいこと」を必要な順に聞いていきます。回答も一度で終わりではなく、分かる、納得するところまで質疑を続けます。

POINT

リサーチで大切なのは「モヤモヤ」の発見です。
見えてきた「モヤモヤ」を解消し「スッキリ」することを目指してリサーチセッションが行われます。

FUKUSHIMA



今みんなが気になってること



専門家の作った基準 納得できない



イノベーションコスト構想とは？
海外の研究者を招致するとは



福島高校

廃炉や放射線についての
前提知識が乏しい



廃炉の問題

複雑にからみあがる
どの問題の解決が
どうむずかしいのか？

知識
わからないことがわからない

多くの人に
問題を矢印してもらいたい？

過重に懸念する人
SNSで否定的なことを
いう人
だまっている人

対話
どう話せばいいのか？

トリプル4本の処理
誰にどう説明して
どんな合意形成をする？

具体的な
今後のスケジュール

全国で対話の場を
つくってほしい。

海外にも know how 何十年もかかる廃炉
人手や資金の継承
情報発信してほしい。

現状理解
今を知る。

デブリは多岐にあって
どのような状態をしている？

本当に40年かかる？
もっと長いスパンで見た方が
よいのでは？

未来
ビジョンや計画

廃炉したあと
その場所はどうなる？

サソリ型の調査ロボット
失敗から何が得られたか？

デブリを取り出した後の後？

福島 = 原発 ではない



東京に住んでいる人は
判断してほしくない

現場でしか見聞きすれば
安心する。しかし全員が行けるわけではない

危険な場所 海外の人たち。
福島に
まだ住んでいる人が
いるの？

調査ロボットの誤作動
ちゃんと説明して
Xメディアは1つだけ
だった。

客観的なデータ
根拠に基づいて第三者に
検証してもらいたい
DATA

東電 **安心安全**

海外 Xメディア **危険**

デマのような
情報の広がり



福島在住
外国人

本当に廃炉は
できるのか？
ゴミはどこに廃棄するの？

どっちを信じればいいのか？

誤解が
多い。

情報が多すぎてわからない
もっとわかりやすくできないの？



Q&Aを
知りたい

英語で書いてほしい
English

かみ砕いた
わかりやすい表現で
伝えてほしい。

田村市都路 川内村

実際に今住んでいる
を心配しているのではない。

コミュニケーション
感情・ロジック
感情に左右されずに
バランスよく対話したい。

帰りたい...
早く解決したい

また住みたい
どんなリスクがあるのか?
役場でリスクについての認識はあるのか?

正しい知識 Risk?

原発が嫌い
何を言われてもマイナスに
まよえる。

帰れない...
もう考えたくない

考えてもどうならないと
どこかで諦めているかもしれない。

もう無理

不安というより
何か質問されても
正しく返えせる自信がない。

放射能について
議論がまきおこることに
怖い。いやだ

説明を読んでも
わからないことが多すぎる

40年後 廃炉が終わった時どうなっているの?
40年.....?

どうやって廃炉を進めるの?

双葉町

ため池
底が
おこる

日暮いイキ-ジばかり
明るいイキ-ジを廃止
してほしい。

交流会で廃炉の
話は出てこない

子供たちの
コミュニティが
はらばらに。
成人式が
できるのか?

Public

復興関係の会議で
一応みんな意見は言うけれど

もう戻らない
私の意見には
説得力がない
こういう会議は意味がないかも

個
private

田を
元の形に

おまは
おまは

本当は帰りたい
でも帰るのは危険だと
みんながいう。

SMSに反応したら
みんなが反応をした。

行きたーい

イキ-ジ

再開に向けて準備中

現実

九州・静岡
遠くから来て応援してくれる人もいる。

教育旅行のプラン
親が反対する。
世界大会に向けて
まずは大人が
情報発信を。

安全?

防護服を着るイキ-ジ

検量は
少しづつ
下がってきている

説得力を
どうやって中か?

人も少しづつ増えている

Jヴィレッジ

FUKUSHIMA 有識者 インタビュー

和合亮一
詩人 ラジオパーソナリティ
福島県福島市出身
高校教員

NO. 1



廃炉!

現場で働く人々は
我々の仲間

誰かがそこに向かって努力している。
その点で非難されることなんて
何となくない。
現場で作業している方々がい
いるからこそ 廃炉への希望も
高まってきている。

情報に
追いつけず
廃炉の問題を
見つめられる静かな時間を持つ。

高

なにぞか
あるぞ!

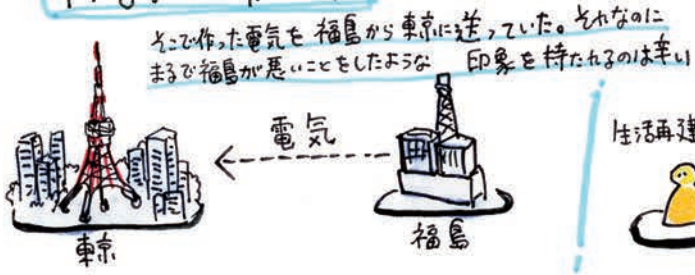
何か
はじめたい
けれど

語ることに
つがれて
しまった

低

今の福島には立場によって
温度差がある。
だからそこで初めてこの**6年**を
生きたものにするために
どうすればいいのが考えたい。
長く続けるために
必要なものは何だろう?

福島原発 には言わないでほしい
東京電力福島第一原発 です。




震災から時間が経って、予想もしていなかったような
対立や軋轢や誤解などが生まれている

生活再建 日度立たず...

避難先の人

避難先の地域社会

生活再建できている!



6年

新しい視点を
自分たち自身で
見つけなければ
いけない分岐点

経済・文化・教育
コミュニティ
人間同士の
関係性



NO. 2

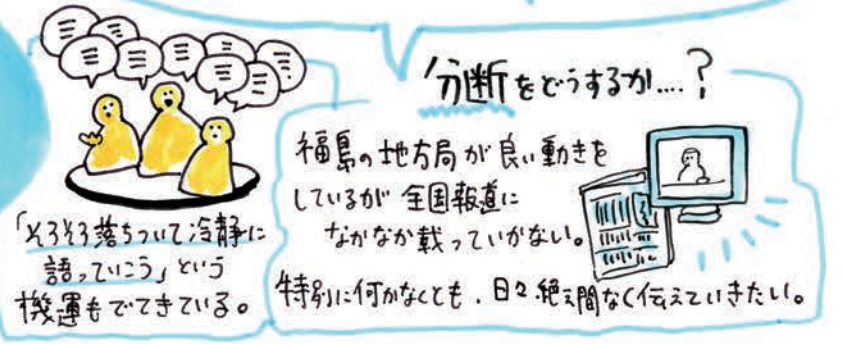
堀潤
ジャーナリスト
キャスター



判断をどうするか...?

福島が地方局が良い動きを
しているが 全国報道に
なかなか載っていない。
特別に何かなことも、日々絶え間なく伝えたい。

「とろとろ落ちていく冷静に
語ってほしい」という
機運もできてきている。





FUKUSHIMA

誤解と実態とのギャップをうまく利用して
で人々を外に出た方がいいと思う。



100万回再生!

The Telegraph

BBC Brazil

RT.com

Mail Online

日本の外でのキ-局

主要新聞



ネガティブな偏見よりも

むしろ怖いのは無関心

ごく一部の黒を白に変えるよりも
無関心な人々に向って
福島の魅力的なコンテンツを
出している。

No. 3



熊坂仁美

株式会社SML
代表取締役
地域活性化
78ユーザー
福島県公式YouTube
チャンネルアドバイザー

福島...?
危ない所だ!



ネガティブな偏見

.....



無関心

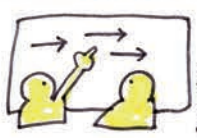
良くなっている!
できた!

改善しよう!
危機!



この2つをセットで伝えていこう。

根拠のない不安に過剰に配慮しすぎると余計に不安を招く。



毅然として
計画を実行
しよう。



俺が全責任を
取る!

誰なのだろう...?

実行を認可してくれる人が現れて欲しいと願う。

竜田一人

いちぶ 福島第一原発
労働記



No. 4



震災直後の
事故対応



野田宗久の
早すぎる収束宣言

安倍さんの
アンダーコントロール発言



不安

政治的発言は信用できないという印象
まずは信用回復が一番の課題



安心は人情の
問題

安全は科学が
担える問題

誰しもが
納得できる答え
導くことは
むずかしい...

No. 5



玄侑宗久
小説家僧侶
福島在住

専門家たちが権威を失墜したままの状態
マスコミはもう一度 専門家を引っ張り出して
まっとうな学問的蓄積を報告させてほしい。

第二原発をどうするのか?

世界中で原発が 段々と廃炉になっていく中で
知見を 世界に役立てることもできる

日本の
エネルギー問題

福島の
第二原発をどうするか

7割分けて考えよう

リサーチセッションの調査事項

プレリサーチから、様々な不安、不満、疑問、要望・希望など、「モヤモヤ」が見えてきました。

福島第一原発の廃炉と、
それと付き合いしていく
12市町村など
その周辺地域での生活について

廃炉についてのWEBや
行政の冊子が全くダメ！
わけがわからない。
対策は？

これから数十年続く作業を担う
働き手の確保は問題ないのか？

汚染水はどうなっている？
どこにいったる？
海に出ていないのか？
タンクを解体しているとも聞か
あれは何か？

原発周辺で仕事をしていて今後、
安定して（経済的・非経済的に）生活していけるか不安！
自立した人とそうでない人との溝。

廃炉・除染など復興関係で来た人中心の街の先を
考えることができるのか？子育てをできる街にしないと、
人は戻らない。研究所など職場作っても単身赴任。

外国の知見というが、
外国の人がわざわざ福島まで来てくれるのか？
海外向けの情報発信が悪い。
海外での福島のイメージが悪い。

もう一度大きな地震や津波が来るたび
原発がどうなるか心配！
いつになったら安心して帰れる？
また大変なことになるリスクはないのか？
他にも想定している危機は？

30-40年というが
もっと時間がかかるのではないか？
イギリスなどは100年単位で考えていると聞く。
短くするのも長くするのも
それぞれコスト・リスク面で、
メリット、デメリットがあるはず。
かかるならかかるで、
その必要性や住民へのメリットを説明して
計画を切り替えるべきでは？

また爆発するようなことはないのか？
爆発せずとも、
再避難するようなリスクは？
情報はどこから来るのか？

廃炉の計画が漠然としていて
よくわからない！
そもそもいま何をしていたり、
これから何をするのか？

廃棄物をどうする？
(取り出した使用済み燃料・
デブリや建屋・汚染された機器など)
タンクの水はどこまで増えるのか？
置き場所はあるのか？
中の水をどう処理するつもりなのか？

技術的な「廃炉」の
ゴールはどこにあるのか？
更地にするのか？
「石棺」という言葉も聞くが
途中で作業を止めることもありえるのか？

建屋内にロボットが入ったが
なぜ失敗したのか？
失敗ではなく想定内のことで
一定のデータをとれたとも聞く。
そうならば何がわかった？

廃炉の膨大な費用をどうにかできないのか？
国民の負担。
なぜこんなにかけるのか？
負担する下の世代へのメリットは。

2Fはどうなるのか？
原発そのものが嫌い！
廃炉しないのか？
現在の危険性は？
活用の可能性は？

溶け落ちた燃料（デブリ）の取り出しは
無理だという話を聞く。
本当に可能か？
デブリの場所も分からないのにどうするのか？
可能ならどうやる？

廃炉作業の途中で
農業・漁業・林業への悪影響が
今後でないのか？
囲いなど施設が必要では？
ダストが飛び出たりするのでは？

トリチウム水のことなど。
責任をもって意思決定するものが必要。
「トリチウム水が何か」自体マニア以外分かっていない。
そもそも安全性は？

なぜ意思決定できないのか？ 棚上げして
余計なコスト・リスクを増やしているだけでは？

福島第一原発の廃炉が終わったあと、
あの土地をどうする可能性があるか？
ゴールが見えない。線量はどこまで下がる。
廃棄物はどこに置く。

地域住民が議論の場に入って
原発について語る機会がない。
なぜ用意されない？
英・仏・米ではそういう場が
制度的に用意されていると聞く。

地域がどうなるのか？
不便の解消や「帰還困難区域」をどうするのか。
イノベーションコースト構想と名前だけは聞くが、
廃炉と何の関係があり、何やっているのか見えない。
288（国道288号線）を通して欲しい。
「帰還困難区域」というより現在の問題の中心を考えれば
「生活不便区域」が実態に即すのでは。

Local Communities' Questions for Research Session

"Ambiguities"

Emerging from the Heart of the People living here
Extending from Concerns, Dissatisfactions, Questions to Hope and Requests etc.
Identified through the prior Interviews in advance

Can the workforce be secured for the decommissioning works what will continue for many decades from now on?

People who are working near the Fukushima Daiichi have to be worried if they could recover the stable lives in the future as well (both economically and non-economically)!

There is a gap between those who can be self-independent already and those who are not. Can we imagine the future of towns where majority of the residents are coming from other cities and living only for the jobs on the recovery like D&D? It is worried that people would not come back again unless there are facilities where people can raise our children. Even if laboratories could be built for example, researchers are forced to be separated and live alone from the families.

Websites or government's brochures are totally beyond people's understanding and people could not accept. What could be done?

What is the situation with the contaminated water?
Where does it go? Is it going into the sea? We heard the tanks are being dismantled, but what does that mean?

People are worried what will happen to Fukushima Daiichi when a big earthquake or tsunami hits it again.

When can we go back without fear and anxiety? Are there any risks of something very serious happening again? What are other crises being assumed?

Is there a chance of another explosion?
Even if it doesn't explode, will there be a risk that forces us to evacuate again? Where does people get such information?

Program of 1F D&D is still vague and it is difficult to get a point.
What is being done now and what is being schedule?

How will the waste be dealt with? (Retrieved spent fuel, fuel debris, disassembled building and contaminated equipment etc.)
How much will the tank water increase? Are there areas to place it? How will the water inside the tank be treated?

What is the goal of 1F D&D in terms of technology? Green field is an object? Sometimes we have come across the term of "sarcophagus" Is there a possibility that D&D work will be terminated before completion?

What is being planned for Fukushima Daini?
We hate nuclear power plants a all! Why don't they decommission them? What are the present risks?
Is there a possibility for reuse?

It is said to take 30 to 40 years but doesn't it take longer than that?
We heard that countries such as the UK think of the order of 100 years. There should be advantages and disadvantages on cost and risks in shortening or extending the schedule of decommissioning. If it turns out to take longer, shouldn't they change the plan and explain the necessity or the advantage to the local residents?

The robots went into the reactor buildings but why didn't they succeed?

It is also mentioned that it was not a failure, within the assumption and they were able to obtain some data. If so, what did they learn from it?

Some says it is impossible to retrieve the fuel debris. It is really possible?

What can be done even though it is not known where the fuel debris is distributed and scattered within PCV? If it could be feasible, how could it be?

It is understood that overseas expertise is expected, but will the foreign people really come all the way to Fukushima? Information dissemination to overseas countries is not very well handled. There are negative impressions about Fukushima spread in the overseas countries.

Is there anything that could be done about the enormous amount of decommissioning cost? This is in the end the burden on Japanese citizens. Why does it cost so much? How could it be the merit to the younger generations who bear the cost?

Tritiated water. Someone needs to be responsible and make decisions.

"What is tritiated water?" Only the maniacs know what it is. How dangerous is it anyway? Why can't they make decisions? Aren't they just postponing the decision-making and increasing unnecessary cost and risk?

After the completion of decommissioning of Fukushima Daiichi, what are the potential plans for the land? We cannot see the goal. How much will the dose reduce? Where will the waste be placed?

Won't there be any negative impact on agriculture, fishery and forestry during the decommissioning activities? Isn't there a need for facilities like fences? How the risk of the dust to disperse could be prevented?

There are no opportunities for the local residents to join the discussion to talk about the nuclear power plants. Why aren't there any occasions set up?

We heard that there are such kind of opportunities available in the UK, US and France.

What will happen to the local communities? How will the inconvenient situation be resolved and the "difficult to return" areas be dealt with?

We heard of the name "the Innovation Coast" Framework but we don't understand how it is relevant to the decommissioning and what is being done actually. We want the route 288 to open. "Inconvenient to live" area is a more appropriate term that fits the actual situation if we think about the focal point of the current problems.

リサーチセッションの 登壇者紹介

マクマイケル・ウィリアム



(福島大学 経済経営学類助教 兼 国際交流センター 国際プログラム担当)

カナダ出身。福島市在住。子育て中。海外大学の学生と福島大学の学生が2週間、福島県内を回る研修プログラムである「Fukushima Ambassadors Program」を10回以上運営してきた。活動の中では、福島の実情への無理解から「学生を殺す気か」といった言葉を浴びせられたことも。海外で福島や廃炉のデマが流れると県内在住の外国人とともに誤情報の訂正に向けて活動してきた経験も持つ。

坂上英知（さかうえひでとも）



(NPO法人コースター理事)

富岡町出身。郡山市在住。福島高専、東北大・大学院を経てNPO業界に。現在まで、郡山市を拠点にするNPO法人にて、郡山市内の仮設住宅の支援や富岡町民の語り部活動のNPO法人化の支援などを行ってきた。昨年度は、NPOの拠点がある郡山市で開沼と「福島学ゼミ」という住民が主体的に福島や廃炉の現状を学ぶ勉強会を1年間つづけ、今年2/28には1F視察を実施。その時の様子は読売新聞やフジテレビ「ユアタイム」で取り上げられた。

木村元哉



(福島大学学生、学生団体リプラボ代表)

広野町出身。福島市在住。広野駅で飲食店などを営む家で生まれ育った。ふたば翔陽高校に進学予定だったが、中学を卒業したタイミングで被災した。その後、いわきの高校から福島大に進学。大学のプログラムでは川内村や南相馬の地域づくり活動に携わる一方、双葉郡の未来を担う世代として、広野のまちづくりに関わったり、廃炉の勉強をし、原発の視察などを行う学生団体を主催。現在、就職活動中。

井出茂（いでしげる）



（川内村商工会商工会長）

川内村出身・在住。川内村で生まれ育ち、株式会社小松屋として「小松屋旅館と蕎麦屋・蕎麦酒房天山」をご子息とともに営む。村のコミュニティ施設の企画や様々なイベントに取り組み幅広いネットワークと信頼を持っている。村議会議員も務め、避難指示解除後の地域の課題と再生に、最前線で向き合い続けている。

小林奈保子（こばやしなおこ）



（浪江町住民、昨年度まで田村市復興応援隊）

田村市出身・浪江町在住。田村市で生まれ育ち、福島市で学生生活を過ごした後、地元・田村市の避難・帰還住民の生活の支援をする田村市復興応援隊で活動。田村市は避難指示がかかった都路地区と、そうではないその他の地区を抱えており、地域ごと、時間ごとに目まぐるしく変わる様々な地域課題に向き合ってきた。2015年に結婚し、現在は2017年春に避難指示が解除された浪江町に転居。公務員の夫と生活している。

福島高校の高校生

（福島高校SS部）

福島県立福島高校は、文部科学省による「SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）」に指定され、物理、生物、化学などの自然科学分野での先進的な教育に取り組んできた。その中で、生徒が自主的に活動するのがSS部だが、原発事故後、福島状況を正確に捉えるため「放射線班」が発足した。国内外12地域、216名の協力を得た福島内部と外部の個人線量の比較研究は栄学術論文誌に掲載され、海外国際会議での発表、外国人特派員協会での会見なども行ってきた。その後は、避難指示解除地域の状況や1F廃炉の研究を進め、昨年11月には高校生としてはじめてオンサイトの視察を行った。

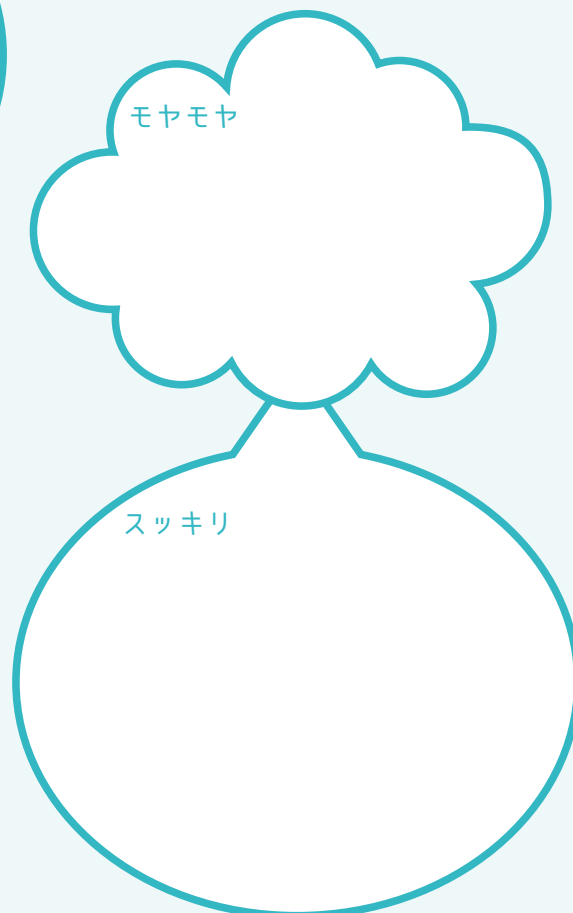
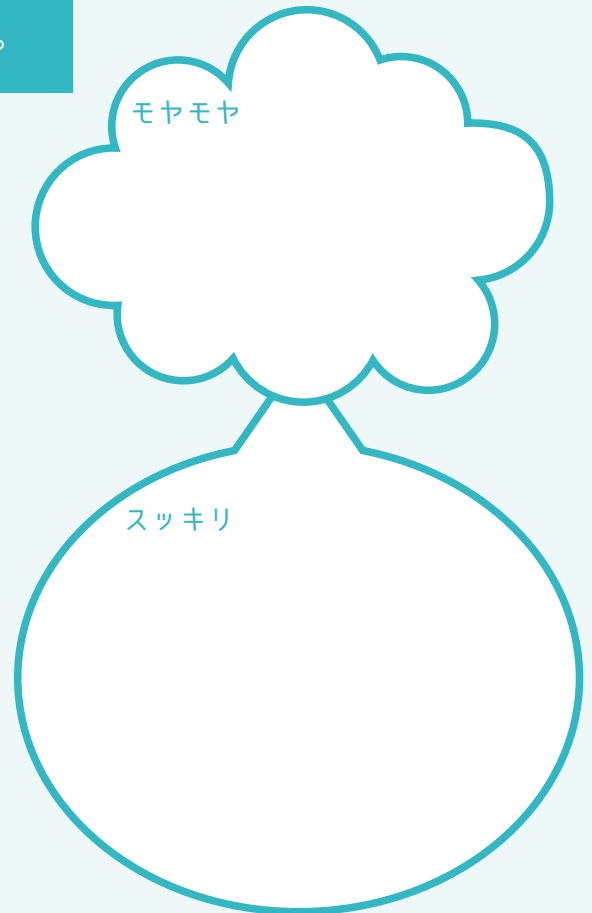
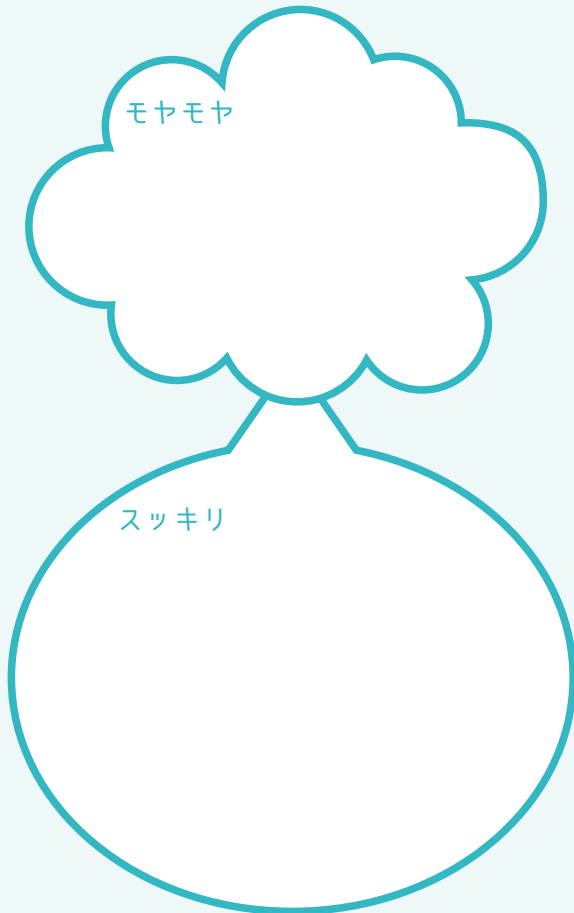
ふたば未来学園高校の高校生

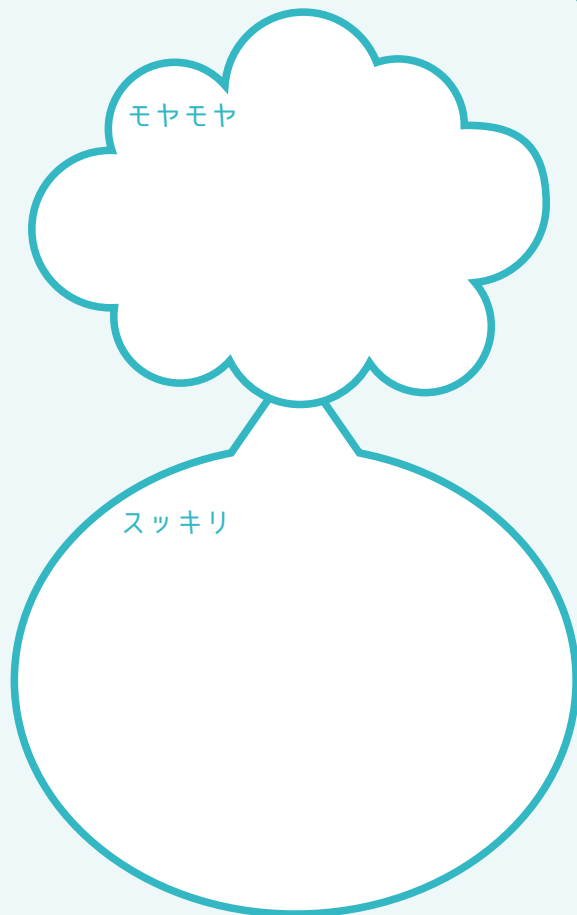
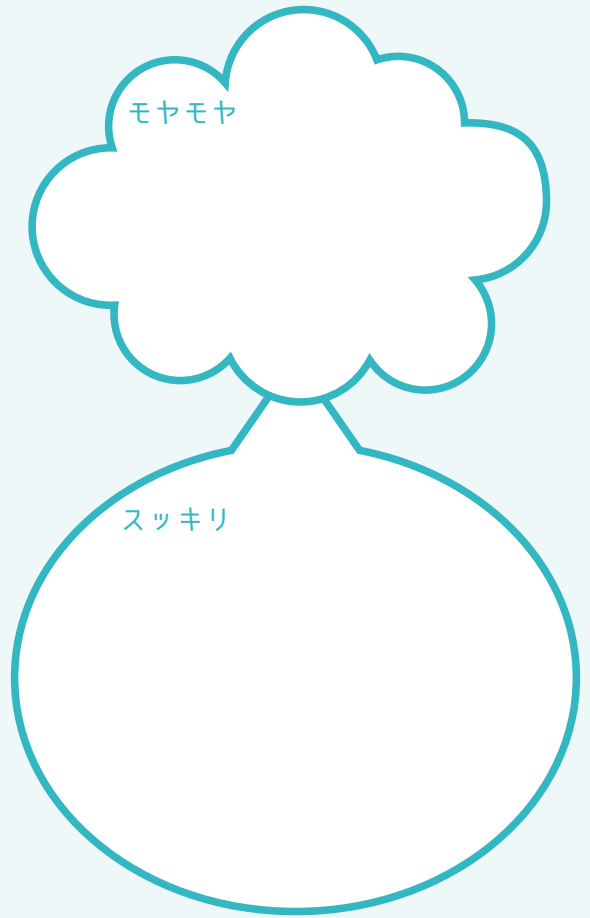
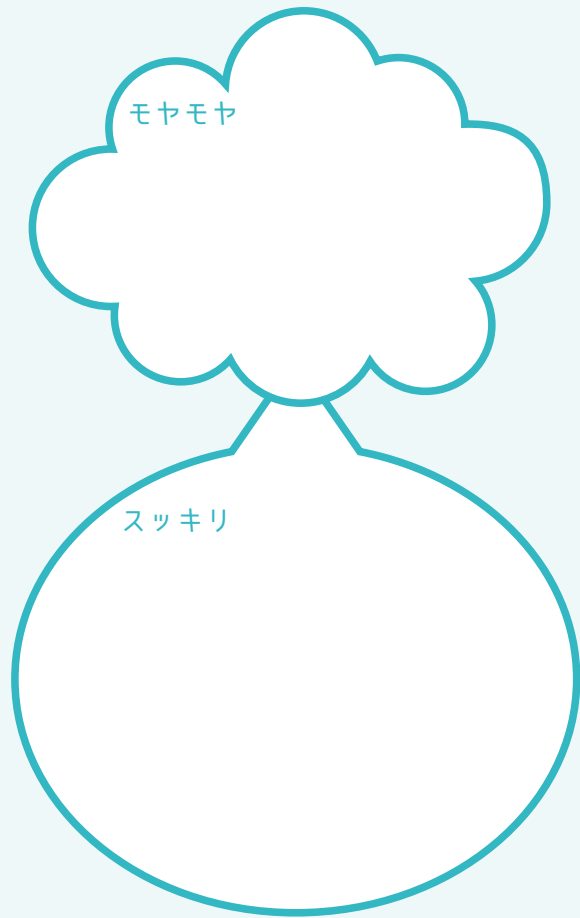
（ふたば未来学園高校社会起業部）

平成27年4月に開校した福島県立ふたば未来学園高校は、原発事故後の様々な困難を乗り越え、持続可能な新しい社会の建設を担う「変革者」の育成を目指して、最先端のカリキュラムを採用している。開校と同時に、文部科学省「スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）」に指定され、課題解決型授業（PBL）を中心にした主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）を実践し、生徒全員が地域の課題を解決しようとする探究活動を行っている。また、部活動としての「社会起業部」では、地元の放射線の状況を科学的に考察するなど、生活圏での安全を確認し国内外に発信している。

リサーチセッション・ノート

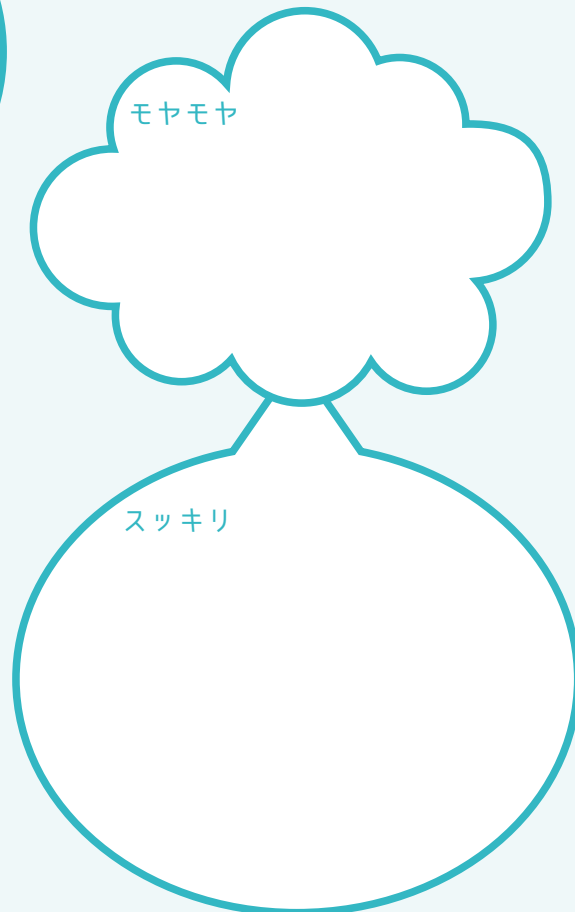
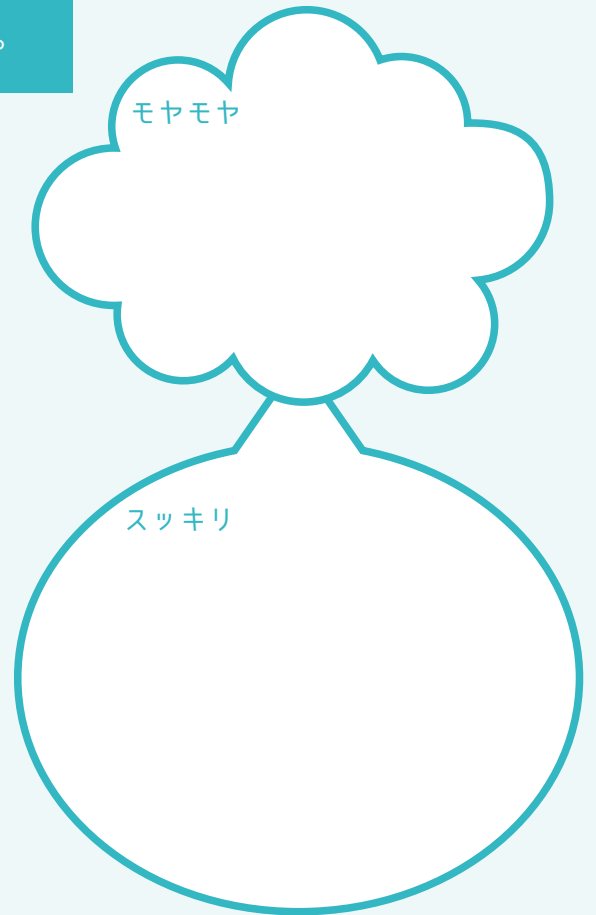
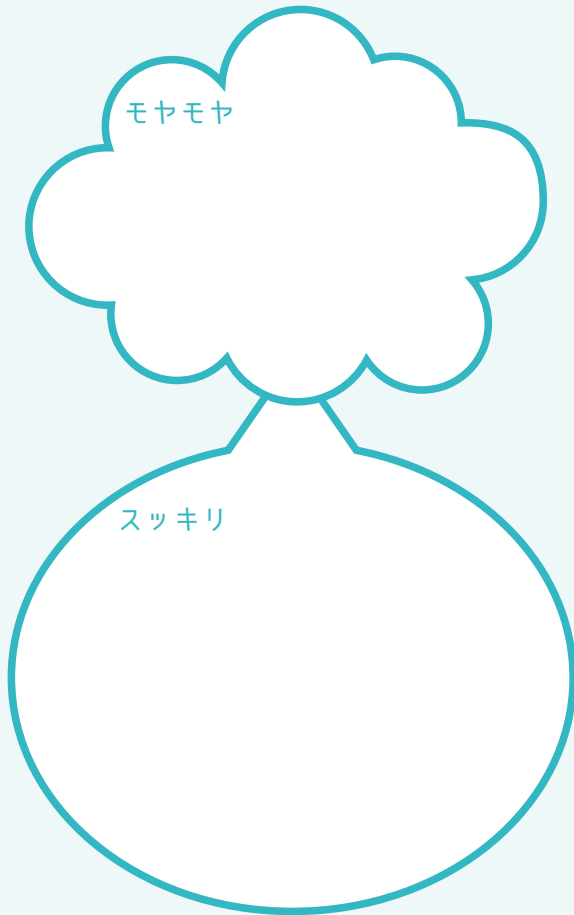
あなたの「モヤモヤ」を書き出してみてください。そのモヤモヤを「スッキリ」させていくことを目指します。

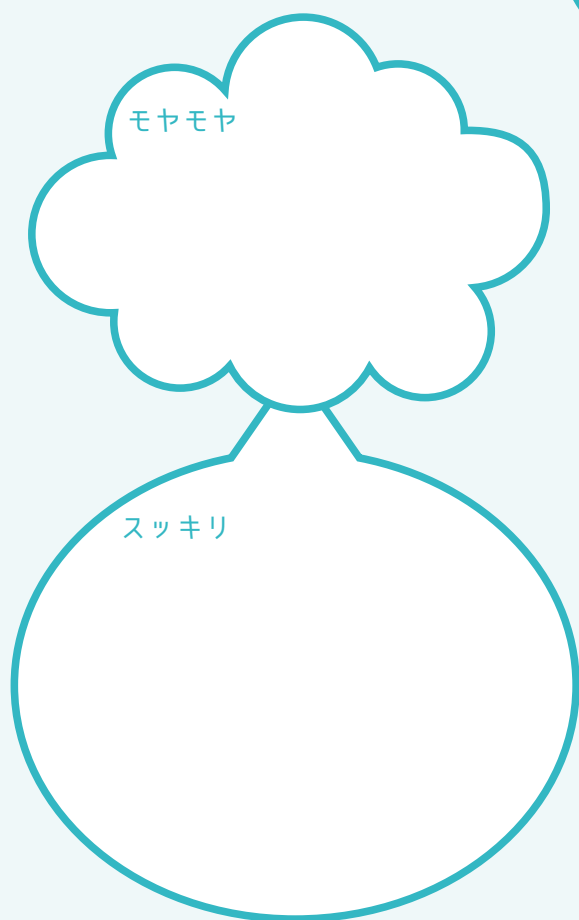
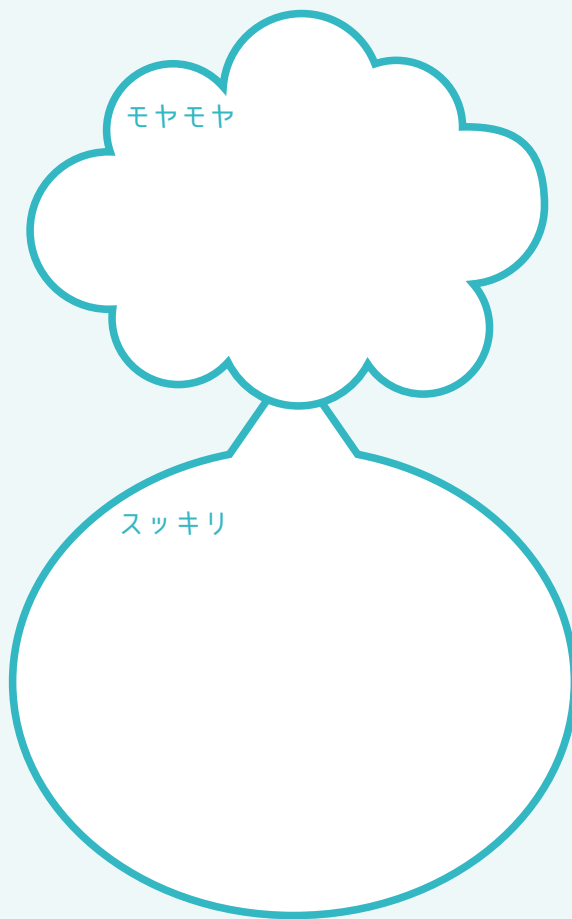
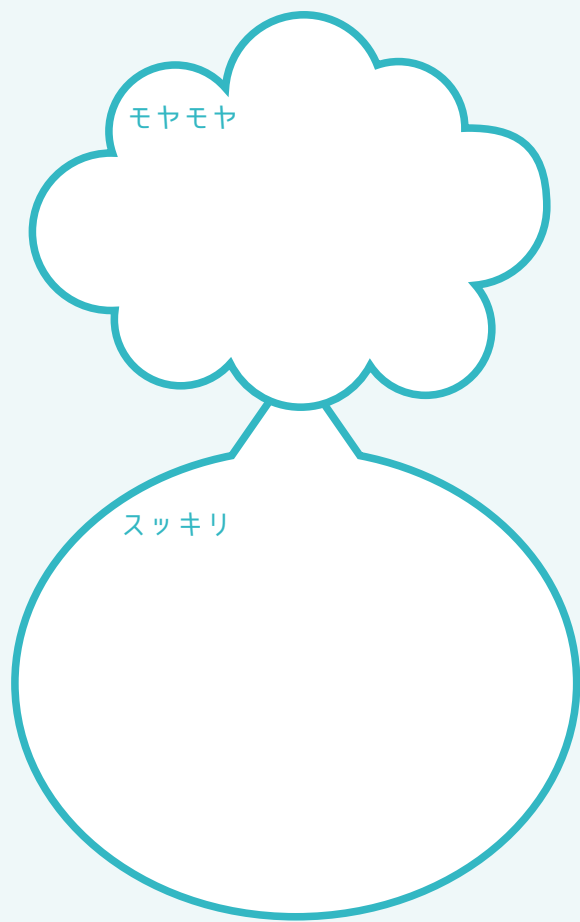




リサーチセッション・ノート

あなたの「モヤモヤ」を書き出してみてください。そのモヤモヤを「スッキリ」させていくことを目指します。







和合 亮一 さん

(詩人、高校教師)

和合亮一さんは、日本を代表する詩人であると同時に、福島県内の高校で国語を教える教師でもあります。3.11後はTwitterで福島の現状を発信し続け、海外から高い評価を受けています。

—いまの福島の課題は？

私は、全国の様々な被災地の方に詩を届けるという活動をしています。先日は熊本を訪問して詩を書き、現地の方々に届けてきました。熊本の状況は、実際に足を運んでみないと掴めなかつたろうな、と感じています。そういった意味で、福島のこともう一度見つめ直すきっかけを頂きました。

いろいろな声を聞きますが、「今の福島には立場によって温度差があるなあ」と思います。たとえば熊本でもそういう温度差はありました。熊本は被災した地域に限られていて、県内でも直接被災していない方もいれば、家も家族もなくしたような方もいます。そういった「温度差がある」という現実を受け止めながら、同じ話をする場面、それぞれの立場に違う話をする場面、ときちんと整理していくことが必要なのかなと思います。これは、全国に講演に行っても感じることです。福島から遠く離れていながら、まるで自分のことのように思っている方はいますし、逆に福島県内に住みながら、思い出したくない方もいます。

補償のこととか、戻りたくても戻れないとか、そういう状況の中でも、しかし静かに時は流れていく。**なんだかもう語ることに疲れてしまった方もいる一方で、「今から何かはじめよう」というエネルギーを持った方も現れています。だからこそ改めて、「この6年を生きただけにするために、どうすればいいだろう」と思っています。**

それと僕自身、情けないけれども、「続けることってエネルギーがいるなあ」って思いますね。だからこそ、「長く続けるために必要なことはなんだろう」と考えています。人間同士の関係性、街のコミュニティの問題、経済、文化、教育、そして今さらに何か新しい視点があれば、ここから

先には進めないよな、と思っています。そういう局面にきているような気がする。

震災直後から、外からの支援や協力を得ながら、ずっとこういった問題と向き合ってきました。でもさすがに**6年経って、どんどん外からの支援や協力、アドバイスもまなざし、横やりのようなものすら減ってきています。これからは、なにか自分たちに新しい視点をもたらすようなものを、自分たち自身で見つけなければいけない。今我々はその分岐点に立たされているのではないのでしょうか。**今僕が感じている静けさは、すごく不気味な静けさです。

震災直後から、結局問題は何ひとつ解決されていない、という印象が、残念ながら私にはあります。だけど、そんなことを言ってもしかたないし、皆が前を向いてがんばっているわけですから、自分も同じ思いで進んでいきたいという気持ちももちろんある。でも、そういうある種の集合的無意識と言いますか、なにか絶対的なもの、我々が社会に生きていてお互いに感じあっている、根源的で普遍的なものとは、全く別のところに廃炉の問題があるような気がしていました。

昨年シンガポールに行ったんですが、現地で友達といろいろしゃべったり食事したりして、夜布団に横たわっているときに、こう、赤道がまっすぐに伸びていって、「ひゅっ」と、何かが通り過ぎていく夢を見たんです。ずっと続く1本の線がシンガポールを横断しているというかね。それを見たとき、我々が抱える絶対的で普遍的な問題が、廃炉の問題に、ひょっとすると置き換えられるのかもしれないな、と直感しました。

—それだけ超越的な問題だからこそ希望がある、という言い方もできるのかもしれないですね。だとしたら、一

体どう向き合っていっていいんでしょうね。

そうですね。廃炉については、誰もがそこに向かって努力している点で、非難されることなんて何ひとつないと思うんですよ。廃炉作業している方々は、我々と同じ福島の人間であり、あるいは日本人であり、つまりは我々の仲間ですよ。彼らが現場で大変な思いをしながら仕事をされているからこそ、廃炉が進んでいく。現場で作業している方々がいるからこそ、廃炉への希望も見えてきていると思います。

ただ、我々自身が、まだ廃炉というものをあまりにも知らなすぎる。どんな仕組みで廃炉が進んでいて、そこではどんな方々が働かれているのか。彼らがどんな風に生きてきて、今生きているのか。津波で家や家族を失った方も、たくさん現場で作業されていますよね。その方々の人生を我々が知り、受けとめるという文化が必要だと思うのです。なのに、それがあまりにもなさすぎる。さきほどの話と重ねると、かなりの温度差がある。その温度差を、我々は「違和感」という言葉で片づけてしまっている。

我々は皆、いろいろな情報を右から左へ流しながら、日々の出来事に背中を押されるように生きてきました。そして、東日本大震災、そして国内での原子力発電所の爆発という、史上最悪の災いが起きたわけですよ。だけどそれさえも、過去の記憶の中に眠らせてしまおうとしている自分にふと気づくことがあります。

しかし、震災から1年経った熊本に行ってみたら、思いつくんですよ。福島の、震災から1年後の空気を。まさしく空気ですよ。そしてそういう感覚を、我々は眠らせている。これは、忘れていたか薄れているかではなくて、ただ自分の中で沈黙させているんですよ。黙っている。だからやっぱり我々は、まだ語り尽くしていないような気がするんです。

我々は普段、一所懸命情報を消化しようとしている。たとえば、インターネットで始終情報を見ている。どこか遠くの国でネコが15匹子供を産んだとか、そんな情報がどんどん入ってくる。そしてそういう情報が、北朝鮮とアメリカの情勢と同一線上に並んでいる。

ある意味、これは恐ろしいことです。電車に乗っていると、皆がスマホで何かを検索している。これはなんだか恐ろしい光景だなあと同時に、これは現代の我々が含まれる社会の縮図なんですよ。もって、何にも侵されず、情報に追いつけられたいし、静かな時間を持つべきだし、そういう時間の中で、廃炉の問題を見つめていくべきじゃないかと思う。これは、我々福島に住む者にもたらされた気づきの機会なのかもしれないです。このことは、我々の子供たちに、自分の問題として伝え、問いかけていくべき

ことです。だけど、それが今まだ机上の空論でしかないというのが現実なんじゃないかなとも思います。

――もし廃炉の現場に行ったら、見たいものはありますか。

そうですね。まずはお話を聞いてみたいですね。廃炉に関わっている方々が、今どんな思いで廃炉の仕事をしているのか。そして、廃炉に携わる中で、福島の現実をどんな風に見ていらっしゃるのか。震災直後からこれだけ毎日考えていると、私も彼らと共にあるような気がしています。そういう思いで現場に行き、実際に彼らの姿を見てみたいです。

――福島の外に向けて、今何を伝えていくべきだと思いますか。

今までの日本の歴史の中で、「不条理」というものは繰り返されてきました。たくさんの不条理な犠牲があったし、この日本という国そのものが、不条理に犠牲を払ってきたとも言えると思います。そんななかで、私にとっての「不条理」の象徴は、祖父なんです。シベリアで戦死しているわけですね。あの戦争という不条理の中で、なぜ私の祖父は、極寒の地で帰らぬ人となったのか。そんなことを言い出したら、いろんな戦争における不条理はいっぱい出てくるわけですけど、でも、私にとっての不条理は、祖父の死なんです。

それが、震災と原発事故、そして廃炉という大きな問題に直結している気がします。人が何か大きなものに巻かれていって、そして思いもよらない不条理に陥っていく。そういうものが日本の社会の構造だとすれば、それをなんとか変えていきたい。それに逆らっていかなければいけないんじゃないかと思います。「カッコいいことを言って」と思われるかもしれませんが、これを実際に行うことは大変に難しいことです。大きな革命でなくても、小さな革命でもいいんですよ。その「何かを変えていこう」という同じ線の上に、廃炉はある。

地震で崩落した熊本大橋から、大学生が車ごと転落して、彼を4ヶ月かけて彼のお父さんとお母さんが捜した、という話を聞きました。現場に行ったらとても深い谷で、あまりの深さに捜索隊も諦めたそうです。しかしお父さんとお母さんは諦めずに、その深い谷底にロープとはしごで降りて、捜し続けたんです。そして4ヶ月後のある夏の日に、息子さんを捜し出しました。あれだけ深い谷底に二人きりで降りて、息子さんを捜したときの気持ちたるや、どれほど孤独だったでしょう。どれほど諦めきれずに、どれほど必死

和合 亮一 氏

に、息子さんの姿を探したんでしょう。熊本には独特の雨が降るんでね。同じ大きさの雨粒が一斉に降ってくるような、独特の雨。モヤも立つ。阿蘇独特の荒天ですね。そこで、お父さんとお母さんは、あらゆる気持ちに打ち克って、捜し続けたんです。その熊本の現場を見たことが、震災の不条理を伝え続けたいということに、自分の中でつながりました。

歴史の中で日本が体験してきた不条理を、すべて語り尽くすのは難しいかもしれません。ですが、今回我々が経験した原発の爆発、そして廃炉というものは、深い谷底で息子さんを必死に捜し続けたお父さんお母さんの気持ちと同じ線の上であって、だから同じように、**生の感情として伝えていくことが、私は大変大事だと思う。生の感情というものは、少しでも損なわれると過去の感情になってしまいます。生の感情を、どうすれば現場の感覚の持つ新鮮さとともに伝えられるのか。**

僕は詩を書く人間です。詩を二十数年ずっと書き続けてきて思うのは、「相手に聞く耳を持ってもらう」ということが、すごく大事だということです。例えば僕がずっと書いてきたシュールレアリズムと呼ばれる難解な現代詩の世界を数多くの方に受け止めてもらうには、まず受け止めてもらう方々の意識(詩への概念と意識)と経験を変えなくてはならない部分が多少なりともあるんじゃないかなと思う。現代

詩人として同じ線上で考えてみたい。震災や廃炉の話に聞く耳を持ってくれるように相手を変えていく、そしてその上で新鮮な「生の感情」を伝えるための方法を見つけることが、この先さらに重要になってくるのではないかと思います。





堀潤さん

(ジャーナリスト)

堀潤さんは、3.11前から継続的に福島に通って取材をしながら、テレビ、ラジオなどで情報発信を続けてきました。2012年にはニュースサイト「8bitNews」を立ち上げ、オンラインでの被災地の情報発信の様々な可能性も探っています。

—堀さんは、3.11前からこの地域に取材に訪れていたんですね。初めて福島に来られたときの印象はどうでしたか？

とにかく地元の皆さんが優しかったです。そして、山のものから海のものまで食が豊かで、景色が綺麗だなという印象でした。当時は特に意識していなかったんですけど、原発をちょっと高いところから見下ろしたときの光景は、今でも印象に残っています。「あ、原発があるんですね。綺麗な景色だなあ」って。海が穏やかでキラキラしていて、気候も穏やかで、よく晴れた日でした。日差しが柔らかで山の香りがして海の香りがして、天然芝のグラウンドが綺麗で。しかも東京から日帰りで来られましたね。

ご自分の住む地域を愛されている皆さんの様子が伺えて、心が豊かになりました。今NHKの朝の番組「あさイチ」に出演されている柳沢さんというNHKの解説委員が会津の出身で、よく会津弁で「福島はね」というお話をされていたので、親近感もありました。

—震災まで何度か福島を訪れる機会があったんですね。

2006年にJヴィレッジの取材をして以降少し間があいて、震災直前の2010年の秋から2011年の年明けにかけて取材を再開しました。

「銀座にあるフランス料理の老舗で、福島県産品を使ったフルコースを提供する」という福島の東邦銀行主催のイベントが開かれたんです。過疎高齢化、人口減少が進むなかでの生き残りを賭けた企画でした。東邦銀行としては、地域の顧客を育てるために、福島の一次産業をブランド化していく必要があると考えたようです。福島県産のものには実力があるけれども、いざブランド化となると山形や新潟などの周辺地域に押さえられてしまっていたんですね。でも、TPPをはじ

めとした自由貿易の時代で勝ち抜ける農業にしないといけない、ということで、東邦銀行社員が農業経営アドバイザーの資格をとって、生産者と二人三脚でブランド化を進めていくという話でした。これは、全国の地方銀行のモデルケースになるような企画ですよ。それに、福島の浜通りから中通りから会津までの野菜、魚、養殖のメープルサーモンとか川俣シャモとか、あらゆるジャンルの食べ物がおいしいということに、フルコースを食べてみて改めて感じました。

その後、東邦銀行の方と一緒に福島の生産地を回りました。そのとき、東邦銀行の方が「堀さん、これからですね」と言ったのを覚えています。「まだまだやりたいことがいっぱいある。これからアジアにも打って出たいし、東京や大阪など大都市の、一見さんが入れなかったようなところにも売り込んでいきたい。どんどん開拓して、福島発で次の時代に勝ち残れる農業のビジネスモデルを作りたいんです」と。それが2010年秋口から翌年明けにかけての取材で、放送はまさに2月くらい。そこからわずか2、3週間後に原発事故が起きたので、直前まで自分がまさに取材をしてきたばかりの皆さんの現場が、という状況でした。

すぐに、震災報道の真ただ中に無理をいって、東邦銀行の頭取に番組に出てくださいました。あのときの頭取の厳しい表情は忘れられないですね。頭取がおっしゃった言葉が一番印象に残っているのは、「**福島原発と言わないでほしい**」と。「**東京電力福島第一原発です。そこで作った電気を、福島から東京に送っていました。それなのに、まるで福島が悪いことをしたかのような印象を持たれるのは辛い**です」という言葉です。

その言葉を聞いて、僕が読む予定だったニュース原稿が、「福島原発」という言葉でスタートする文章だったので、その後も「東京電力福島第一原発」に書き換えるようにしました。ニュースセンター内で、当初「東北電力」と思っていた人が

堀潤氏

いて、「違う、東京電力だよ」と訂正するというやりとりがあったんですよ。「あそこの電気は、東京に送っているんだ」と言いながら、「自分たち東京の人間は、これほど電気を使っていることへの意識が希薄だったんだ」と思い知らされましたね。僕が取材したJ-Villageだって、当時は東電の地域振興事業の一環として作られていたのに。原発そのものを、僕はこの目で見下ろしたはずなのに。それらが自分の生活と関わっているという実感がなかったことに気づいて、反省しました。

そして、それは他の地方についても同じだなと思いました。2006年に福島で見た町の豊かさ、美しさ、風光明媚な自然、それと融和したような原発のある景色が、その後見た川内原発はじめとする各地の原発の景色と重なるところがやっぱりあるんですよ。山を抜けると海があって、海沿いには原発が立っていて、そこに連なる道が整備されていて、周辺のちょっとした施設もとても綺麗で、と。でも、ひとたび事故があれば、その美しい景色が一変するんだと思うと、単なる原発の賛否という話じゃなく、「二度と同じようなことは起きてほしくない」と思いました

――福島は震災前に取材し、震災直後から今も継続的に福島に関わっていらっしゃいますね。震災後6年が経過して、福島や廃炉に課題があるとしたらなんでしょうか。

まず、これは長期戦になりますよね。そして戦線が長引くと、予想もしていなかったような対立や軋轢、誤解などが生まれます。距離が遠くなるほど、廃炉への関心は薄れるし、情報も届きにくくなるし。時間が経つにつれ、専門性の高い作業にもなっていくので、一般市民者がついていくのも大変ですよ。メディアの報道も、事故直後からの復興などのわかりやすい活発な動きは映像にしやすいですけど、そうじゃないところの報道量は今後も少なくなっていくでしょうし。廃炉作業の重要な研究が必要になったときには、社会が追いついていけないということになります。その溝をどう埋めるのが問題ですよ。それに、地域間の温度差が広がっていることを実感しています。

2006年に僕がとび込みで取材した商店も、かつての避難警戒区域にあったので、避難先のいわきでお店を再建するそうなのですが、生活再建できている方とできていない方との間の温度差がある。それに、避難した人が本当の意味で避難先の地域社会に溶け込んでいるかということ、やっぱりそこにも温度差がある。

震災から時間が経って、復興に向かって一致団結した気持ちがだんだん薄れると、今度は具体的に生活を送る上での不協和音のようなものが、避難してきた人と地元の方との間に生まれ始めているのを感じます。そういう当事者間の誤解や

さまざまな課題に対して、当事者以外の人たちもやわらかく関わって、知恵を絞るべきなんじゃないかなと思います。当事者に背負わせすぎなもの、なかなか大変じゃないですか。廃炉だってこの先、30年40年とかかるわけですから。

先日、双葉未来学園の学生たちが、富岡のさくらモールの前で「富岡に戻るか、あるいは戻らないか」とインタビューをしていました。聞いていて考えさせられた回答は、「地元の景色が変わってしまった」というものでした。「戻ると言っても、戻る先にあるのは廃炉作業の人たちのための街だから」と。

テレビでは「ようやくふるさとに帰れるようになった。復興への第一歩だ」というような、明るい話ばかりが報道されます。僕自身も、「先行き不安なことがあっても、こうして一步一步前進している」という話として伝えるんですけど、でもそういう地元の声を聞いてみると、伝えるときの角度を画的にすると、物事を見誤るんだなということに気づきます。それによって、地元の方に余計な負担を背負わせてしまう、余計な誤解を生んでしまうことがあるな、と。

廃炉の問題も、時間が経つほど、収束するのではなく逆に細分化して、さまざまなニーズを生んでいます。事故直後は一つの目標を目指して始まったとしても、100人いれば100通りの廃炉への思いがあり、ふるさとへの思いがありますよね。だからこそ、今必要なことは、報道量を増やして、その100通りをきちんと伝えながら、皆さんの知見を集約することだと思う。

――その課題を意識して、ご自身の活動を展開していらっしゃるのですか。

そうですね。僕はなるべく現場の日常を伝えたいなという想いがあるので、特別に震災後何年目だからとか、トラブルが新たに見つかったからとかではなく、伝えるべきものや伝えるべきテーマがあれば、いつでも番組で伝えるようにしています。

ラジオ番組では、東日本震災と原発事故への支援活動をされている方々を紹介するコーナーを6年間毎週続けています。もう一つ、僕は「8ビットニュース」という市民メディアを持っています。当事者個人とマスメディアが協力して発信しようと思っていて。福島県内に住んでいる方、関わられている方、偶然訪ねた方なのが、ご自分で撮った映像などを伝えています。

伝えることだけではなく、福島に通っているうちにいろいろな方と知りあえました。個人的に県内の知り合いと飲みについてお話したり、家に立ち寄りたり、そういう日常のなかでのつながりもできました。



伝えることの大きな課題も感じています。福島地方局が、3月11日前後に結構斬りこんだ報道をしているんですね。福島第二原発はなぜ再稼働させないのか、なぜ廃炉の決断が遅れるのか、というような。地方の放送局や県内の新聞社が一所懸命に取材しているのに、その情報は東京の中央メディアになかなか上がってこないんです。たとえば福島地裁でやっていた「なりわい訴訟」という訴訟も、あまり県外では報道されない。地域で起きていることが全国報道になかなか載っていないのは、メディアが抱える構造的欠陥ですね。

富岡の一部解除後のイベントの映像とかをTwitterで投稿すると、結構反応があるんです。つまり関心がないというわけじゃない。ただ日々報道されていないというだけのことなんです。だから、特別に何かがあったからということではなく、日々絶え間なく伝えることが僕の重要な役割かなと思っています。

それでもこの6年で、ずいぶん冷静に議論ができるような素地ができてきたのではないかと思います。原発に賛成か反対か、放射能の賛否とか、少しずつですが、そういうかたちの議論ではなくなってきたように思います。賛成反対の前に、もっと現場のことを知って、具体的に自分ができる支援はな

いか、今必要な知見はなんなのかと考えられるような雰囲気になればいいなとずっと思っていたので、今「そろそろ落ち着いて冷静に語ろう」という機運が出てきたのは、とてもいいことだなと。

——福島第一原発の構内を視察されたとのことですが、視察されてみて、何か不安や不満を感じましたか？

「廃炉作業が進んでいない」とよく言われますけれど、実際に現場に行ってみると、1号機から4号機に連なる手前の敷地にアスファルトが敷かれて、建物が建ったりしているんですよ。瓦礫を片付けて整地して、作業環境も改善されて、ようやくここから本丸なわけです。凍土壁にしても、技術者の方は本来いろいろな工法を試したかったといいますし、そういう具体的な話を聞いていると、時間がかかることにはそれなりの理由があるんだなと思います。無駄に時間を過ごしてるわけではなく、現場には一進一退の攻防もある。疑いたくなるのは仕方ないにしても、確かな情報をもとに廃炉作業を見られるといいですよ。そういう意味でも、「福島第一原発廃炉図鑑」のような情報が、もっと広く伝わればいいなと思います。やっぱり「現場を知る」ということが重要なんじゃないかな。

堀潤氏

情報公開を徹底しながら国内外の技術を集め、国民の間にも「廃炉は福島だけの問題じゃなくて、国際的で大きな問題なのだ」という認識を浸透させることが必要ですよ。税金で支えるということもそうですし。とにもかくにも「福島の復興なくして日本の復興なし」というのを忘れちゃいけないと思う。それも、決して後ろ向きの作業ということではなく、世界中の高度な技術的知見を重ねるといことは福島でしかできないわけで、非常に価値のある現場なのだということも知って、支援することが大事ですね。

一方で心の問題は、ウルトラCの解決策はないのかもしれないけれど、県外の人もしりげない気づかい、声かけができるようにしておくといいと思います。特に首都圏は、自分たちの発展のためだけに人的リソースを使わない方がいい。これまでの首都圏の発展をもたらしてきたのはどこで作った電力だったのか、ということのを忘れてはいけないと思います。

——今回の廃炉フォーラムの目的の一つは、「透明性の確保」、つまり情報公開です。廃炉の課題として、住民の参画を促そうとしても、問題が専門的で高度になりすぎることが挙げられます。どうしたら住民と歩み寄ることができると思われませんか。

今回のフォーラムでは、住民、行政、科学的知見を持った専門家の方など、廃炉のさまざまな関係者が集まるんですよ。これまでの説明会では、行政や電力会社の一方的な説明を市民がただ聞くだけで、情報が届いているのか届いていないのかもわからないし、状況も進まないし不満も募る一方でした。実際、そこで説明されたり公開された資料を読んだりしても、理解するにはとても知識が必要です。だから感情ばかりが先行していく。そういった状況を相談する機会もなかった。溝は深まるばかりです。

アメリカの原発問題解決の手法で参考になったのが、「パブリック・ミーティング」という仕組みです。これは、何か問題が発生したときに、いわゆるステークホルダー（利害関係者）が全員集まるというものです。労働組合、外部NPO、学者、住民などですね。そしてそこで知識の共有が行われます。ファクトの共有です。原発の科学的な話もあれば、生活面での影響についての話もある。あるいは地域の住民が具体的にどんな不安を抱いているのか。あらゆる分野で今起きていることを共有しあって、それぞれの立場でどういう解決策があるのかを考えるわけです。

日本の場合、たとえステークホルダーが集まったとしても、「廃炉について理解をしてもらうための説明」という方向になりがちなんです。そうではなく、たとえば住民の不安について、NPO、メーカー、行政、電力会社、労働組合、その場にいる

皆がそれぞれの立場で考える。一方、行政が抱えるジレンマについても、やっぱり皆それぞれの立場で解決策を見出だそうとするんです。一方的に誰かが誰かの悩みを解決するのではなくて、お互いがお互いの問題について、それぞれの立場から解決策を見出す。それを何回もやるんです。単発のイベントでガス抜きをして終わるのではなく、具体的なアクションを導くための議論をする場を持っていく必要があるのではないかと思います。そういう意味で、今回のフォーラムでは事前に聞き取り作業をされていると聞き、可能性を感じています。



熊坂 仁美 氏

(福島県公式 YouTube チャンネルアドバイザー)

熊坂仁美さんは、インターネット動画配信などを通じ、世界に向けて福島の今を発信し続けています。これからの福島に何が 필요한のか、私たちが何に目を向けていくべきなのか、熊坂さんに伺います。

——熊坂さんは福島のいまを世界に発信する貴重なお仕事を続けていらっしゃいます。これまでの活動の経緯を教えてくださいませんか？

私が福島にUターンしてきたのは、2013年の夏でした。インターネット動画とビジネスに関する本を執筆しているうち、「せっかく福島にいるのだから、福島の良さを伝える動画を自分でも作りたい」と思うようになりました。そのときにちょうど「HAPPY」のブーム（アメリカの歌手ファレル・ウィリアムスのヒット曲「HAPPY」に合わせて踊る動画を世界各地の人々が自主的にとってYouTubeで公開するのが世界的に流行った）があったんです。知人が「HAPPY」の原宿版を作ったのを見て、「これを福島版でやったら面白いのでは」と思って。それで、福島に住むいろいろな方をお願いして踊っていただいたら面白いものになった。それが動画プロデュースを始めたきっかけですね。

その動画が全国的に話題になってすぐ、県庁の観光交流課の方から動画を使わせてくれという問合せをいただきました。それがご縁で次の動画、相馬野馬追をテーマにした「サムライガール」を撮らせていただくことになり、これもYouTubeで公開しました。

当時は福島で動画撮影ができる方の知り合いがいなかったもので東京のチームを引っ張ってきました。東京には今も月に2-3回は行っています。私の役回りは、東京のネットワークと福島のネットワークをうまくつなげていくことなのかもしれないですね。

——東京と福島をつなぐ活動をされていて、今の福島の問題はどこにあると感じていますか？

県内の新聞・TVでは、日々放射線のことが報じられて続けていますけど、一歩外に出るとそうではないですね。もう皆、福島にあまり関心を持たなくなっているんじゃないでしょうか。

——その状況をどうすればいいと思われませんか？

2015年に1度福島第一原発構内の視察をしました。「こんなにすごい施設がすぐ近くにあったんだな」と実感しました。そして、私のような一個人の手には負えない、「長い時間がかかるんだろうな」ということが、実際に見てわかりました。

もちろん廃炉は進んでいるんだろうとは思いますが、私には専門知識もないし、**自分の人生の持ち時間で廃炉のことに手をつけようとするのは大変だとも思う**。だから、私は私の立場で、福島の復興と発展のためにできることをしよう、と決めました。それは、東京とのネットワークも最大限に利用しながら今までやってきたようなPRの部分ですね。PRによって県外の方に福島にお金を落としてもらおう。そちらで私は貢献したいなと思っています。

——これまで、「HAPPY」で、あるいは野馬追、信夫山、磐梯吾妻など、さまざまな「福島の今」を発信されてきました。どんな思いで活動されているのでしょうか。

今、グローバル化が進んで、東京に行く度に外国人観光客が増えています。昔それほど混んでいなかった銀座のすき焼き屋も、先日行ってみたら大混雑でした。その店は、客単価8000円～10000円くらいで、決して安くないのにも関わらず、外国人がずらっと並んでいるわけです。「ああ、ここで相当お金が落ちているんだな」と思います。でも、それで福島に帰ってみると、外国人観光客がほとんどいない。インバウンドの格差がますます開いているなど実感しますね。これからは**動画配信でも商品開発でも、国内だけじゃなく、海外の視点がどうしても必要だな**と思っています。

——「福島」のイメージが、世界的にはとてもネガティブなものになっています。そこを反転させるために、今何を海外に

熊坂 仁美 氏



見せたいと思われませんか？

海外の方が興味を持つものですね。たとえば、福島市の名物として、「いか人参」があります。でもこれ、外国人は好んで食べますかね。もちろん郷土料理としてはおいしいものですよ。でも日本人だって、いか人参を食べるためにわざわざ福島まで来ないんじゃないかなと。思う。その一方で、福島の日本酒はこれからますますグローバルに受け入れられるだろうと思う。川俣シルクもいける。あと、自然も本当に美しい。

そんな視点で見ていくと、会津は観光資源が多くて、外国人にとっても魅力的だろうと思います。この冬、会津の雪遊びの動画を撮りました。会津地方には素晴らしいスキー場があるんですが、実は今増えている台湾や中国、アジアからの観光客には、スキーをやったことがない人も多いんです。なので、スキーやスノーボードじゃなくて、ソリの方が興味を引くのではないかなという視点で撮りました。台湾やタイの学生をグループで呼んで、スノーバギーとかスノートレッキングとかをしている動画です。これは台湾やタイ向けのプロモーション動画として使っていただけだと思います。

——熊坂さんは、そういった外部に向けた発信をされるのと同時に、地域コミュニティ作りにも関わられています。地元に対してはどんな風に関与をしたいと思いますか。

良いところも悪いところもありますけど、私は福島という町が気に入っているんです。この街のサイズがいいですね。どこに行っても必ず誰かに会うんですよ。街中知り合いだらけ、という感じが、学生時代の部室みたいですごく楽しい。東京ではそういう感覚はないでしょう。逆にここよりももうちょっと田舎に行くと、一挙手一投足、どこにいつ誰が行ったのかまで全部見られている感覚で息苦しい。だから、福島市のサイズがちょうどいい。

そして、福島は他地域と比べると商売下手というか、特にPR

が苦手だと感じます。福島に限らず、地方に活気がなくなってきています。福島市の駅前もそう。休日は皆郊外型のモールに行ってしまうからです。それも何とかしたいし、もっと街に活気を取り戻さないと。

——地方の街の活性化がなかなか難しいなかで、特に福島は原発というイメージが影響しているところもあるのではないかと思います。廃炉も今後まだ30年以上続くわけですが、熊坂さんにとって、廃炉が続いていることへの不安はありますか。

福島に住んでいる人と話していると、あまり原発の話は出てこないですね。もう慣れてしまったというか。私自身を含めて、もっと問題意識を持ってもいいのかなと思っています。でも外に出るとやっぱりそうじゃない。「福島から来たんですね」と言われる。その内外のギャップは、厳然としてあると思いますね。

——どうしたらそのギャップを埋められると思いますか？

そのギャップをうまく情報発信に利用できるかもしれない、と思ったことがあります。今年、三重県伊勢市で全国菓子博覧会がありました。福島県菓子工業組合さんからのご依頼で、博覧会での福島ステージをメディアに取材してもらって「福島の菓子は元気ですよ」と全国に発信したい、と。最初は動画制作のご依頼だったんですけど、結局イベント全体のプロデュースをすることになりました。

三重県伊勢市という、まったく福島とは関係ないところで、メディアに取り上げてもらうのって至難の業です。しかも午前中の開会式にはメディアが集まるんですけど、私たちが出るのは午後だったんです。どうしたらメディアを引き留めておけるか、真剣に考えました。それで、実行委員会の皆さんが自らプレスリリースを書いたんですね。「福島は元気です。福島は誤解されているけど、食べものは全部検査をして、安全な結果も出ています。福島は食材が豊かで、お菓子も本当に美味しいんです」って、切々

と。それを持ってメディア参りをされたら、NHKをはじめとしてすごく興味を持っていただいて。結果的に、合計27社から取材入って、地元の新聞にも大きく載りました。皇室の御挨拶よりも扱いが大きいんですよ。ビジュアルとして、お菓子屋さんたちが自らお菓子のファッションでアピールしたこともよかったと思います。

これは、**福島だったからこそ取り上げていただいた部分があるでしょう。こんな風に、「福島はもうだめだ」みたいな誤解と実態とのギャップをうまく利用して、どんどん外に出たらいと思う。**九州でも北海道でもどこにでも行って、どんどん発信していかないといけないんだなと思いました。

――とても具体的でわかりやすいエピソードです。そういった活動のなかで、事態がいい方向に進んでいるという実感はありますか。

伊勢での菓子博で、あまりお客さんが来ないんじゃないかと心配していたのに、蓋を開けてみたら長蛇の列になったんです。一所懸命にアピールしたからですね。これで風評被害が完全に解消されたとはまでは言わないけれども、「赤福」をはじめ有名菓子ばかりの伊勢で、お客さんが大勢福島のお菓子に並んで、その列が1時間も切れなかったんです。感動しましたね。やっぱり、情熱をもってアクションを起こして、頭と体を使って発信していけば、ちゃんと結果は出るんだなと実感しました。

――ネガティブな反応を受けることはありますか。

いろいろなところにおいて感じるのは、**ネガティブな偏見よりもむしろ怖いのは無関心ですよ。ネガティブな見方をしている人は、むしろ関心があるとも言えます。「放射能が怖い」という人はごく一部で、ほとんどの人は、単に関心がないんですよ。だから、私がやるべきことは、ごく一部の黒を白に変えることよりも、無関心な人たちに向けて福島の魅力的なコンテンツを出していくことかなと思っています。**きっかけが原発事故であったとしても、福島の魅力に気づいてほしい。実際、いまだに「HAPPY」の動画へのポジティブな感想をもらったりもします。

――そういったポジティブなリアクションによって、住民自身が情報発信へのモチベーションを持てるようになって、一方通行ではない、新しいコミュニケーションを活性化することになり得るかもしれませんね。

そういう部分はありますね。「HAPPY」もですが、一番そのことを感じたのは、相馬野馬追を描いた「サムライガール」で、浜通りの最も被災した地域のことを紹介したんですね。その動画を見た住民の方々に、「改めて自分の土地に誇りを持たせ」と

いう感想をいただきました。すごく嬉しかったし、「動画作ってよかったなあ」って思いましたね。誰でも自分の住む土地に誇りを持ちたいという思いがあると思います。でも、中にいると気づかないこともあるので。

先日、川俣の道の駅で、川俣シルクの組合主催で展示即売会が行われました。川俣シルクの工場は一時期、200社以上あったそうなのですが、今は一桁だそうです。最初は「単なる展示即売会で本当に人が来るのかな」と心配していました。シルクは高価ですし、そこでセールするわけでもなかったのでも、実際にはたくさんのお客さんが来て、しかも、高価なものから順番に売れていったそうです。

これはどういうことかという、今まで川俣シルクは、デパートに売られているような有名ブランドの指定工場としてシルク製品を作っていたんですね。もちろん川俣で作っていることは契約上言えません。さらに自社ブランドの製品に力を入れてこなかったのでも、川俣周辺に住んでいる人は、川俣シルクを見る機会がなかった。

高い技術を持っている地方の工場が、中央のアパレル会社の下請けをするという産業構造がかつてどこの地方でもあります。だから、地場産業なのに、住民は誰もその商品を見たことがないという状況が、川俣シルクに限らずあったんです。だけど皆地元で作っているシルクに興味があって見に来て、買っていったわけです。

売り上げは予想の3倍以上あったとか。これだな、と思いました。やっぱり、自分の地元で作っているものは身に着きたいし、食べものなら食べたいんですよね。**地元の人が地場産業を盛り上げて、まず消費者にならないと、地域が活性化しないのでは**と感じています。川俣シルクで言えば、まずは福島の川俣シルクを福島の人自身がよく知って、皆が身に着けているということまで持っていくお手伝いをしたいなと思っています。

福島の中にいると当たり前のことも、外部から見ると非常に価値が高いものがあります。相馬野馬追がいい例で、1000年も続く行事で、しかも原発事故の年もやめなかったということが、本当に驚きです。何が起きても伝統を守っていくというサムライ魂や不屈の精神をだれもが感じるでしょう。それはもしかしたら地元の人には気がつかないかもしれない。そういうことをこれからも掘り起こして発信していきたいと想っています。



玄侑 宗久 氏

(僧侶、芥川賞作家)

玄侑宗久さんは、三春町の臨済宗妙心寺派寺院福聚寺で住職を務め地域で生活をしながら、作家としての創作活動を続けています。地元新聞等での発言は多くの地域住民の心の拠り所となっています。

震災直後の事故対応で、**国や県はいわば「前科」を背負っている**と思います。野田（野田佳彦元内閣総理大臣）さんの早すぎる収束宣言、安倍さんのアンダーコントロール発言、あれらは実情とずいぶん乖離した発言であったわけで、**政治的発言は信用できないという印象を少なくともかなり多くの福島県民は持っています。まずはその信用回復が一番の課題**です。

「前科」とは申しましたが、「前科者」のその後の道がふさがれるのが、今の世の中のトレンドですね。裁判員裁判もそうですが、「世間に審判に加わってもらう」ということは、すなわち裁判での結論以外に生きる場所がなくなるということです。この寺のある町はかつて「ごめんまち」と言いました。世間では「罪びと」と言われて、たとえば百姓一揆のリーダーは、「出家していい坊さんになれよ」ということで罪が「ごめん」（免除）された歴史があるんです。

放射線の問題について言えば、今は専門家たちが権威を失墜したままの状態です。放射線による影響について、彼らは震災直後に根本的には正しいことを言ったんだとは思いますが、それはしかし「チェルノブイリ原発のように爆発するんじゃないか」というような福島県民の怯えへの答えにはまったくなくなっていなかった。だから結局非難轟轟のうちに引きずり降ろされてしまったところがある。

その頃からか、専門家じゃない人たちがマスコミを通して極端な意見を述べるという大きな流れができてしまった。その流れのなかで徹底的に調べる人は少なく、流れている情報にひきずられてしまう。心理学ではthin slicing（薄切り）というらしいですが、すなわちその瞬間に目に見えていることだけを頼りに、とりあえず判断するしかないという状況でした。

福島を出るのか、それとも残るのか。「出る」と決めた人にとって、福島は危険であり続けなければならない。自分のあのときの判断が間違っていたとは思いたくないし、思い直すということがなかなかできないんですね。この「思い直す」という作業のために何ができるのかという問題は、本当に難しいものです。

ここでもう一度、専門家に出てきてほしい。マスコミはもう一度専門家を引っ張り出して、まっとうな学問的蓄積を報告させてほしい。

小佐古さん（小佐古敏荘元内閣官房参与）がああ年の5月に、「小学校の校庭の除染基準を何mSvにするか」ということで記者会見をしました。事前に政府に提出していた文書には、年間5mSvと書いてあったようですが、PTAの声に押されて1mSvと言ってしまった。これに対してICRP（国際放射線防護委員会）は「学問的蓄積を無にした」と言ったわけですが、ここからの**「1mSvの一人歩き」というものが、どれほど大きな事態を福島県に招いているか。**飲料水の基準も同じです。アメリカが1リットルあたり1200ベクレル未満、EUは1000ベクレル未満ですが、それをなんと10ベクレルとした。10ベクレルの理由を訊かれて当時の厚生労働大臣だった小宮山さんは、「低い方が国民に安心してもらえんと思って」って言ったんですね。そのときから、「安心」と「安全」がびたっとくっついちゃって、いまや皆が「安心安全」ってつなげていうわけです。でも本来「安全」は学問の範疇だし、「安心」は人情のものでしょう。だから「安心」はしょうがない側面がありますが、「安全」の方は、もう一度専門家が自分たちの仕事としてきちんと言わないと。場合によっては、決まりを作り直すということを含めてやってもらわなきゃならないと思います。「10ベクレル未満の水しか飲んじゃいけ

ない」なんて言われたら、日本の百名水だって飲めなくなる水がいっぱいあるわけです。そんなものを鵜呑みにして、自分自身の体が4000ベクレル、5000ベクレル出してることも忘れて、福島が危ない危ないと言っている人たちが、福島県外に避難している人たちを取り込んでやっているわけですが、この勢力をどうしたらいいのかという大きな問題もありますね。

「インフォームド・コンセント」(意思決定のための情報開示)をする場合に、最悪のケースを説明しておけばとりえず訴えられないし、最悪の想定をした方が知的に感じるというような風潮があるのかなと思います。その風潮に乗っている人も多いですね。特にネットには、どうしてこれほど極端な話をするんだろう」というような情報があふれています。

廃炉の問題を考えると、ここでも根本には「行政を信じていいのか」と不信感が横たわっています。そして問題だと思うのは、「中間貯蔵施設」っていう言い草ですね。30年、30年っていつから数えて30年なのかもわからないですけども、とにかく30年後に県外に搬出するっていうのは、どう考えても無理だと思うんです。私はこれを最終貯蔵なんだと考え直して、実際に最終貯蔵しても問題ないような技術革新を進めてほしいと思っています。

周辺の問題で申し訳ないんですが、**「福島第二原発をどうするのか」ということもあります。私は、福島県にある第二原発をどうするのかという問題を、日本のエネルギー問題全体とは切り離して考えてほしいんです。**福島で直接人が死んだのは津波のためですが、「明日から搜索活動をしよう」というときに、緊急避難を命じられたわけです。その後何ヶ月も、生死のわからない家族を搜索できなかった方がいらっしゃるんです。その恨みは消えないですよ。その想いを踏みにじて前に進むことはできないと私は思う。それは感情的だって言われるのかもしれませんが、そんな状況の原因になったものをどうして再稼働するのかという理由が、オリンピックでは説明できないですよ。オリンピックのために早々に「アンダーコントロール」って言ったんだろうし、オリンピックのための電力が必要だから、柏崎刈羽が動かせない今、東京の電力の頼みとして福島第二をなんとか再稼働したいという思惑は言わなくなったってわかりますけども、それは無理だと思いますね。それはやっぱり、人としての道を踏み外せと言われてるように感じる人が大勢いるんじゃないでしょうか。

チェルノブイリ原発事故では一頭も殺さなかった家畜も、福島では事故後相当殺したわけです。そのことだけでも、牧畜家のプライドをずたずたにしたんです。そういったことへの自覚というものが、政治家には本当に足りない。

中間貯蔵施設の問題、それから福島第二原発の問題、これ

をどうするのかということは、正直に話さないと決められないと思うんです。でも結局今、**東電と国とで責任をなすりつけあっているでしょう。そういうなかで廃炉をしている。それが気がかり**ではあります。

世界中で原発が段々廃炉になっていくなかで、これは大きなビジネスチャンスでもあるわけじゃないですか。廃炉のために技術革新も起こるだろうし、面白いこともこれからいろいろ起こってくると思うんですが、まずはその前提として、信用回復が必要じゃないかと思います。

放射線の認識に戻ると、これも**「危ない」という人と気にしない人と、両極端に意見がわかれているのを国は放置しています。**何故放置しているのかがわかるように思います。たとえば除染の話で、「このままでは危ないから除染してほしい」という人たちがいる。ところが現場で除染をする作業員は「大したことない」と思っている。この両方の人間がいて、除染が進んでいるわけです。だから放置しておいた方が良く国は考えているんじゃないでしょうか。

放射線の話福島に限定してしまっただけで、他の地域のことを考えないという流れが続いていますね。私なんか天邪鬼だから、全国で年間被曝線量が1mSvを超えているところを調べてみたら、笑っちゃうような状況が見えてきます。11の県で平均1mSvを超えてるわけです。でもそうやって健康影響のない範囲での高低を比べるべきじゃないというのがICRPの方針であるらしいんですが、とは言ってもこの曖昧な状況はなんとかならないかなって思います。

――曖昧な状況にあると、住民の不安は高まりますね。社会への不信感がずっとあるなかで、震災という圧倒的な不条理が起きました。昔ならば、たとえば飢饉などの災害があったとき、宗教が民衆を導いたことがありました。今、かつての宗教が担ったような、不条理を処理するシステムがあれば、物事は進むのかもしれませんが。

たしかに、不条理を処理するシステムの一翼を宗教は担ってきました。たとえば「幻住思想」(幻住派)というものがあります。13世紀に中国に中峰明本という僧がいて、アジア全体から修行者が集まりました。この中峰さんの思想として、一人称に「幻」を使いました。その心は、「どんな私もそれは幻だ」というんです。私とは「幻」、すなわち無常の流れのなかで、縁によって今立ち上がっているに過ぎない、と。

この考えでいくと、科学は認められないんですね。今の世の中は科学が正しいと思われているでしょう。「安心」というのは人情の問題だから科学には担えないけれども、「安全」は科学が担えるじゃないか」と先程私も言ったんですが、実

玄侑 宗久 氏

際甲状腺の問題なんかは、医者の中で分裂が起こっているように見えるわけです。これはもう、すべてが幻と言ってもいいのかもしれない。科学的に誰もが納得できるような答えを導くことは不可能なんじゃないかと。

そういう意味では、「放射能そのものが幻だよ」って言い方を、私は個人に対してはしています。でも、それが多くの人の安心につながるかという、それはなかなか難しいんじゃないかなとも思う。でもたとえば、幽霊を怖がる感性と仏様をありがたいと思う感性は、目に見えないものを信じるという意味で、共通の地盤に立っていますね。だから、「あらゆるものは幻」という見方は最終的にはできるはずだと思っています。

――しかし、近現代社会を生きる私たちは、どうしても幻じゃないものを求めます。

それでも福島では、今後30年、40年、科学的に処理できると言いつつもそれ自体が幻であるかのような廃炉とどう向き合うのかという問題があります。

政治でも行政でも、「人それぞれ」と言ってしまうれば何も進みません。そうは言っても私たちはやっぱり人それぞれで、同じ現象が起こっても、それによる人生への影響も人それぞれ

れ。そういうところに、今6年経ってようやく立ち返ってきたように思います。

相変わらず行政は、どこにお金を振り分けるのかということに躍起になって、たくさんのお金が福島で動きましたね。たくさんのお金が動けば、当然どこでも格差は生まれます。成功者とそうではない人が、層に分かれていきますね。どうしようもないことですけどね。

先日、双葉郡の町村長が、「いかに被害者意識から抜け出すか」ということを仰っていました。お金だけの問題じゃないんですね。

――廃炉が終わったときに、お金以外に残ったものがまさに問われるでしょうね。歴史や伝統、人の生活がなくなっているということがないように、今何を考えればいいのでしょうか。

かつては、価値観がお金に一本化されていなかったですね。私は今、「土を甦らせたい」という想いがとてもあって、たとえば今改修している寺の下には炭をたくさん入れているんです。この本堂の下も全部炭です。これが土にはとてもいい。

枯れかかった山の木の根本に、エアスコップで穴を何十も開けてやったら、翌日芽を吹くんです。枯れたと思った木に芽が吹く。だからね、人間が枯らしてきただけなんです。植



物に寿命まで生きさせない人間のなりわいってものを考えますね。

そういうところに気持ちを注いでいると、放射能どころじゃないんですね。人それぞれ、皆「放射能どころじゃない」って思えることを持っていると思いますよ。若い男女にとっては恋愛でしょうし、人それぞれでいいんじゃないですか。誰もが共通の問題として、放射能のことを考えようとした時期の混乱は、もう嫌になるほど経験しましたしね。

福島に生まれ育った人への差別問題も今言われているじゃないですか。私は、高校や中学に講演に行ったら、「我々は強力なリトマス試験紙を持っているんだ」と言うんですね。結婚相手の適性を確認する方法を持っているわけです。今まさにその渦中にある人にはとてもできない話ですが、でも、そのくらいの気持ちでいいんじゃないかという気もしていますね。

福島県外に出ている人のネットワークが、仲間を苦しめているという状況もありますね。「子どもを連れて福島に戻ろうと思う」ってTwitterでつぶやいた途端、「子供を殺す気か」と反応する人がたくさんいる。このネットの流れは、どうしようもない大きなトレンドになりつつあります。

私は、スマートフォンと宗教の弱体化は、ものすごく関連しているように思っています。祈って答えを待つということができない。「待つことに神が宿る」ってかつて日本人は考えたわけです。待つことを抜きに宗教はあり得ない。「グーグルで検索すればいいじゃない」というところに、神は降り立たないんです。その流れも、放射能どころではないことの一つですね。これはどうしたらいいんでしょうね。

— 待つ時間が解決することがある一方で、問題が棚上げされていることとも表裏一体ですね。その場で議論したら揉めてしまうけれど、一呼吸おいて、時間が経ったら話せるということもあります。良い待ち方と悪い待ち方があるのかもしれない。

このあたりの言葉でね、「うるかすべ」って言うんですね。「うるかす」。汚れた洗濯物を、今すぐ急いで擦れば傷がついてしまう。しばらくうるかせば、軽く濯ぐだけで落ちるようになる。そういうことは確かにあるかもしれませんがね。

それから、待つことができる背景には、日本の四季、自然の変化があるように思います。

雨の降らないチェルノブイリでは、小麦に入った放射性物質が抜けなかったけれど、それとはまったく違うイネの現実を体験したわけですよ。ことわざに「人の噂も75日」といいますね。この75日は、1年を4で割ったら91、そこ

から各季節の間にある16日の土用を引いた数なんです。つまり、どの日からでも75日後は次の季節。春の噂を夏になってもまだする人はいないよ、と。それくらい、四季の移り変わりにつれて気持ちが変わるということを、我々日本人は実感しているんじゃないですか。



竜田 一人 氏

(漫画家、マンガ『いちえふ』著者)

竜田一人さんは、自身が福島第一原発廃炉作業に従事し、その体験を描いた漫画『いちえふ』の著者です。『いちえふ』は国内のみならず、海外においても反響を呼び、現在は大英博物館にも展示されています。被災地を回ってのギターによる弾き語り活動も続けています。

——現在、福島第一原発構内視察の際、バス内からの視察であればマスクは不要になっています。事故直後に比べて環境の変化を感じます。

大半の場所は、2014年頃には嚴重な装備をつけなくても、もう被曝の恐れはなかったんですよ。ただ規定上マスクをつけなくちゃいけなかっただけね。ただ、今もそうだけど、場所によって作業員の装備は全然違います。たとえば原子炉建屋に入って作業すると、当時は全面マスクのフィルターが大分汚染されたものだった。

——竜田さんが最初に作業に入られた2012年と比べて、今の構内は変わりましたか？

構内の環境も、見える風景も全然違いますね。漫画にも描きましたが、最初に入ったとき、3号機の上にはでっかい瓦礫があったんです。それが2014年に入ってみたら、もう片付いて真っ平らになっている。それだけでもかなり違いますよね。

2012年に俺がやっていたのは、4号機の燃料を取り出すための準備工事でした。でも2014年に行ったら4号機の燃料は取り出しがほぼ終わっていた。昔「野鳥の森」と呼ばれていたところも、まだタンクを作ってる最中だったけど、今はもうタンクでいっぱいでしょう。地面も、今は「フェーシング」といって舗装されているけど、前は土がむき出しでどろどろだったんですよ。そういういろんな作業を経て、環境がだんだん良くなって、今や視察にマスクもいらなくなるほどになったわけです。外からはいろいろ言われてるけど、現場の環境は着実に良くなっていますよね。

——しかし、そういった環境改善の状況は、あまり外には

伝わっていません。

なんででしょうかね。現場でやっているいろいろな作業とか環境変化とか、追っていくとすごくおもしろいと思うんですけど、マニアしか近づいてこないですよ。

——2月に一緒に視察した方が、現場について「美しい」という言葉を使いながら感想を仰っていました。

その感覚はわかります、俺は直接被害に遭っていないから。建設現場はだいたいそうかもしれないけれど、機能美というものはあるかもしれない。でもね、それをあまり大きな声で言ってしまうと、傷つく人がいるということもわかりますよね。難しいです、その辺は。

原発や周辺地域を腫れもの扱いするのも違う。でも、かといってタブー視することを嫌うがあまりに、逆に露悪的に「あそこは楽しいんだぜ」とか言って、状況を麻雀ゲームに例えてしまう文化人もいましたよね。ああいうことをしてしまうと反発を招きます。漫画を描くにあたって、そこは自分なりに気を使ったつもりです。

——先日、「ハイロミチ」という廃炉現場の情報誌が創刊されましたが、「いいところばかり伝えている」という反発があるようです。

もちろん、事故を起こしていない他の原発や核施設と比べたら、とんでもない場所であることは確かです。俺は今回の事故があって初めて原発の中に入ったから、「ちゃんと管理してるじゃん」と思ったけど、昔から原発の現場を知ってる人から見ると、大分改善されたとはいえまだまだ、という感想

を持つようです。

でも、ここで大事なことは、壊れていない他の原発の、嚴重すぎるほど嚴重で清潔な設備に比べれば、確かに1F(福島第一原発)はいかにも工事現場然としてはいますが、「今の管理のしかたであっても、被曝による健康影響が出るような状況では全然ない」ということです。作業員の健康や、周辺地域への影響といった、安全面に関して心配する段階はとっくに過ぎている。この二つはセットで同時に伝えていかないと。

たとえば、先日の浪江町の山火事の際に「マイクロベクレル単位の数字の変化があった」という報道がありましたね。それだけだとなんだか大変なことが起きたように感じる人が出てくるけれど、実際には「マイクロベクレル単位の変化なんか、環境に全く影響がないんだ」ということもセットでちゃんと伝えないと。敢えてそうせずに騒ぐなら、それはもうデマですよ。

現場のことでは、今後環境に影響が出るような事象がおこることはまずないです。でも、そういう意見はなかなか外に伝わらないですね。「現場のいいところばかり伝えるな」という意見もわかりますよ。でも、これまであまりにも悪いところばかり伝えられてきたから。むしろ悪いことが起きたときしか伝えられないでしょう。そろそろいいところもちゃんと伝えて、バランスをとってくれよ、と思いますけどね。

— 今後の廃炉に関して、不安要素があるとしたらなんでしょう。

現場の安全に関しては、もう不安はないです。ただ、**廃炉に長い時間がかかることによる社会的な影響を受ける周辺地域の人たちが大勢いる状況は、気がかり**ではありますよね。

避難解除がなかなか進まない地域で、年月が経つごとに家がどんどん荒れていく。家が荒れてしまうと、もともとは戻ろうと思っていた人の気持ちも萎えてしまう。「まだ帰れない」と言われているがために、どんどん帰還の意欲が失われていく。どこかで本腰入れないと、時間が経つほどに状況が悪くなっていくばかりです。

全部の地域を今測り直して、その数字で健康に影響があるかどうかという基準で線を引き直したら、極端な話、ほとんどの場所は避難解除してもいい状況になっている可能性がある。

ここで**いつも問題だと思**うのが、「**帰還困難区域**」という呼び名です。今現在の線量と健康への影響を検討し直せば、全然「**帰還困難**」ではないはずなのに。インフラとか治安がよくないとか、そういう「**生活が不便だ**」という意味での困難はあるにしてもね。「**帰還困難区域**」という呼び方自体、ある意味では呪いですよ。改めるべきだと思うな。たとえば「**生活不便地域**」みたいにね。

— 今年の2月、格納容器の内部調査があった際のニュースで、「650Sv」という格納容器の内部の線量だけがひとり歩きしたことがありました

東電も、情報公開自体はもう散々やってるし、データも誰でも見られるようになってるので、あとは出し方を工夫した方がいいですよ。

たとえば、内部調査をやる前に、「このくらいの線量は出ますよ」と予告しておくといいと思う。もちろん、やってみないとわからない部分もあるかとは思いますが、格納容器の内部なんて、1000とか2000という数字が出て不思議はないので。それを、予告なしでいきなり数字だけ言われると驚く人もいるだろうし。これは何でもそうで、たとえばさっきも出したけれど山火事の際に、「線量にはこのくらい変動があるものだ」とあらかじめ知っていれば、慌てることもない。ただまあ、何も起きていないうちに言っても誰も聞かないので、結局同じことなのかもしれないですけど。

トリチウム水の話も同じで、情報があまり伝わっていません。まず、あのタンクの水の中身がどういうものなのか、知っている人が少ないんです。我々マニアは、タンクの中身がALPS(多核種除去設備。セシウムを含む62種の放射性物質を除去するシステム)で処理した、まったく無害の水だということを知っているけれど、世間の多くの方は、単純にそれを全部「**汚染水**」だと思っていますから。

廃炉に関係する「水」にはいろいろな種類があります。建屋の下にある処理前の水、それをALPSで処理した水、初めから汚れていない地下水、他にもある。でもそれらを全部一緒に「**汚染水**」と呼んでいる。それぞれの「水」まわりでいろいろあったけど、今問題になっているのは、「ALPSで処理した水」ですね。

「**処理済み水**」は、**トリチウム以外の全ての放射性物質を取り除いてあるから、まったく環境に影響のない水なんです。問題は風評被害で、今は風評を恐れて放出できていないわけです。だけど、「問題は風評被害だ」とってこと自体が知られていないんじゃないかな。**「水を放出したら実際に健康に害があるのではないか」と思う人が多くて、まあだからこそ風評を恐れているわけですけどね。まず「**無害な水なんだよ**」ということをしっかり伝えなくちゃならない。そしてもう一つ、じゃあその風評は本当に起きるのかどうか、ということを考えてみてほしい。**トリチウム水を放出したら、確実に風評被害が起きる、って今皆思ってるでしょう。でも「本当にそうかな？」と俺はずっと疑っているんです。**

たとえば以前、震災瓦礫の広域処理をするときに、ものすごい反対運動が起こりましたよね。あれは、「**実際に健康に害があるから**」という理由で反対していたわけじゃないですよ。

竜田 一人 氏

ほとんどの農家は、「瓦礫を処理すると、風評被害が起こるからやめてくれ」と言っていたわけです。でも結局は、いろんなところで瓦礫の処理をやった。じゃあ、瓦礫の焼却をやったことによる風評被害はあったんですかね？ 1F（福島第一原発）でも地下水バイパスからの放出をしました。でも、放出の前後で魚の風評被害の状況に変化があったんでしょうか？

これ、誰かが調べているんですか？ 誰もやってないですよ。俺は、この点に非常に不満があるんです、ずっと。いつも何かをしようとするたびに、風評被害を恐れて大騒ぎするけれど、じゃあ本当に風評被害の増大はあるのかということは、しっかり検証するべきだと思います。

震災瓦礫の処理をしたお茶の産地の農家に、処理の前後で売り上げに変化があったのかどうか聞いたことがあります。年単位で見ると、2012年頃は確かに売り上げと生産量が共に下がっているんだけど、それは瓦礫処理じゃなくて、原発事故そのものの影響があったんですね。だからその後いったん回復したんだけど、今また段々下がっている。それは、後継者不足で生産量が落ちてたり、お茶の市場自体が衰退傾向で全国的に売り上げが落ちてたりするからで、だから結局瓦礫処理由来の風評被害はなかったんじゃないか、と。福島の漁業はまだ試験操業しかやってないので、風評被害のデータを取るのには難しいにしても、世間のイメージが地下水バイパスからの放出前後で変わったのかどうかを一度検証してみたらどうかな。「トリチウムが健康や環境に影響ない」と言うだけじゃなくて、風評被害が本当に起こるのか、ということもちゃんと検討しなきゃダメですよ。

——今回の「福島第一原発廃炉国際フォーラム」のテーマも、「何がわからないのかわからない」というところを乗り越えよう、というものです。

そう、その「なんとなく怖い」ところから進んでいないですよ。放射線についても、正しい理解を社会全体に普及することは、たぶん今の世代では難しいんじゃないかな。我々の世代、戦後教育ベッタリの教育を受けてきてしまった人間は、「原発と原発は同じで、放射能はとにかく怖いものだ」というところで止まってしまうからね。でも、たとえば福島の若い人は、放射線理解とか自分なりの放射線に関するものさしみたいなものが、しっかりしてるでしょう。

福島の若者は特にしっかりしてるし、県外の若者、東京の若いヤツも、理解も自分のものさしも結構ちゃんとあるんですよ。だから、今後学校教育で基本的な知識を教えながら、世代交代が進むにしたがって、正しい理解は進んでいくんじゃないかという期待は持ってます。

——廃炉そのものについて、望むことはありますか？

廃炉は、ちょっとずつでもやるしかないよね。今言われている30年や40年より、もう少し時間がかかるかもしれませんが。でも、それもどの程度までやるのか、という話はあると思う。今やろうとしているように、全部解体して更地にするのか、合理的なカタチで石棺にするのか。

周辺地域の住民の気持ちを考えれば、きれいに更地にして返すのが一番いいと思いますけど。環境に影響がないカタチで石棺にしたとしても、残したままの近くに帰るのはちょっと気持ちが悪いだろうし。

何が合理的なのかという基準だけでなく、気持ちの問題を全く考えないわけにはいかない。そのバランスが大事ですね。かといって話し合いで解決しようとしたって譲れない部分はお互いにどうしてもあるから、どこかで誰かが腹をくくって、「俺が責任をとりまします」と言わなきゃならない局面はいくつか出てくるんじゃないかな。

俺の個人的な希望を言えば、あそこはきれいに更地にして返したいですけどね。それで、跡地に野球場を作ってもいいし、野外音楽堂を作って、そこでライブができれば最高ですよ。まあ、その頃にはもうさすがに歌えないと思うけど。

——県内の高校生が以前、話し合いだけで解決しようとすると永遠に何も決まらないと言っていました。

ほらね、若者の方がしっかりしてるんですよ。まずは誰が責任者になるのかということをはっきりさせなきゃいけないでしょうね。たとえばさっきの話、トリチウム水の放出は誰が決断するのか。もちろん東電の一存でやるわけにはいかないし、原子力規制委員会の命令でやるわけにもいかない。ならば県が放出しろと言えるのか。あるいは総理大臣が決断することなのか。誰が言っても必ず批判されることがわかってるから、誰も言わない。

——今、廃炉全体の問題を見渡したときに、一番気にかかるとはなんですか？

構内のことは着実に進んでいるので、今は特に心配していません。やっぱり風評のことが一番気にかかりますね。いろんな人が風評の心配をしてますけど、じゃあ何故風評が起こるのか、という議論はされていないように見えます。

たとえば、瓦礫の広域処理や地下水バイパスからの水の放出のように、前もって計画を予告して、それに関するデータを公開しながら実行した場合、俺の知る限り風評被害が悪



化することはなかった。ところが3年前、「1Fの瓦礫処理でダストが出たから、米が汚染された」という騒ぎが起きたことがありました。1Fで3号機建屋上部の瓦礫を撤去したとき、微量のダストが舞って、汚染数値が少し上がった。それと、その年に南相馬のごく一部の米から基準値超えの汚染が出たことを関連づけたんですね。それで米が売れなくなった。これは風評被害ですよ。

これは、我々の職場にかけられた冤罪として改めて検証して欲しいと思っています。検証もしていないのに、当然のように1Fのせいとされているのは、今でも納得いきません。あのことで、余計な不安が残っているとすれば、それは周辺地域にとっても不幸なことです。将来のためにも、解決できるなら解決した方がいい。

ほかにも水のことで言えば、タンクや用水路からの漏えいや数値上昇があるたびに、大騒ぎになりました。実際には環境的には何の影響もありません。計画外の事象で風評が再燃する象徴的な例だと思います。処理済み水を放出するという決断が長引いたために、対策が進んで安全性は高くなったとはいえ、タンクや配管から大規模な漏えいがあったら、これはもうおそらく、計画的な処理済み水の放出とは比べものにならないほどの風評を呼ぶでしょう。つまり今、起こるかど

うかもわからない風評を恐れるあまりに、より大きくて確実な風評のリスクを育てているんじゃないかと思うんですよ。

もちろん、漏えいがないように現場は懸命にやっています。たとえ漏えいがあったとしても、実際の影響は皆無です。それでも万が一漏えいがあれば、どんなに「大丈夫」というデータを出しても誰も聞いちゃくれないのは、これまでさんざん経験してきた通りです。

実際の漏えいがなくともね、今強硬に反対している漁民の姿が繰り返し報道されることによって、世間に「漁師があれだけ反対しているんだから、やっぱり危険なんだ」というイメージが植えつけられることにはなりませんか？たとえそれが風評を恐れての反対だとしても、タンクの中身の区別さえつかない世間に、健康被害を恐れているか風評を恐れているかの区別なんか、つきやしないでしょう。

つまり、漁師が強く反対している今の姿そのものが、現在の風評を長引かせ、将来の風評への芽を育ててるんじゃないですか。

いわきや相双の漁師の気持ちもわかるし、深く同情もします。でもね、だからこそ石を投げられる覚悟で、「最終的に自分たちのお客さんになる全国の消費者から、自分たちの姿

竜田 一人 氏

がどう見えて、それがどう影響するか、一步引いて冷静に見直してみたら如何でしょう？」ぐらいは言ってもいいかなと思っています。

このことで、昨年歌を作りました。

『第三双洋丸』

あんた いつまでそうして 陸で拗ねているんだい
あたしはいつでも あんたを乗せて 漕ぎ出すその日を待っている

あの日 大波 越えて 沖へと逃げた
呑まれた港 戻れぬままに 煙に追われて 酒場街
汚れた海と 人に言われて ネオンの海で 錆びついて
だけどごらんよ 水も魚も 今じゃちっとも さすけねえ
あんた 見せておくれよ 浜通り男の 心意気

あんた いつまで黒い 風に怯えて いるんだい
噂恐れて ほどけぬもやい 風に鳴るのは その綱さ
あの日 流れた 穢れと 呪いの水は
黒潮親潮 ぶつかる波に 溶けて崩れて 消え果てた
おだづ奴らは イワシの群れさ 言いたい奴には いわしとけ
ヒラメにスズキ ソイにアイナメ 今じゃ大物 こでらんに
あんた 潮目の海は いつでもあたしら 待っている

汚れた海と 人に言われりゃ カスカだるなと 胸を張れ
見せておやりよ 水も魚も 今じゃ本当に さすけねえ
あんた 帰る港に 明日は大漁の 旗が舞う

双相の漁師に言いたいことをこの歌に込めたのですが、あと行政や計画を進める人たちに言いたいことは、「不安に寄り添うな」というと乱暴だけど、「根拠のない不安に過剰に配慮し過ぎると余計に不安を招きますよ」ということです。

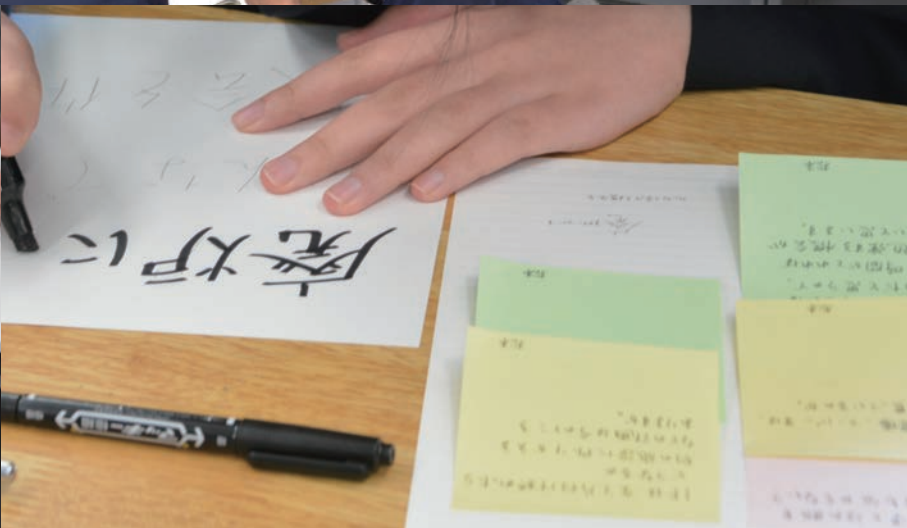
食品の安全基準値の話がわかりやすいかな。事故当初500Bq/kgに定めた基準値を、あとから100Bq/kgに引き下げた結果、「やっぱり500Bq/kgは危険だったんじゃないか」という余計な不安を持つ人が増えました。あるいは除染目標値もそうでしたよね。当時の環境相の「1ミリシーベルトまで除染します」発言で、「やっぱり1ミリ以上は危険なんだ」という余計な不安が根強くなりました。これはどちらも、世間の風当たりの強さでびびって基準を厳しくしたが故に、無用の誤解や不安、そして風評を招く結果につながりました。逆効果だったわけです。

つまり、一部の科学的根拠のない不安に配慮するあまり、責任ある立場の者が優柔不断な態度を見せると、一部の不安が世間全般に伝染するんです。これも、今までさんざん繰り返

返されてきたことですよ。もう6年も同じようなことを繰り返してるんだから、いい加減学習して欲しいです。

科学的に安全ならば、根拠のない不安には取り合わずに、毅然として計画を実行する。これが結局、冷酷なように見えて一番実のある対処法だと、これまで観察してきた結果、俺は確信しています。

1Fの処理済み水の放出に関しても、やっぱり世間からの風当たりは相当強いでしょう。でも、そこでビビらずに「俺が全責任を取る」と実行を認可してくれる人が現れて欲しいと願っています。ただ、それって結局、誰なんですか。



プレリサーチ 座談会 01

福島高校

県立福島高校は、文部科学省よりSSH（スーパーサイエンスハイスクール）の指定を受けており、これまで海外を含む他の地域と福島県内との放射線量測定や、毎年のパリでの研究発表、世界の高校生との交換留学などで、放射線についての学習と情報発信を進めてきました。昨年からは福島第一原発廃炉についての学習を重ね、高校生としては初めての構内視察を実施。「自分のふるさとを自分自身の言葉で語るように」と、日々学びを深めています。今回の座談会には、2名の3年生、8名の2年生が参加しました。



■鈴木太朗くん（3年生）

まず、疑問が3つあります。1つ目は、**トリチウム水の処理問題についてです。トリチウム水を海洋放出した場合のリスクを、誰にどう説明して、どんな合意を形成しようとしているのでしょうか。**2つ目は、廃炉後の土地利用についてです。具体的に言えば、イノベーションコースト構想の現実的なプランは現状どこまで立っているのかということ。3つ目は、今回の福島第一原発の事故を受けて、**他の地域の原発もほとんど停止している状態であるわけですが、それらはこれからどうなっていくのでしょうか。**廃炉に向かっていくのか、どれもこのまま維持していくのか、あるいは再稼働するのか。

それと1つだけ、疑問に近いものの、不安に思っていることがあります。デブリのことです。**デブリは今どこにあって、どのような状態になっているのか**ということがわからない点。そもそも、気中や冠水など、今言われているような工法で、安全に取り出すことができるのでしょうか。その際の安全は確保されているのか、と不安に思っています。

■法井美空さん（3年生）

私は、ずっと考えていたら、何が何だかわからなくなっちゃいました。開沼先生が以前、「社会科学的知見が足りていない」とおっしゃっていたのですが、そもそも「社会科学的知見」というのはなんなんだろう。「科学的なこと」ならば学校でも理科の授業などで学習するのですが、「社会科学」って具体的に何のことなのかなって。

それともう1つ、**今までいろいろな場所で廃炉や放射線についての発表をしてきましたが、「私たちの話を、全体的にあまり理解していない人が多いんじゃないかな」ということを不安に感じています。**

——相手に前提知識がないということですか？

はい、私たちの話していることの前提となる知識がない人が多いです。そしてさらに、**私たちの発表そのものも、内容がちゃんと伝わってるのかな、という不安があります。**今まで、「**廃炉や放射線のことを伝えるのが私たちにできることだ**」と



思ってやってきたんですけど、それが伝わらないのなら、「じゃあ私たちができることって何なんだろうな」と。

——そもそも前提知識がない人が多いし、「知らないのであれば、自分たちが頑張って伝えよう」と思って伝えてはみたものの、それすらも理解してくれているのかいないのか、その手ごたえがないということでしょうか。

そうですね。それに、**相手が自分の意見をもともと強く持っている人である場合、私たちの意見を伝えても、納得はしてもらえないのかもしれない**。

もう1つ疑問があります。**原発をもし使わないことに決めたら、そのあとのエネルギー供給はどうするのか**ということです。とりあえず新しい発電方法が見つかるまでの代替として、私は原発がいいんじゃないかと思っているのですが、世間ではそういう順番で考えるのではなく、まず「賛成か反対か」に分かれてしまっています。論点は、原発が良いとか悪いとかではなく、エネルギーの問題なんじゃないかなって思うんですけど。

——まず「賛成か反対か」という議論になってしまうと、何か困ることがありますか？

はじめからそういう話になってしまうと、「原発をとりあえず利用することも大事だし、ほかの発電方法を見つけていくことも大事だよな」というようなほかの意見が、議論の外に置かれてしまいます。

■菅野翼君（2年生）

廃炉に関する情報を、もっとわかりやすい形で公開してほしいです。同時に、福島第一原発の構内視察や廃炉についての説明会も、できるだけたくさんあった方がいい。

今回こういうフォーラムはありますけれど、**これまでは住民との対話が十分ではなかったんじゃないか**と思っています。住民に廃炉のことが伝わらないまま物事が進められてしまっただら、それは不安です。

それから疑問として、**何十年もかかる廃炉を担う人手や技術の継承はどうしていくのかな**と思っています。それと最近では、**サソリ型の調査ロボットが格納容器の中に入ったとき、**

ニュースでは盛んに「失敗した」と報道されていましたが、**実際には何か新しい情報が得られたのか、あるいは東電としてはどう結果を受け止めているのか、**ということも気になります。

■沖野峻也君（2年生）

廃炉のロードマップが漠然としていて、たとえば「〇年までにデブリを取り出す」とは言いますけれど、じゃあそこから逆算して今何をしているべきなのか、それをどんな方法でやるのか、という具体的なことが、私たち外の人間にはわかりません。そこが少しでもわかれば、少なくとも私は「**未来に向かってる**」と思えるし、安心できます。そうやって、**もっと未来を見せてほしい。**

東電は福島第一原発を廃炉にする一番の当事者ですが、**現場でやっているからこそ気づけるような課題をわかりやすく公開すれば、世界中でその解決法を探していけるんじゃない**でしょうか。たとえば、デブリを取り出す方法にしても**一体どの工法がいいのか、私たち自身が判断できるような材料が欲しい**です。

——国や東電が勝手に決めて、あとから一方的に知らされるような感覚があるんですね。

もうひとつ、**イノベーションコスト構想について思うことがあります。立派な構想だと感じるだけに、もう少し具体的に考えてほしい。たとえば、海外の研究者を招致する**という話があるのですが、**現実的に外国の人が福島に来てくれるのか、と。**

先日パリに行ったとき、現地のパソコンで画像検索をしてみたんですが、「福島」という検索ワードを入ただけで、**とんでもない画像が出てきたんです。たとえ研究者自身は正しい情報を持ってはいても、周囲の人や本人の家族が心配**になってしまうのではないかと。

——そうですね。その状況では、**心配になってしまうでしょうね。**

それと、**取り出したデブリの管理について不安に思っています。デブリを取り出して、でもその後はどうするんでしょう。**

福島高校

このあたりはまだ地震も多いし、いつまた津波が来るかわからない。

それに関連して、今止まっている**全国の原発には、それぞれ使用済み燃料がある。原発をまた動かすにせよこのまま止めておくにせよ、どのみち使用済み燃料は処理しなくちゃいけない**ですよ。フランス人にもこのことを真剣に訊かれたんですが、「まだ決まっていない」と答えたら、とても驚かれました。

最後に、東電は実質今国有化に近い状態で、廃炉などの費用として間接的には税金を使っているわけです。でも本来、公共施設など、納税者にとってなにかプラスになるものを使うのが税金の原則ですよ。でも廃炉は、いわばマイナスをゼロにするために税金を使っている。

つまり**廃炉が終わっても、更地になる、ゼロになるだけで、費用を負担する次の世代には結局何も残りません。私たちの次の世代は、何ら得することがないのに、ただお金を払うだけです。そのあたりを、東電はどう説明するつもりなのかな。**

■福田翔君（2年生）

現在**21兆円を超えている**と言われている予算ですが、これからもっと増えるのではないかと思います。でも、その中で廃炉にお金をかけ過ぎると賠償などの多方面に影響が出るんじや

ないかと思います。除染にもお金をかけ過ぎているようにも思う。住民としっかり話し合って、どこをどれだけ除染をしていくのか、その必要性をもう一度きちんと検討した方がいいんじゃないかな。

それから、**放射線の知識の浸透が県内外ともに不十分なので、このまま廃炉を進めていくとまた風評が生まれる気がします。たとえばトリチウム水を海に放出しても実際に放射線の影響はないのに、そういう知識が浸透していないから、風評が生じる心配がある。とは言ってももうトリチウム水放出の議論は時間がかかりすぎているので、早く方針を決めて、地域住民に放射線影響の心配はないということの説明をしてほしい。**

■菊地友希乃さん（2年生）

最近私がテレビを見ていないからかもしれないけれど、あまり**廃炉のことがテレビで報道されない**ですね。ちゃんと伝えられていないと、震災を知らない世代の子たちが、将来自分ごととしては考えられなくなってしまうんじゃないかな。確かに**大人が起こした事故ではあるけれども、今の小中学生がいずれ担っていく問題です。**

そういえば、福島第一原発を視察したときに、「月刊いちえふ」という刊行物の存在を知りました。あれをいろいろなところで読めるようにしてほしいです。



—「月刊いちえふ」は、ネットで読むことができますね。
どんなところが面白かったですか？

とてもわかりやすかった。それから、構内で働いている人の趣味とか楽しみとか、仕事以外のことも書かれていて、私はそれがとても面白かったです。あれを読むと、「福島第一原発」という大きなものではなく、一人ひとりの人の顔が見えてきます。ニュースだと、一人ひとりの人はあまり出てこないから。

■大河内綾奈さん

知識がないのか、過剰に騒ぎ立てる人がいることに、怒りを感じます。半面、私も福島高校の放射線班で正しい知識を学んでいなかったら、そういうことにも無関心だったのかなとも思います。**SNSでは廃炉についても否定的な意見が多いかな。**そういう場で発言しない人の意見も気になるので、一般の人同士がもっと議論できる場があったらいいと思います。

■松本陽菜乃

専門家が、一般の人々に向かって一方的に「この基準だから安全だ」と押しつけても、受け取る側は納得できません。わかりやすく、詳しい知識がなくてもわかるように説明してほしいです。廃炉について知ることもとても大切なので、**学校でも本を読んだりして勉強する機会があるといいです。**

—学校で勉強する時間をとったとして、ほかの同級生たちは興味を持てると思いますか？

以前、地域医療について学ぶなかで、廃炉についても少し触れてくれたけれど、あまりよく伝わっていなかったかな。でも、たとえ興味や知識がなくても、やっぱり福島県民だから、県外に出れば絶対質問されます。そのとききちんと答えられるように、勉強はしたほうがいいと思う。

—どんな方法なら勉強しやすいと思いますか？

私たちが福島第一原発の視察をする前にしたのは、予習をしてきて、付箋に疑問点を書きだして、それについて話し合ったり教えあったりするという方法でした。これは、すごくよかったですと思います。

■荒帆乃夏さん

廃炉について、「いろいろな問題が複雑にからみあっている」と感じています。せめて、「どの問題の解決がどうして難しいのか」という要点がわかっただらいいと思う。

フランスでも、現地の人たちに福島や福島第一原発の現状があまり伝わっていないと感じたので、**海外の人にも、わかりやすく簡潔に伝えてほしい**と思う。

■石田あやめさん

避難指示があった地域で、**今ストレスからの震災関連死が多いです。そういう避難の方法も、放射線測定の方法も、「もっとこうの方が良かったのではないか」という教訓があったはず。その教訓は、きちんとほかに活かされているのでしょうか。**

それから、**行政は、いろんな意見の中間値を一所懸命にとる必要はないんじゃないかな。全員が納得するような結論なんて絶対に無理だと思うし。ひとつひとつの提案を、賛成とか反対とかいちいち全部聞いていたら、永遠に何も決まらないです。**

情報開示にしても、「すべての情報をまとめてみました」という、**一体どこから見たらいいかわからないようなものが多い**すぎる。自分が知っている情報と知らない情報、その選別がうまくいかない。情報は多いので、それを全部包括しようとしたら、余計にわかりにくくなってしまいます。

最後に、**今「原発避難いじめ」の問題が持ち上がっていますけど、そういう問題が出ている時点で、根本的にこれは道徳の問題ではないか**と思います。「廃炉」とか「放射線」、あるいは「福島」というフィルターがかかっているから見えにくいかもしれないけれども、**今圧倒的に足りないのは道徳**なんだろうと思う。

—ありがとうございました。では、自由に感想や質問をお願いします。

今、「廃炉を40年で完了させよう」と言っていますが、もっと長いスパンで見た方が現実的ではないかと思います。

—なるほど。では、なぜ40年で完了させようと言っているのだと思いますか？

とにかく早急に解決したいという事情があるんだと思います。現状考えられるプランの中で、一番短いものを選んでいないかと思う。廃炉のプランを考える上で、参考になるデータも少ないだろうし。

—もっと長くかかるプランにすると費用も嵩むし、政府や東電ができるだけ短期間でやりたいという事情もあるかもしれないし、社会的には「できるだけ早くやれ」という声も

福島高校

ありますね。「廃炉の後の土地利用をどうするのか」という議論も、ちょっと今はまだ言い出せない空気もある。そういう状況をどうすればいいと思いますか？

確かに、長いスパンで見ようとする、いろいろな問題も出てきますね。だから、ある程度妥協しあうことも必要なんじゃないかな。そのためにはまず、より多くの人にこの問題について知ってもらうことが必要だと思います。このままでは議論が進まないというか、議論する場すらないのが現状。そもそも一般の人は、短いスパンで廃炉計画を立てた場合のメリット・デメリットについて考える機会もないと思います。だからまずは、そういう議論ができるように、**私たちのように若いうちから知識を持ってもらうことが必要**だと思う。

—若い人が知識を得るにはどうしたらいいと思いますか？

余程のもの好きでもない限り、自分では廃炉について調べたりはしないので、**まずは学校教育に取り入れることだと思います**。福島では今、放射線教育に力を入れています、廃炉についても導入するのが良いと思う。

—なるほどね。ほかにありますか？

授業で網羅的な知識をつけることも大切ですが、**もっと対話の場も必要**だと思います。**私たちが福島でやっていることを、ほかの地域でもやってほしい**。でも、ほかの地域の人たちにしてみれば、福島の問題は一番大きい問題というわけではないですよ。ほかの地域にはほかの地域で、それぞれきつと知ってもらいたい問題があるはず。それをお互いに押しつけあっていたらダメだとも思う。

—その点については、どうすればいいのでしょうか。これは廃炉の問題だけでなく、いろいろな問題とも共通しています。たとえばCO2が増えて温暖化が進むと、ツバルという国が沈むかもしれないという問題があります。だからツバルの人は、「温暖化しないように、皆でCO2を削減してくれ」と訴えます。国際的にも「倫理的にはそうしなければならないね」という合意形成がとれましたが、アメリカのトランプ政権は「そんなことはアメリカには関係ない」と言う。トランプ大統領には別の倫理があって、「アメリカはCO2を削減したことで、経済に悪影響がでて困っている」と言うんですね。それと同じように、「まじめな優等生が、勉強すべきだと言っているだけだ」と、ほかの人は思うかもしれませんね。

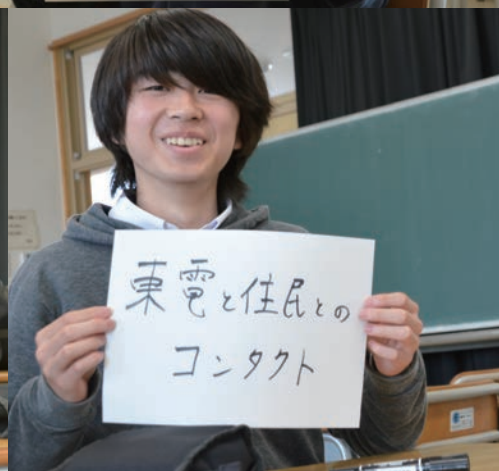
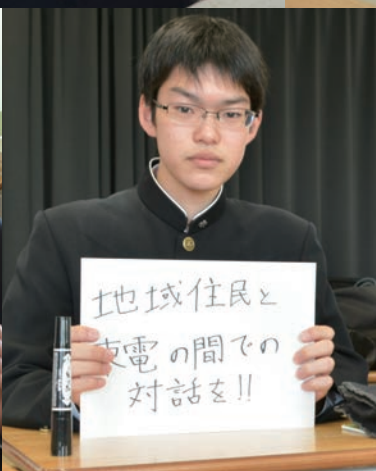
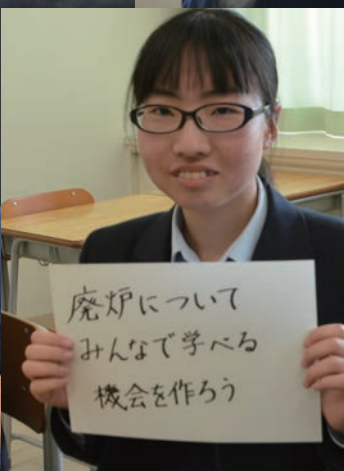
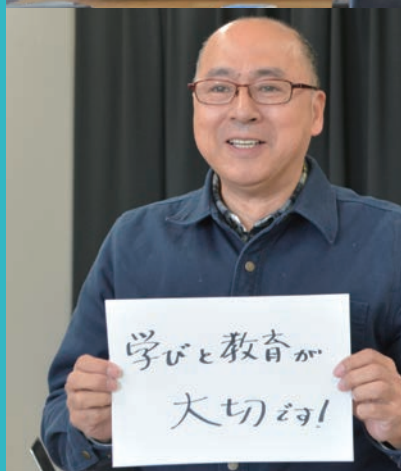
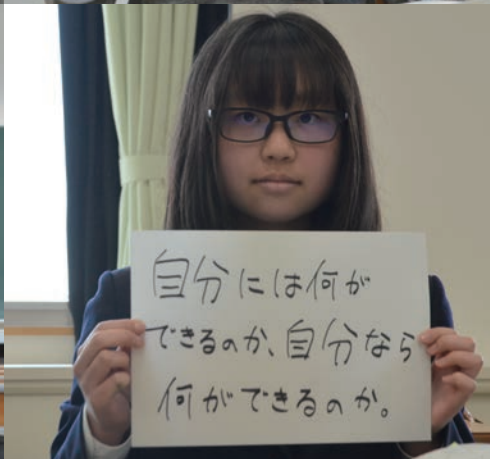
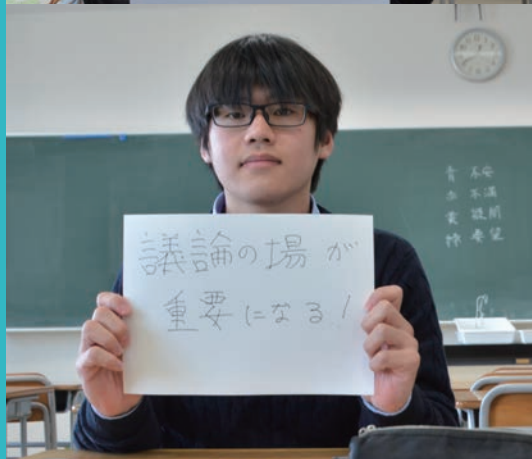
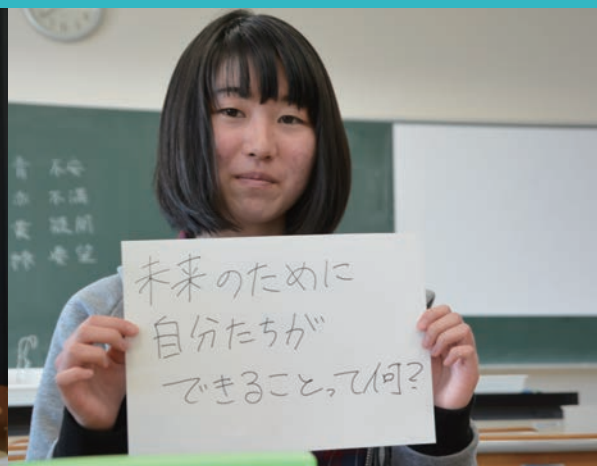
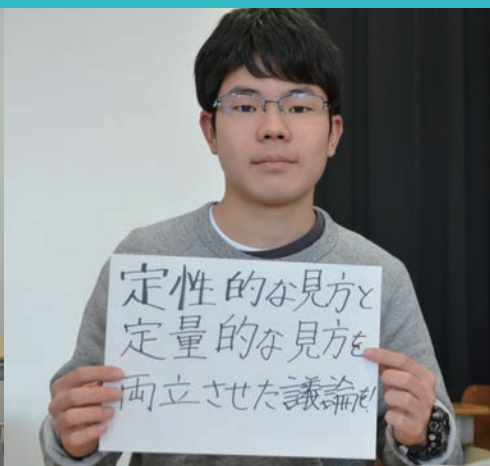
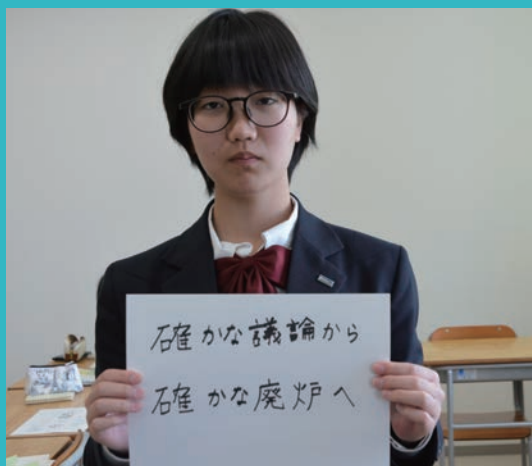
皆さんは、どうして廃炉について勉強するのですか？

僕は、テレビでニュースを見ていて、「実際のところはどうなっているんだろう」と思ったことがきっかけです。知りたいと思っていたら、福島高校にたまたま放射線班があったので。

—「知りたい」という気持ちの受け皿が学校にあった、というのもよかったんですね。

皆さんがなぜ興味を持ったのかということを考えてみると、何かヒントがあるかもしれません。

私は放射線班ではないし、皆に比べたら知識もない方です。でも、私も福島に住む者として、きちんと知っておきたいと思いました。そう思った一番のきっかけは、アクアマリンふくしまで、魚の解体をしたり試食をしたりする「調ベラボ」というイベントに参加したことでした。「**放射線の話をするよ**」と構えると、**もともと放射線に興味がある人しか来ないかもしれませんが、食べることだったら誰でも興味があります**。おいしい魚で人を呼んで、そこで放射線の話もするとか、皆が面白い、楽しいと思えるような仕組みを作れば、**自然と放射線についても知るきっかけになるんじゃないかな**。



プレリサーチ 座談会 02

外国人

福島県内に住む海外出身の人々にとっても、福島第一原発廃炉は他人事ではありません。文化の違いや距離、言葉の壁もあり、それぞれの母国になかなか福島の現状、廃炉の実態が伝わらない。その中で、海外と福島の橋渡しをする役割を担いながら、福島や廃炉のことを正確に知り、伝えようと日々苦心している方も多くいます。

今回の座談会には、福島への観光客の誘致に携わっていたり、福島で大学院に通っていたり、地域に根づきながら福島の外とのコミュニケーションも日々意識している海外出身の方が参加しました。



■エイミー・ラングさん（アメリカ国籍・自営業、以下ラングさん）

「福島は危ない」という人もいれば、「福島に住んでも安全だ」という人もいて、どちらを信じればいいのか正直わからなくなっています。もちろん東京電力の言うことも信用できませんし。

福島に住んでいますので、私自身は「最悪のケースにはならない」ということは信じたいのですが、海外に住んでいる人は簡単に「福島は危ない」という情報を信じてしまいます。そういう意味で、福島に住んでいる人が一番真剣に考えているとおもいます。

友人の中でも「福島の食べ物は安全だと言われているけれど、本当は安全じゃないからね」という意見が出ていました。彼らに対して、私はどう言ったらいいのかわかりません。

私自身は福島の食べ物を安全と信じて食べていますが、周囲にはいろいろと言われているのかもしれない。日本人の中にも、「福島の食べ物は危険かもれない」と疑っている人はいますよね。

■ちょん ひょんしるさん（韓国国籍・NPO法人ふくかんねつと理事長、以下ちょんさん）

私は、福島県の食べ物が一番安全だと思うようになりました。放射線に関する説明会や勉強会に、週3、4回の頻度で参加し、自分で学んだからです。自分で学ばないと他の韓国人に説明できませんから。

福島では米を全量全袋検査していますよね。これはとてもすごい話です。日本は世界一安全基準値が厳しいのにもかかわらず、

それをちゃんとクリアしている。だから知らないで不安に駆られているより、自分の目で放射線検査の現場を見た方がいい。韓国から友人が来たら現場を見に連れていくことにしています。もう数百人は連れていきました。

■ラングさん

海外メディアはどうしても「福島は危険だ」と言いたがるんですね。先日TSUTAYAで借りたドキュメンタリー映画でも、放射線が高い、と言っていました。

■ちょんさん

私が今一番心配なことは、放射線の問題より、「廃炉が本当に安全に収束する方向にあるのか」ということです。地震があるたびに、「福島第一原発は大丈夫か？」と心配になります。

■マクマイケル・ウィリアムさん（カナダ国籍・福島大学助教、以下マクマイケルさん）

津波がまたきたら、と思うと心配ですね。今の仮設の堤防で大丈夫なの？と。

■ゾーイ・ヴィンセントさん（イギリス国籍・福島県在住、以下ゾーイさん）

福島第一原発に視察に行ったときにその質問をしたら、「今は当時とは状況が変わりました。温度もとても下がっていますし、その上万が一のための非常電源など安全対策をしています



ので、同じような大きな津波がもう一度来て浸水したとしても、前回のような状況にはならない」と説明してもらえました。でも、そんなことは一般の人は知らないですよ。

■ちよんさん

余計なものを省いて、もっとわかりやすく核心のところを伝えてほしいですね。

■ゾーイさん

構内視察に行って現場で質問ができれば、その場できちんと回答をもらえるので、すごく安心するんです。でもそれは視察に行った人だけなんです。視察に行っていない多くの人には伝わっていません。

たとえば、ロボットのことも訊きました。(2月にロボットが格納容器の内部調査に入った際の報道を受けて)「調査に入ったロボットが、内部の放射線量が高すぎるせいで壊れて動かなくなってしまったんですか?」と。すると、「ロボットが動かなくなったのは、壊れたせいではなく、内部の瓦礫に引っかかって動かせなくなっただけです。壊れたのはカメラだけ。そして、それはあらかじめ起こることがわかっていた」という答えをもらいました。それで私はすごく安心したんですけど、でも「じゃあ、何故それをもっと皆に言わないのか」と思います。それを大々的に言わないから、皆の中に不安が残ったままになってしまった。

私だけじゃなく、外国人が同じ質問を何度もしているはずな

んです。だから、東電は私たちがその情報を知りたがっているということを知っているはず。なのに、何故もっとそういう質問を活用しないのでしょうか。

■ルイス・カニエテさん(フィリピン国籍・福島大学研究員、以下カニエテさん)

僕も同じことを思いました。調査ロボットが誤作動を起こしたことについて、4つくらいの国内外のメディアを見たら、正常に動かなくなった原因をきちんと解説していたのは1つだけでした。他のメディアはもうひたすら線量の高さを強調するばかり。読み方によっては、「線量が高すぎて動かなくなった」と読めるような書き方をしているものもありました。

■ちよんさん

韓国ではもっとひどいことになっていました。「もし人が入ったら、線量が高くて30秒で死ぬ」という報じ方です。「人が格納容器に入ったら死ぬ」という記事が伝わるうちに、「福島全部が格納容器の中と同じ状態だ」ということになってしまった。

■ラングさん

今、「福島」は「原発」と同じ意味で使われてしまっていて、私はそれがすごく悲しいんです。東京電力は東京の電力会社なのに。私の息子がアメリカや大阪に行った時も、「母親が福島にいる」と話したところ、「それはひどいですね。福島にいても大丈夫なんですか?」と言われたそうです。

外国人

福島はとてもいいところです。なのに、ひどいところのように誤解されてしまう。それがとても悲しいです。

■アンディ・クームズさん（オーストラリア国籍・福島県観光コンベンション協会、以下クームズさん）

2014年から1年間オーストラリアの大学に通うために帰国をしていた際も、クラスメイトに「福島にまだ住んでいる人がいるの?」と言われてしまった経験があります。すごいショックでした。

■ロバート・エッサーさん（ドイツ国籍・福島大学留学生、以下エッサーさん）

情報が足りないということは感じますね。僕が福島に行くと言ったら、ドイツの大学の指導教官から「なぜ福島に行くんだ、危険じゃないか」と言われてしまいました。僕の手元には福島県の発行するパンフレットとウェブサイトのURLがひとつだけしかなくて、教官に反論するための材料がありませんでした。

■カニエテさん

そして、日本国内からの情報発信には限界があるのかもしれないですね。福島県内に住む我々がいくら安全だと言っても信用されないんです。自分が住んでいる場所だから正常性バイアス（自分にとって都合の悪い情報を過小評価する心理状態）がかかっているんじゃないかって思われちゃう。客観的なデータや根拠に基づいて第三者が検証して、「福島は大丈夫だ」という結論を発表してもらえばいいと思う

■エッサーさん

福島に来る前に教えてもらったウェブサイトは、実際にドイツ人の科学者たちが現地です放射線測定をして「安全だ」と結論づけたものでした。でも、第三者のドイツ人が発表したデータがあるのに、あまり知られていないからやっぱり状況が改善しないんですね。

■マクマイケルさん

外国人留学生たちを呼ぶ仕事をしていますが、彼らがいままで疑問に思うのは、「本当に廃炉はできるの?」ということです。無駄なんじゃないのかな。今はまだ開発されていない技術を使わなきゃいけないから、お金も時間もすごくかかるし。正直廃炉は難しいんじゃないのか、と。福島第一原発を実際に視察した後でも消えない疑問です。

——もし、汚染物質が漏れない状態で管理できるならば、廃炉しなくてもいいと考える人がいます。

■ラングさん

ですが、それでは構内で働く人がずっといることになってしまいますね。それに、「もし何かミスがあったら」と心配し続けることにもなるので、感情的には気持ちよくないです。

■エッサーさん

廃炉で出るゴミをどこにどう廃棄するのかという問題もありますよね。既に原子力事故以外のゴミが大量にあって保管できれていないという問題が日本にはあるのに、さらに汚染土や瓦礫など廃炉作業によるゴミが大量に出てしまいます。それを永久にどこかに保管できるのかという疑問があります。

■ちゃんさん

今の状態のまま保管した方がいいんじゃないでしょうか。

■ゾーイさん

でもそうすると、何百年も現状のまま、ということになりそうですよね。でも、デブリを取り出してしまうとずっと処理に困るということもあり得るのでしょうか。

——そういう可能性も指摘されています。今、廃炉とは別の問題として日本全体では築地市場の豊洲移転の問題が騒がれていますが、ここでも同様に「少しでも汚染が残っているならきれいにしてくれ」という立場と「これ以上きれいにしようとしたら、そのコストや廃棄物をどうするのか。きりが良いところで打ち切ろう」という立場とが対立する問題があります。これは、他の問題でもよく見られることです。ある程度まできれいにしたらそこまでいいでしょうと一定の汚染を残しつつ管理する。これをブラウンフィールドと言ったりします。反対にあるのがグリーンフィールド。完全にきれいな状態に土壌をもっていくこと。

■ゾーイさん

これは私の周囲で聞く意見なのですが、日本政府は「自分たちはこんなにがんばって対応しているんだ」という姿勢を国民に見せなきゃいけないと思っているようだ、と。除染も同じことで、効果はともかくたくさんやって、そのせいでたくさんの汚染土を作って、あんなに積み上げるような状況を作っていました。とにかく「何かをがんばっているんだ」ということをアピールしたいんじゃないんですか。「自分たちはがんばっ

「て廃炉しようとしているんだ」という姿勢を、アピールしなければならぬという事情もあるんじゃないか、という意見を海外の友人から聞きます。

——そうは言っても、汚染水対策はやらなければならないことでしたし、デブリ取り出しも、あのまま放っておいたら腐食など重大なリスクがあるので、やらなくてはいけないことです。ただ、どこかの段階で「これ以上はやらなくても問題が起きない」という状況になる可能性はありますね。

■カニエテさん

それでも研究を続けることは大切ですよ。これまで内部を見ることもできなかったのが、実際に見られて、状態を少しでも掴めたんですから。やっぱりどんな判断をするにしても、データをきちんと蓄積していくことが大事。そしてそのデータをもとに、どこかの時点でさまざまな判断を下すとしても、今はまだ研究をとめてはいけません。

■ラングさん

でもそれも、福島と東京では感覚が違うかもしれないですね。東京の人は「もう廃炉にしなくてもいいんじゃない？」と思うかもしれないけれど、私は福島に住んでいるので、「もっとしっかりやってほしい」と思う。もし何かあれば実害を被るのは福島に住む人であるわけなので、少なくとも東京に住んでいる人に判断してほしいです。

——将来のお話をたくさんいただきました。一方で、現時点での不安や疑問はありますか？

■ゾーイさん

情報発信に関するところで、2つ要望があります。まず、正確かつアクセスしやすい場所に、しかもわかりやすく、という情報源があまりないということが、私は今の問題の根底にあると思っています。どこかの専門誌に日本語で正確な情報が書かれていても、私たち外国人はその情報にアクセスできないんです。

それから、我々外国人がどんな誤解をしているのかということが、そろそろわかってきたのではないかと思います。なのに、それに対するQA式の説明がない。私たちは個別にFacebookなどで説明をしていますが、個人がやることには限界があります。もっと包括的に説明してほしい。

役所が責任をもって情報を出したからないように見えます。彼らが躊躇しているゆえに、こういう誤解の多い状況が続いてしまっているのではないのでしょうか。

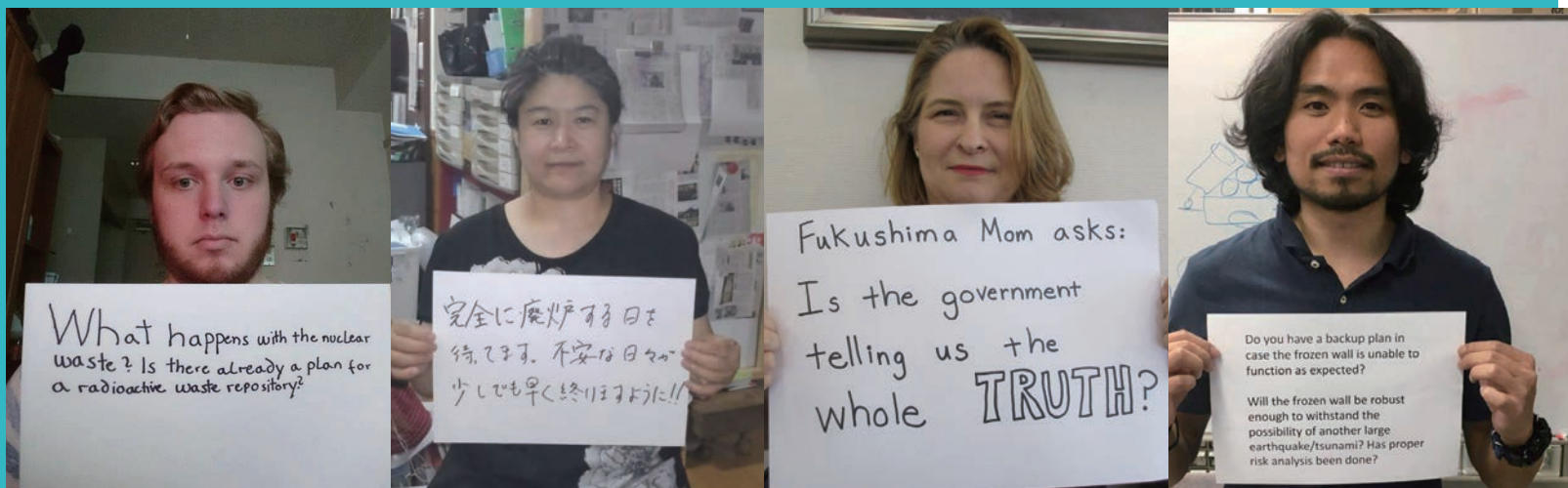
——役所が情報を出すことに躊躇するのは何故だと思われませんか？

■ゾーイさん

後々、出した情報が万が一間違っていたら、国や県が間違ったと責められるからじゃないでしょうか。それに、情報がたとえ正しくても、あとで定義や基準などが変化するかもしれないです。

QA式の情報公開をやってほしいけれど、一方でそういうことをする主体が政府だと、今は信用できないと思われちゃうかもしれません。

誰が伝えるのか、ということは重要ですね。それでもやはり見せ方はうまくない。サイトを見ると大量に情報があふれてくるようなものではなくて、かみ砕いたわかりやすい表現で伝えてくれるものが欲しいですね。



プレリサーチ 座談会 03

双葉町の人々

東電福島第一原発事故の影響で全町避難が続く双葉町の住民にとって、廃炉は自身の生活や今後に関わる問題であると同時に、事故の記憶を呼び起こすものでもありました。帰還の意志の有無にかかわらず、双葉町住民同士のコミュニティの再生やそれぞれの新しい人生設計にとって、廃炉はどのように位置づけられているのでしょうか。

今回の座談会には、避難生活を送る双葉町町民が参加しました。



■小川貴永さん（以下、小川さん）

私は養蜂業を営んでいるのですが、養蜂場から1kmも離れていないところに、常磐自動車道の工事で出た汚染土があります。そのくらいの距離なら蜂は飛んでいきます。道路は皆さんが使うものですから仕方ないとはいえ、**公のことが優先されすぎて、私たち個々の権利が護られていないように感じています。**

廃炉や除染作業が、こんな風に地域産業の振興にとってデメリットになる点も多いんじゃないでしょうか。そういった**デメリットも全部隠さずに伝えた上で、双方が納得して進める方法についても話し合わなければ、震災前と同じように、国や東電からの情報を鵜呑みにするような状況になってしまうんじゃないですか。**

■井戸川則隆さん（以下、井戸川さん）

去年視察で構内をバスで回ったとき、ごく限られた場所ではありましたが、一番線量高い場所が100マイクロシーベルト毎時でした。**線量が高い場所もあるような構内の作業を、これから30年40年と続けていけるのか、**という点が、炉作業について一番疑問に思っていることです。廃炉を続けていくという意味では、**次の世代が育ってこなければ、やはり**

作業は頓挫してしまいますよね。燃料の取り出し作業も、本来であれば十分な設備があるところでやるものではないでしょうか。炉の中のものが外にでないように遮蔽しながらできるものなのではないでしょうか。

一方で私自身は、「自分が次世代に何を残せるのだろうか」ということを考えています。我々が生きられるのは10~20年ですが、住民が帰り町の再生ができるのか不安があります。私は行政区長として、町は捨てられないですし、生業は捨てられない。でも、じゃあ町で生活するとして、たとえばため池の水を利用して農作業をするわけです。ため池の水によって放射線が遮蔽されているんだと思いますが、ため池が使われなくなって、底土が見えるようになったら、底に溜まっている放射性物質が飛散してしまうんじゃないかと心配しています。空間線量も、平均の数値は低かったとしても、スポットで高いところがあるんじゃないかと不安です。

■舘林孝男さん（以下、舘林さん）

原発を作るとき、「これが動くのは30年ですよ」と言われました。でも、結局事故の日まで40年運転したんですね。

私の家は大熊町と双葉町の境にあって、今、優先して除染している双葉町の駅付近とは離れたところにあります。どう

なのかな、置き去りになるのかな、という気持ちがあります。

私ももう60を過ぎているから、双葉の土地を子供にどう伝えていくか、考えています。自分の土地がそのままあるんだから、私は自分の子供に相続したい。でも、実際には避難して、もう戻らないと決めて、相続もしないから土地の賠償をもらえない人もいます。

いろいろな復興関係の会議を開いていて、会議だから一応皆意見は言うけれど、「もう戻らない」と決めた人は、「帰らない自分の意見には説得力がない」って思っているようだし、そういう会議にはあまり意味がないような気がしますね。

——「もう戻らない」と決めている人にとって、廃炉は既に考えなくてもいい問題になっているのでしょうか。

■只野董さん（以下、只野さん）

戻らないと決めている人にとっては、もう興味がない問題だと思います。

——「興味を持っている人」と「そうではない人」との両方がいるということではなく、もう興味がない？

はい、双葉町の同級会をした時もそういう話題は一切出ませんでした。私がちゃんと現状を話さないというのもあるんでしょうけれど、でもそれももう、どうでもいいかなという雰囲気ですね。

——時間が経ってしまいましたからね。それでも、復興拠点には人が住むことになるわけですよね。

廃炉に30年かかるとして、私たちの年齢だと50歳、60歳とかになるんです。その年齢になってから、帰るといふか移住をするかという、なかなかしないんじゃないかと思えます。もっと年配の方にしてみれば、人生の半分以上を過ごした土地ですから、思い入れも強いと思えますけれど、私たちは幼少期の記憶の薄い時期を除けばたかだか十数年住んだだけです。いつまでも真剣に向きあえるかという、もっと時間を別のことに使いたいと考えてしまうかな。だから、「もう帰らない」って言う人は多いですね。

それから、私は双葉町から福島市に避難したんですが、「双葉出身です」って言いたくないです。「大変だったね」って一言で片づけられてしまうし、賠償金を貰っているということでもない言葉をかけられることもあります。金額も、何億も貰っているとか、全然間違った情報になってしまっていて。今後の賠償金の見通しはわからないですけど、避難先の生活が落ちつく程度貰えば、私はそれで打ち切りでいいと思っ

てます。

友達は県内外に散らばって生活しています。このあいだ、「双葉町に一時帰宅した」と言って同級生のひとりが写真をインターネットにアップしたら、皆が反応したんです。「ああ、あそこだ！」って。誰かが帰って、その写真を見れば思い出すし、興味も湧くんです。でも、行けなければ興味も湧かないし、廃炉のニュースもどうでもよくなってしまふ。

そういう機会を親が失わせている部分もあると思っています。私も一時帰宅したいと言ったんですけど、親が行かせたくないって言うんですね。被曝させたくないって。

大熊町出身の知人が、恋人から「放射線浴びているから別れよう」みたいなことを言われて、それはショックでした。年配の人は特に過剰に反応するところがあります。「双葉の女は嫁に行けない」とか。私たちだって、「子供や孫に双葉を受け継いでいきたい」と思うことがあるけれども、周りがそんな風に思っていたら引き継ぎにくい。もっと双葉町の明るいイメージが欲しいですね。

——明るいイメージとは、どういうものでしょうか。廃炉作業が続いているうちは難しいですか？

NHKで6年間続いている「被災地からの声」という番組のような情報は、**すごく大事だと思います**。逆に、他の原発がある地域ではそんなに原発が心配という話にはならないですね。熊本の地震のときも、「鹿児島原発（川内原発）では何も問題がない」というテロップがテレビで流れたんですが、ツイッターとかでも現地の人がそんなにそのことで騒がなかった。福島でこういう大事故があったのに、他県の人たちは原発の心配をしていないことが、私は不安になります。

■館林さん

私の家はそんなに線量が上がらなかったけれど、でも娘には行って欲しくないという気がする。息子も行きたいと言っていたけれど、「勝手に行ったらだめだよ」と言いました。大丈夫だということだけれど、**親の立場ではやっぱり心配ですよ。頭ではわかっていてもね。**

■小川さん

震災があったとき、上の子が1歳で、下の子は半年くらいだったんですね。2人とも双葉町が認識できていない時期に避難することになって、仮設住宅で年を重ねてしまった。私もそのことへの責任を感じているわけです。だから、賠償のことはきっちりやらないと、**と思って、私は裁判を選択しました。時間はかかるけれど、やることが重要だ**と思っています。

双葉町の人々

———そうですか。養蜂をされているとおっしゃっていましたが、今どういう状況ですか。

私の家は原発から3 kmで、養蜂場も線量が高いし、同じ場所で再開は難しいですね。でも、自分で一から始めて、友達と6次化も進めていたところだったんです。思い入れがあるので、時間はかかってもなんとか双葉でやりたいですね。他県で営農再開したりしてなんとか生活を立て直さなければならぬと考えている人と、町に思い入れがあって元の姿に戻りたい人と、両極端になっている気はします。

■井戸川さん

実際、避難して他の場所に家を建てると、もう今の生活が大事だからね。双葉は二の次になってしまう。避難した人たちの子供たちは、避難先でも友達ができていて、双葉を思い出せと言っても難しいでしょう。町としては、なんとか集

まって成人式を計画していますが、今の子供たちが二十歳になったときに知らない人と会って、会話が弾むかと言うと、それは無理ですね。町の再生と関わってくるかもしれない、難しい問題です。廃炉よりも難しい。

■館林さん

交流会をしても、廃炉の話は一切出てこないですね。廃炉の話はストレスなんです。

■井戸川さん

東京で、40年ぶりに同級生が集まったときに、「今、避難生活をしているんだ」と言う、「原発による避難生活について、東京では報道されなくなってしまったから知らないし、もう自宅に帰って生活していると思った」と言われました。現状のことを、福島県内だけでなく、もう少し全国で報道されてもいいんじゃないですか。最近、私たちも、「双葉町



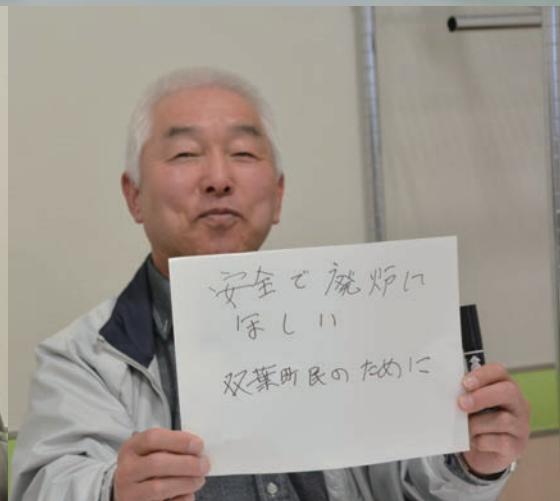
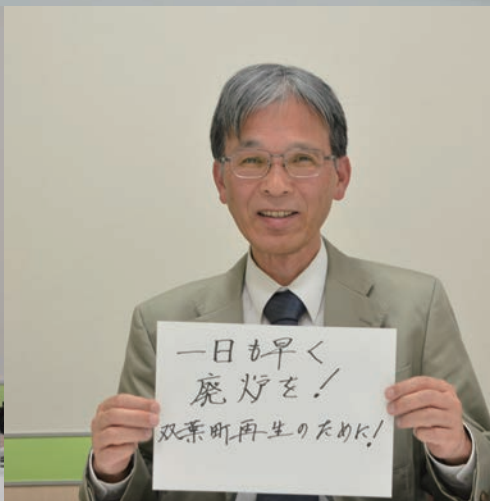
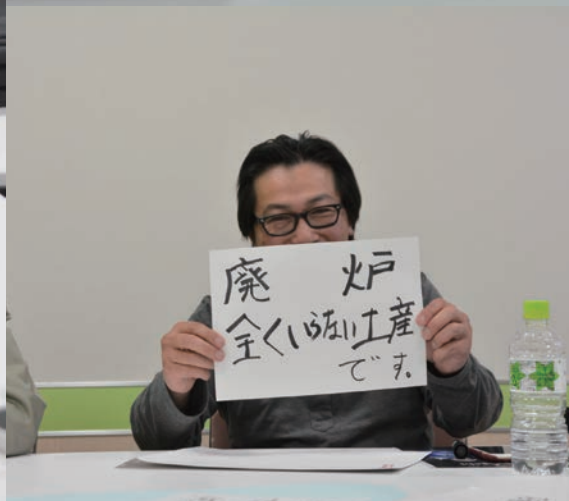
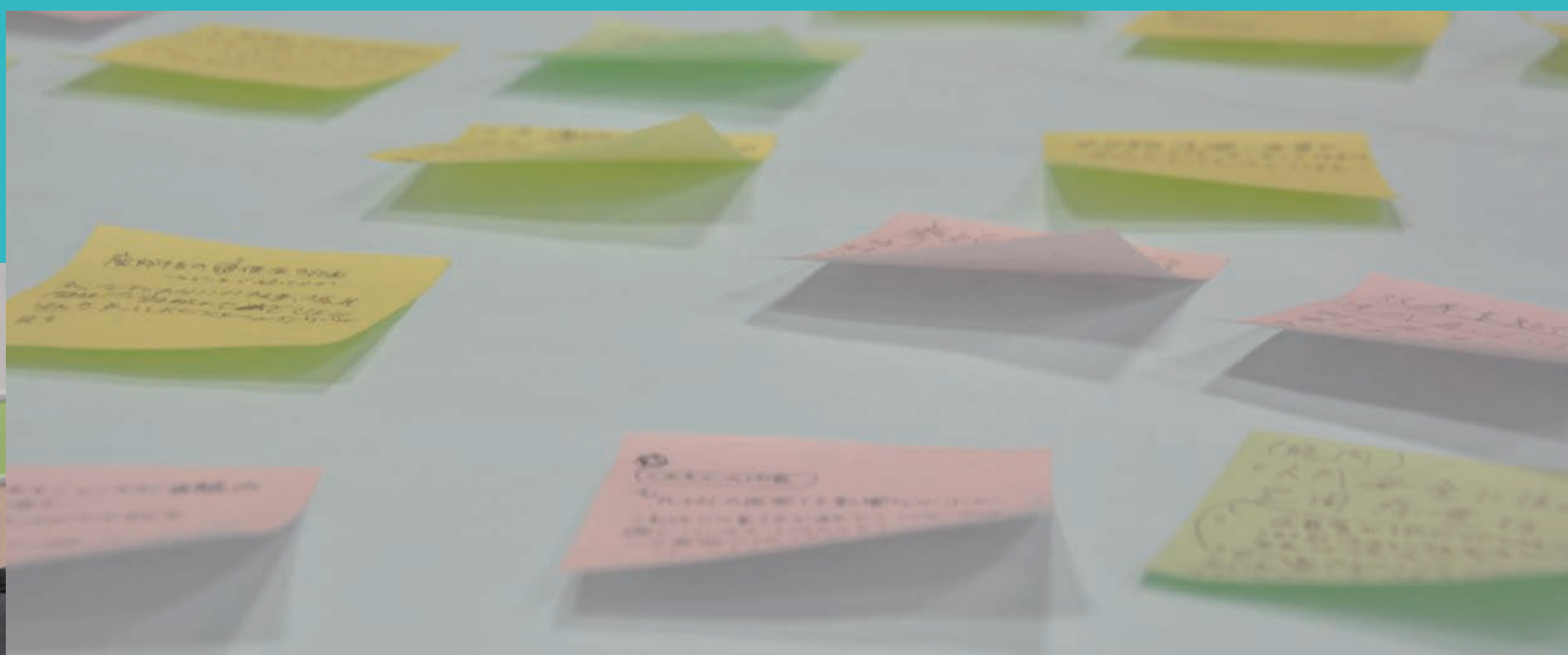
から来た」と話をしているものなのかどうか、考えながら話すようになりました。県内ですらそういう状況ですから、県外に行った人はなおさら言えないですよ。

——何か、他の住民から聞いていることはありますか。

■芳門里美さん

今回参加できなかった方からは、「テレビでは、デブリを

取り出すことも危険、そのままにしても危険、と報道していた。どうにもできない状況を報道されるばかりで、不安だ」という意見、ほかには、「帰還した人が、本当に帰ってよかったと思っているのか」、「双葉郡の線量が不安」、「今後廃炉作業をしていくなかで、また何か事故が起こらないのか」といった声もありました。一方的なテレビなどでの報道に、漠然と不安を抱いている状態が続いているようです。



プレリサーチ 座談会 04

田村市都路、川内村の人々

東電福島第一原発事故の影響で一時避難指示が出された田村市都路町、川内村、浪江町などの市町村では、避難指示解除後の新しい生活が始まっています。移住者の受け入れや生業の再建などあらたな地域づくりへの取り組みがはじまる一方で、日常生活に密着した放射線の問題以上につかみどころのない、「近くて遠い」廃炉の問題をどのように捉えているのでしょうか。

今回の座談会には、20代～30代の復興支援にたずさわる若者が参加しました。



■山代真希さん

廃炉が終わる40年後、ここがどんな地域になっているのか、想像が付きません。廃炉は、私にとってすごく近いけどすごく遠いもので、漠然とした不安があります。たとえば、もしもう一度爆発があったら、どうやって知ったらいいのかな、爆発以外も何かリスクがあるのかな、とか。

■松崎亜美さん

廃炉が終わった後はあそこに入れるようになりますか？終わった後どのくらい経てば帰れるんでしょう。

廃炉について少しネットで調べてみたけど、結局よくわかりませんでした。たとえば、ロボットが中に入ったときにとんでもない線量が出た、とテレビのニュースで言っていたけど、その感覚が掴めないです。汚染水も、地下水がなんとか、とよく聞きます。でも、タンクに溜めていると聞くけれど、一方で使い終わったタンクを解体しているとも言っていて「えっ、じゃあタンクに入っていた水はどこに行ったの？」と思いました。

■西川珠美さん

私は、もしまた爆発するとかのリスクがあるとしても、それ以上に川内村に住みたいという思いが大きいです。でも、川内村に住むことにはリスクがあるんだと発信すると人が来なくなるかもしれないし、今住んでいる人はリスクを受け止めなくちゃいけないとも思うので、そこは悩みます。

今、役場に勤めている人の間で、リスクについての認識があるのかという点が不安です。もう認識が薄れて、「そんなこと

にはならないよ」って思ってるのかな。いざというときには役場が重要になるので。

■関さん

僕は、放射能についての議論になること自体が怖いですね。今度、東京でイベントをやる予定なんですけど、騒がれたらいやだな、と。

——格納容器にロボットが入って、内部の線量が発表されただけで大騒ぎになりましたね。騒がれること自体、地元としては不安ですか？

■関さん

不安というよりも、ちゃんと返せないだろうなって思うんです。もしつこまれたらちゃんと答えられない。僕自身の知識の問題だけじゃなくて、明らかに立場が明確な人とコミュニケーションする方法がわかりません。そもそもコミュニケーションの形が、今までと変わってきているような気がします。今の経験がいい機会になって、コミュニケーションの新しい形が生まれるのかもしれないなと思います。今はまだどうしても感情に左右されがちなんですけど、感情とロジックの両輪でコミュニケーションできるようになったらいいですね。

今聞いていて思ったんですが、僕も廃炉作業中のリスクのことを知らないです。僕が住んでいる地域も、危なくなるのかな。そういうことについて、考えないようにしてきたのかもしれないです。どうせ、考えてもどうにもならないことだと思ってい

たんです。どこかで諦めていたのかもしれない。

——帰還しない理由として、廃炉が終わらないことを挙げる方もいらっしゃいます。

■山代さん

実際にここに住んでいると、そこまで怖いと思うことはないけれど、県外の方は「廃炉作業をがんばってます」と宣伝すればするほど逆に怖がるかもしれません。

亜美ちゃんの年代だと、普段こんな話は出ないのかな。

■松崎さん

私は、もうそもそも原発が嫌い。だから、何を言われてもマイナスにしかとらえられません。存在自体が嫌いです。だって、いきなり爆発して、避難しろって言われて、よくわからないけどあちこちが汚くなったから除染がどうこうって言われて、突然生活が変わったんです。嫌いです。嫌いだから、知りたくないです。敢えて関連のニュースを聞かないようにしました。ニュースになるときって悪いときだけです。ロボットが壊れました、何かが漏れました、と。そういう悪いニュースを見ると、常に危険なのかなと思ってしまう。

■山代さん

私は、一応理解しようと思って、福島県の公式ホームページを見ました。でも、そもそも言葉がわからないんですよ。

廃炉を説明している図の中の言葉が、なぜかカタカナ。「どうして日本語で書いてくれなかったんだろう」って思います。サブドレンとか、トレンチとか。あと、燃料棒が溶けてるとか残ってるのかを比較する数字があって。でも、それを見ても、「だから何？」と思いました。それが多いのか少ないのかもわからない。

■松崎さん

平成27年に見直しましたって書いてあったけど、「2年前に見直してこれなの？」って。

——それは、ずいぶん細かく見えていますね。

■山代さん

見て、理解しようと思ったんですけど、結局あきらめましたね。これはもう駄目だなって。むしろ何も見ない方が良かったんじゃないかな。混乱して余計にわからなくなるだけです。

——2011年当時に比べれば、放射線の知識をある程度持っている人も増えたと思います。だったら、廃炉についても方法はありそうですね。

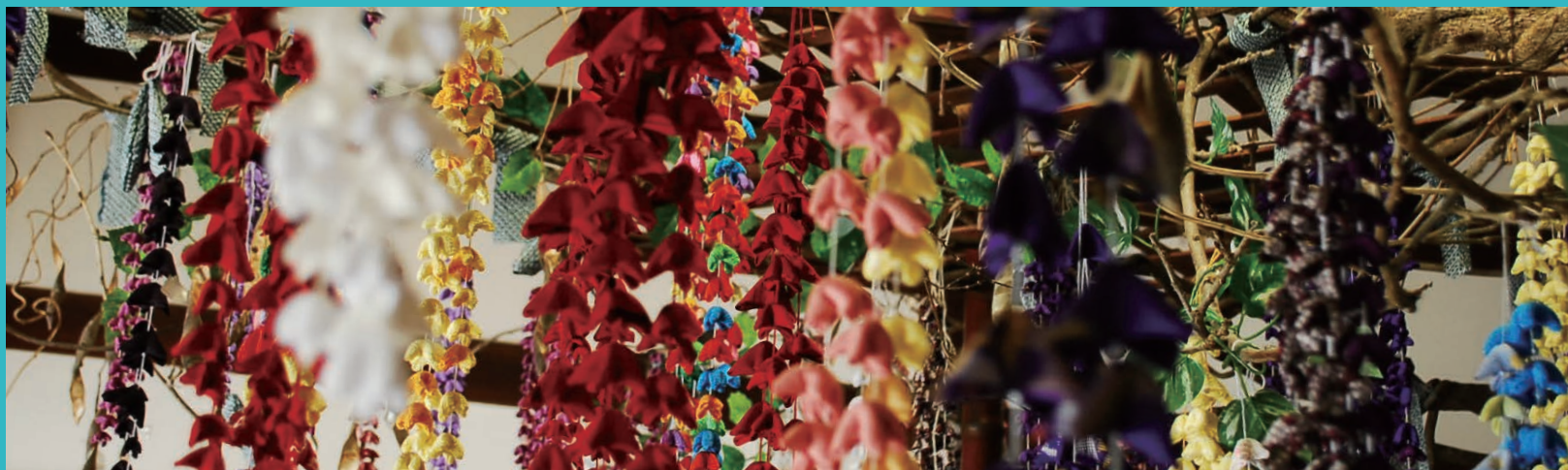
■山代さん

「なすびのギモン」(除染情報プラザ作成の小冊子)はすぐ読めましたね。ほかに環境省から分厚い本を渡されましたけど、あれはわからなかったな。絵や補足が丁寧にあるといいですよ。それと、気になったときにまずネット検索するので、ウェブサイトがあるといいですよ。

■関さん

放射線のことで言えば、「福島は危ない」の声が大きく聞こえると思っていましたが、普通の生活ではそうそう聞きません。それでも、流通の段では「買わない人がいるなら仕入れない方がよいね」となってしまうんだと思います。だから、直接生産者と消費者をつないで売れば目があるかもしれませんね。

一方で、東電の善悪はそう単純な話じゃないと僕個人は思っています。僕は震災後に移住してきました。だからまだこの地域に住んで3、4年なので滅多なことは言えないですけど、でも東電のおかげで町が潤った部分は否定できないんじゃないかな



田村市都路、川内村の人々

と思います。沖縄の構造にも似てますよね。そういう構造が、福島を機に変わってほしいと思います。

それから、福島に関する報道を見ていると、ナチスのプロパガンダに似ていますね。でも、それに踊らされてたらつまらないとも思う。デマを流す人は、僕らのようにここで生きている人の顔が見えていないと思うので、ちゃんと顔を見られるような機会が作れたらいいとも思います。

■小林奈保子さん

私は、生活インフラの話ですが、288（国道288号線。通称「にーぱっぱ」）を通してほしいです。

先月浪江町に引っ越したんですが、浪江から田村に行こうとすると、いちいち通行証明を役場まで取りにいかなければならないし、その間のわずか5,6kmの区間、288が通行止めになっているせいで、20kmも遠回りしなければなりません。時間もガソリンもかかるし。

それから、国道6号線が寂しすぎますね。業者は日々行き来していて、「頑張ってるな」とは思うけど、実際に自分が夜間通るときは怖いです。雰囲気も暗いし。灯りとか、大型テレビを設置して福島のことを映してくれてほしいのに。

――では、廃炉に関する疑問はありますか。

■山代さん

電力のことを考えたときに、原発は何基までなくなってもいいんでしょうか。原発が止まったら首都圏は困るという話だったけど、実際今止まってますし。他の原発も廃炉になるんでは

うか。自然エネルギーは自然エネルギーで問題があるとも聞きますけど。

■小林さん

廃炉の工程がわかりません。でも、わかったところで私に何の関係があるのかな、とも思う。生活に身近じゃないことだから。

■松崎さん

廃炉は何から始めて何をしているんですか？今は、冷やして、取り出しそうとしているのかな。

■小林さん

冷やしているものが、高い放射線を出し続けているんですよね、きっと。でも、それを取り出してどうするんだろう。

■松崎さん

そうだね、取り出してどうするんだろうね。青森県に持っていくという話がありましたけど減容化施設を今作っていて、あれは何のための施設なんでしょうか。

――減容化は、「小さくする」という考え方です。たとえば、大きなタンクに溜まった水の中に放射性物質があるとしても、その放射性物質を圧縮すれば、綺麗な水とペットボトル1個分におさまるぐらいの小ささの放射性物質とにわけるといようなことも、理論上は可能です。



■山代さん

でも、そのペットボトルはどうするんですか？

■松崎さん

完全になくなるものだと思ってました。

——廃炉の場合だけでなく、廃棄物は全て、完全に無害化することができないので、それとどう共存していくのか、あるいはどこまでを許容するのか、という問題が残るのはどこでも起こることですね。

■山代さん

どの自治体も反対するけど、でも福島だけに置くのはね。

■小林さん

少しくらい受け入れてくれてもいいんじゃないかとは思うよね。それと、事故前は何故皆、あんなに安全だと思ってたんでしょう。何を根拠に安全だと言ってたのかなって。

——ご自身は「安全だ」と思われていましたか？

■小林さん

大熊双葉に海水浴に行くと、海水浴場のそばに原発があったんです。でも、大人たちの間でも「原発」というワードも出ていなかったし、ただの電気つくってる施設としか思っていなかった。

■松崎さん

震災前、祖母がプルサーマル計画のニュースを見ながら、「おばあちゃんも、昔はここに働きに行ってたんだよ」ってよく言っていました。「ほとんどの人があそこで働いてたんだ」と。皆が働く場所は、つまり安全なんだなと思ってましたから。

■西川さん

廃炉が終わったら、今廃炉作業をしている場所が最終処分場になっちゃうんじゃないかなって可能性を考えてます。最終処分場は絶対どこかには必要なわけで、だからあの場所が絶対にそうなってほしくない、とも私は思えないんです。でも、地元の人が嫌って言う気持ちもわかる。30年後に、もし私の子どもがいたら考え方も変わるかもしれません。今は自分のことだけで物事を考えているから、そんな風に割り切って考えられるのかもしれない。

——では、廃炉に関する希望や要望はありますか。

■西川さん

現場の臨場感が視察に行かない人にも伝わったらいいと思います。東電が、もっと地域の人に伝わるような方法で情報発信をすればいいのに、と。

少し前に、「はいろみち」という冊子の創刊号が富岡のコンビニにあって、今の廃炉作業の状況がまあまあわかりやすく書いてありました。川内村などでは、**現場の近況を説明するリーフレットが地域の広報に挟みこまれているけれどすごく読みにくいんですね。だから、廃炉現場の今の作業やそのリスクのことを、もっと住民にオープンにしてほしいです。リスクがわかれば準備もできるので。**

——他に、どうすればわかりやすく伝えられると思いますか。

たとえば、東電社員が地域の手伝いに来ているので、廃炉作業中に事故が起きたらという想定での防災のワークショップを住民に向けて開くとか。個人で何を準備したらいいのかわからない人も多いと思うし。

——そういうワークショップを開くと、かえって不安を煽る可能性を考えて、東電は躊躇しているのかもしれないですね。

そうかもしれませんね。だったらもっと中立的な、どこにも属していない団体が開くとか。東電の人と、もっとラフな場で質問ができたらいいな。**今、廃炉の話は住民の間でもタブーみたいになってるけど、実際に原発は今存在してるので、重要な話だ**と思う。

東電社員自身も、大熊町にたくさん住んでいるので、住民としてどういう準備をしているのか知りたいです。そういう話を聞けば、「万一何かあって避難するときは、東電の人も同じ住民だな」と思えるから。

■関さん

僕は、木炭を出荷したいですね。放射線の出荷基準として、灰が8000bq/kgなので、燃やす前の木炭に換算すると280bq/kgになります。川内村の「いわなの郷」近辺の木は、枝の皮を剥げばなんとか基準を下回るんですが、まだまだ先は長いのが正直なところです。この辺りの地名は「川内村炭焼場」なので、それを活かして今後炭焼きをしていきたいですね。

田村市都路、川内村の人々

——出荷できない理由は、放射線の問題だけですか？

■関さん

まずは放射線の問題ですが、そこは長期的に取り組むつもりです。木を伐るなり新しく植えるなりすれば、新しい木は線量が下がります。くぬぎで7、8年かかります。

ユーザーは未知数ですけど、新しい技術を試せば勝負できると思っています。あとはこちらの人員がないという問題もあって。

今後、テクノロジーの進展でずいぶん変わることがあるんだろうなと思っています。それは、廃炉の現場でいえばロボット技術の発展ということになるんでしょうけど、別の場面でも、たとえばAIが、日常的な仕事をやってくれるようになるって言いますよね。AIとの関係がうまくいけば休みも増えるし、そうなると生活の仕方が変わってくる。仕事優先の現在の価値観も変わるだろうし、福島が、新しい価値観の先駆的な地になるんじゃないかなと、期待しています。

——一方で、テクノロジーの進歩にはお金がかかります。消費者の負担にならないように、廃炉にはお金をかけ過ぎるべきではない、という意見も当然あります。投資しなければテクノロジーの進歩は遅れますし、もしかしたら廃炉そのものも長くなるかもしれません。

■関さん

それは、あまり考えたことがありませんでした。適切な投資は必要ですが、どこまで消費者にその重要性を理解してもらえらるでしょう。

——そうですね。そこは難しい問題ですね。

■小林さん

私は、**廃炉現場で働いてる人の話を聞いてみたい。どんな人が働いているのか知りたい**です。先日、テレビのニュースで知ったのですが、東電の社内にある会報（「月刊いちえふ」）の中に現場の人のインタビューがあると聞きました。ネットでも見られると聞きましたが、どう調べたらいいのかわからなくて。その延長でいうと、ネットで情報を拾ってくるのには限界があります。ネットと同時に紙媒体でわかりやすいものがあればいいなと思う。

それと、廃炉はイコールで専門的、というイメージがあって、一般人がとやかく言えないなって。でも、せめてもっと前向きなイメージになったらいいな、と。

——現状では、廃炉は前向きなイメージではないんですね。

■小林さん

前向きではないですね。大変そうだなって思うし。私は特に怖いというイメージではないけど、でも得体のしれないことが中で行われているんだろうなという感じはします。

普段浪江で生活していても、その「得体のしれない感じ」はあります。海沿いに行けば原発は見えるんですけど、今や海沿いに行かないし、町中からは森林があるので煙突しか見えないし。もちろん働きに通っている人もいるんだろうけど、ときどきゲートをくぐる車とすれ違う程度で接点がないし。

■山代さん

今日話していて、これまで「**廃炉について調べてみよう**」と思ったことすらなかったな、と気づきました。ここに住んでいると、「**実際にここに生きてるんだから安全**」という思いが出てくるんですけど、当初はもっといろいろ調べていたような気がするんですけど、でも、「**ここが安全だ**」という思いが強くなりすぎると、「**廃炉は危ない作業なんだ**」という意識もなくなるんだなと思います。だから、**廃炉に伴うリスクがわかるようなサイトがある**といいですね。

それと、震災後に生まれたり、小さくて震災の記憶がなかったりする子が今後育っていくなかでも、**忘れないでいてほしいと思う**。いろいろなものが犠牲になって、**廃炉になっていく**ということ。そして、そのことを伝えてほしいなと思う。でも、一方で忘れないということは、「**福島は危険だ**」という認識も忘れないということにもつながるので、それは複雑ですけど。

——リスクがわかるようなサイトということですが、リスクを明示されたら、今考えずに生活できていることも、いろいろ考えなくてはいけなくなる場合もあるかもしれません。

■山代さん

「**もう何も考えずに安心して暮らしたい**」という人もいます。でも、今後何か問題が起こったら、「**どうして初めから言ってくれなかったのか**」と私だったら言っちゃう気がするんで、**知っておきたい**です。それに、知った上で行動の選択ができるし。

■松崎さん

私は、**早く廃炉にしてほしい**ということだけです。

——早く廃炉にするというのは多くの人が望むことでしょうが、実際にそのメリットを目指すなら相応のコストやリスクも増えるんですよね。例えば、費用の問題があります。あるいは、現場で働いている人に負担をかける、例えば、被曝線量の基準値をゆるめて、作業を長時間続けてできるようにすれば、早く廃炉にできるという方法だってあるのかもしれない。じゃあ、そうすべきなのかという議論は全くされていないと言ってもいいでしょう。

それから、廃炉のゴールをどこにするかという議論もあります。更地にすべきなのか、そうしないならば「ここまではやってほしい」という線を住民が引くのか。たとえば、あるていど燃料を取り出して安定状態にできたならば、そこから手をつけたほうが色々なリスクやコストがでる。ならばもうそこまでいいんじゃないか、という見方もあります。政治的に決まっていることを抜きにして、ゼロベースで考えるならば、「ゴールをどこにするか」という条件によって、廃炉を早めることも長引か

せることもできる。

■小林さん

廃炉が短くなることはあるのかな。プランより長くなる場合しか想像できません。ああいうのって、だいたい長くなるような気がして。こうすれば30年かかるとか、こうすると50年かかるとか、その試算はあるんですか？

——パターンを知りたいということですね。

■小林さん

そうですね。「お金をこれだけかけると何年」みたいな、パターン分けが欲しいです。当初40年と言っていたけれど、あれからもう7年経ったので、じゃあもう35年かというところなのかな。10年たってもあと40年って言ってそうだな、と思うし。



プレリサーチ 座談会 05

Jヴィレッジ

楡葉町と広野町に跨り、アジア最大のサッカーナショナルトレーニングセンターとして設立・運営されていたJヴィレッジは、東電福島第一原発事故の直後から、長期にわたって廃炉作業の拠点として利用されていました。しかし、現在、2018年夏から営業再開を目指して、砂利が敷かれて駐車場になっていたグラウンドを新たに天然芝が覆いはじめています。スポーツ施設として甦るJヴィレッジにとっても、廃炉の現状は大きな関心事です。今回の座談会には、Jヴィレッジ再開に向けて働くJヴィレッジ職員の方々が参加しました。



■明石重周さん(以下、明石さん)

6年間で、モニタリングポストの数値は少しずつ下がっています。とはいえ、それでも元の数値と比べれば高いんだろうし、今後しっかり下がるのかなと思うと不安です。今私はいわき市に住んでいるんですが、**双葉郡に入ると、汚染土を詰めた大きな黒い袋がたくさん残っています。「復興に向けて頑張っています」とは言いながら、実はまだまだ進んでいないところがあるのも事実**です。

ここがスポーツ施設だったということもありますが、子どもたちがサッカーをするような場所の線量は、やはり気になりますね。少しでも放射性物質が残っていると思われたら、敬遠されてしまうかもしれませんし。いわき市や県外の人たちに来てほしいと考えたら、「放射線量が表示されている」というのはそのまま「放射性物質がある」というイメージにつながってしまいます。

——放射線量もたらすイメージはどうしたら乗り越えられると思いますか？

たとえば、東京オリンピックに参加する選手が合宿をしてくれるんです。そういった一流の選手が使っているという情報をもっと発信する必要があると思います。今は単に営業再開していないだけで、別に放射線量が高いから使えていないというわけではないんです。

■後藤朋久さん(以下、後藤さん)

広野町は住民の6~7割が戻ってきたと聞いています。楡葉町も、学校が再開したこともあって少しずつ人が増えているようです。ただ、もともと住んでいた人が「もう戻らない」と言っているのを聞くと、「**街として機能するのかな**」と不安になります。

それから、Jヴィレッジも福島第一原発の近くにあるわけです。**廃炉に30~40年かかるとされているなかで、もしまた6年前のような大地震が起きたら、それでも本当に大丈夫なのでしょう**か。「もう地震は起きない」とは誰も言えないでしょうし、「地震が起ころうと絶対大丈夫」と言える人もいません。そう考えると、やはり不安です。それでもまた原子力災害が

起きたら、6年前の教訓を活かして避難できるのでしょうか。あの混乱を、皆がもう忘れはじめているのではないかと感じます。

—Jヴィレッジも整備され、いまやたくさんの人が働いています。飲食店やコンビニエンスストアも営業しています。それでも街づくりに困難さを感じますか。

たしかに、**生活インフラや災害公営住宅といった「ハコモノ」は整備されてきたと思います。でも、廃炉作業のためにここに住んでいる人が、作業が終わったから県外に戻るということであれば、街はつくれません。**

—再び大地震や原子力災害が起きたらという不安はどんなときに感じますか。

■後藤さん

お客さんに泊まっていただくことは、命を預かっていることと同じです。営業活動はまだこれからですが、今後不安を抱くお客さんがいたときに、どう払拭していけばいいのかと考えています。

■小名山洋介さん（以下、小名山さん）

Jヴィレッジがオープンしたときは、お客さんも来てくれるとは思いますが、でも、その後も**ずっと持続的な運営ができるのか**、と。私は震災後入社で、震災前に運営していた頃のことを知らないで、余計に不安を感じるのかもしれませんが。確かに応援してくれる人も多いのですが、産業としてはどうなのかな。家族もいるし、もしこの仕事が成り立たなかったら、この先どうになってしまうのでしょうか。非常に不安です。

—その不安の原因はどこにあると思われますか？

やはり放射線の問題ですね。福島県も教育旅行をリードしたいと言っていますが、決して簡単なことではないでしょう。たとえば、スポーツチームなどを誘致するとき、もしかしたら母体の社内で、安全を心配する声があがるかもしれない。そういう場合に備えて、私たちも安全対策を講じています。今取り組んでいるのは、BCP（事業継続計画）です。大手の警備会社と組んで、大災害など不測の事態に備えた計画を作り、説得力を持ちたいと思っています。こういう計画がなければ、「大震災の教訓が活かされていない」と思われてしまいますから。いわき市にもBCPに取り組んでいる自治体があるようです。

—震災のとき、Jヴィレッジに住民が集まったと聞きました。

た。復興拠点としての側面も感じますか。

はい、震災のときは、しっかり対応できたと思っています。住民の方々も集まって、炊き出しもしました。

■明石さん

金曜日だったので、合宿する人のための食材があったんです。それを避難してきた地域の人たちにふるまいました。布団や毛布も客室から全部持ち出してきました。ただ、宿泊者用の食材であって、とりわけ災害用に備蓄をしていたというわけではありませんでしたので、今後はしっかりと対応していかなくてはなりません。

■小名山さん

ここはもともと田舎なので、スポーツ関係での観光や合宿の場所として選んでいただいていた。「外での活動」が最も目玉だったにもかかわらず、それに抵抗を感じられてしまうという状況です。廃炉について学ぶなどの教育的要素の強い旅行を受け入れると、良くも悪くもいろいろな形で発信はされると思うのですが、どうしてもダークツーリズム的な要素が強くなってしまいます。もちろんどんなかたちでも人が来てみようと思ってくれることが大事なのですが、それがJヴィレッジのもともとの趣旨とあっているのかと言えば、そうではない部分もあったりして。

■澤上品さん（以下、澤上さん）

私は双葉町出身なので、まず双葉町の住民としての不安をお話します。今、**双葉町の周辺は帰町し始めていますが、双葉町はいつ頃帰れるんでしょうか。それから、帰町するなら廃炉が終わってからの方がいいのでしょうか。**

—僕の個人的な見解ですが、場所によって集中的に除染している場所は、そう遠くなく帰れるようになると思います。ただ、放射線より利便性の問題だと思っています。コンビニやスーパー、病院などですね。広い範囲で避難指示が解除されないと、利便性が上がらないという側面もあるかもしれません。

帰還は、廃炉が全て終わるのを待つ必要はないと思っています。今後30年40年の間、ずっと高いリスクがある状況が続くわけではなく、格納容器の中のデブリが取り出せれば、もうそれほど問題は無いのではないかと思いますね。ただイメージとしては、県外から観光やサッカーをしに来る人にとって、壊れたものがあるのは印象が良くないかもしれないですね。そういった意味で、イメージの問題は廃炉が続く限り残る可能性もあります。

Jヴィレッジ

■澤上さん

そういうお話を聞くと安心します。

■明石さん

全国各地のサッカー関係の人に、「**Jヴィレッジが復活するんですよ**」と言っても、「**防護服を着たまま**」というイメージが残っていることすらあるんです。事故後1, 2年の頃は「**広野火力発電所が爆発した**」と思っている人もいたりして。そうやって、さまざまな情報が間違ったかたちで伝わっている場合があるな、と感じています。Jヴィレッジの周辺や福島の現状が意外なほど伝わっていないんです。福島県に住んでいる人でも、伝わっているかと思っていても実際には正しく伝わっていないこともあります。

それから、さっきも言ったんですが、**スポーツで知られていた広野町、楢葉町、Jヴィレッジが、いまや近寄りたない場所になってしまったことです。廃炉の町、原発のある町というイメージになってしまいました。**

——イメージの問題はとても難しいですね。

もちろん使命感もありますし、FacebookでJヴィレッジの情報を出すことについても話し合ってきました。**僕ら自身で正しい情報を発信していこうという思いと、一方でどう解釈されるのかという不安と。**ようやく今年の4月に天然芝を敷いて、緑の芝生になりました。皆さんの中では「芝生の上に砂利が敷かれて、駐車場になっていた」という当時のイメージが鮮明だったと思いますが、その天然芝で緑になった写真をFacebookにアップした際、今までの何十倍という大きな反応がありました。どう解釈されての反応なのかはわかりませんが、少なくとも、Jヴィレッジが戻ってきたことへの興味を表す数だと思っています。

——そういったことでイメージが覆ることがあるかもしれませんね。どういった属性の方からの応援を大きく感じますか？ 県外の人にとって、Jヴィレッジは復興の象徴になっているかもしれませんし、地元の人はいかがですか。

■明石さん

もともと親交があった方の声はありますね。一方で、かつて親交があっても「無理だろう」と言う人もいます。その中でもお声掛けいただき親身になってくださった広島県はいまでも交流があります。震災後、毎年小学生を広島に連れていっていますが、アテンドしてくれた広島のサッカーチームの保護者が、一所懸命に涙を流しながら僕らの話をしてくれて。訪問した翌週に広島で土砂災害があったときには、逆に福島の保護者が広島の援助をしたいと言って、そういういい関係が続いています。

■小名山さん

あとはサッカーファンが多い静岡とかですね。あとは同じ傷を持っているわけでもないですけど、長崎とか。

■澤上さん

そうですね。やっぱり**サッカーが好きなのが、Jヴィレッジを随分応援してくれてますね。**

■明石さん

逆にいわき市の保護者の中にも、Jヴィレッジが再開してサッカーをするというと、まだ考えてしまう人もいます。

■後藤さん

応援していることと、子どものことはまた別なんでしょうね。

■小名山さん

以前小さな子どものいる親御さんにとつたアンケートで「オープンしたら子どもを連れてくるかどうか」という問いがありました。すると、福島県内の親にはNGの人も結構いて、逆に県外の方がOKの率が高かった。もしかして県内にいると、ニュースで数値とか廃炉のニュースをしょっちゅうやってくるからかなと。**本来、同じ浜通りの住民同士、スクラム組んでいきたいのに。実際は妬みとか臆測とかね。そこが今後どう解消されるのか。**

■澤上さん

私は、**戻れるようになったら家族皆で戻る予定なんですけど、いわき市に住んでいても温度差を感じますね。**

——双葉町出身の方の間でもそういった温度差はありますか。

■澤上さん

すごい差がありますね。双葉町はもともと、何もないけど、皆で和気あいあいと楽しくやっていたんです。それが、少し変わってしまったな、と。

——いろいろなものが変わったなかでも、澤上さんは戻るという気持ちでいらっしゃるんですね。

■澤上さん

私は、戻りたいです。犬を放して飼いたいですよ。犬を放して飼えるような山の中で生活していたので。静かなところで暮らしたいですね。

私は戻りたいんですが、先ほど質問したような「廃炉が終わってから戻った方がいいのか」とか、そういった情報をもっと身近で聞けないものでしょうか。自分でネットで検索すればいいという話なんでしょうけれど、こうして直接聞けるとすごくいいです。文字だけの情報より。私はもともと廃炉作業中でも気にしない人間なので、というのもあるのかもしれませんが。

——ご自身が気にされなくても、お仕事をされているなかで、ある種の科学コミュニケーションのようなものが必要な場面はありませんか？外の人にある程度専門的な説明を求められたりして。

■明石さん

ありますね。そういうときに、線量の数値をどう説明したらいいのか悩んでいます。よく「レントゲン1回分」とか「飛行機に乗った場合」とは言いながらも、ここで生活する数値としてはどうなのか、とか。モニタリングポストの数値の意味も説明しにくいです。

先日、楢葉町にできたモックアップ施設（楢葉遠隔技術開発センター。実寸大の格納容器を模した実証実験設備などが設置されている。）に行き、そこの凄さはもちろんわかるんですけど、初めて来た人がどういう説明で理解してくれるのか、悩みますね。**説明するのにいい資料がない**ですよ。公共施設に行けばたくさんあるんですけど。

■明石さん

それから、廃炉についてですが、「**廃炉**」って言われても、「**そもそも廃炉ってなんだ？**」というところがあります。

もちろん長くかかるんだろうということはわかっているんですけど、外に出ないように抑えながら、何かしらやるんだろう、ということしかわからない。でもどうなったら終わりののかもわからないし。

——第一原発の視察をされて、どう思われましたか。

■小名山さん

第一と第二、どちらも視察してきました。第一原発は今年間1万人の視察を受け入れていると聞きました。でも、視察対応する人員が足りないし、核防護上のセキュリティの問題もあるので、制限しているそうです。それでも今年は2万人受け入れたいと言っていました。私は、どちらかと言えば第二の印象が強かったですね。危機管理対策がしっかりしていて、山を削って以前はなかった消防車や予備電源が置いてありました。あとは、**津波が第二原発にも来たので、流れてきた木や資材が邪魔で作業できなかった**という話でした。でもそれらを除ける業者もなかなか来なかったので、その反省を活かして自分たちで重機を扱えるトレーニングを2週間に1度ペースでしているんですね。これはすごい説得力がありました。**Jヴィレッジでもこういうことに取り組んでいかないと説得力がないんだな**と感じましたね。ですから、危機管理対策を今後強固なものにしていきたいな、と思いました。

■後藤さん

Jヴィレッジのパンフレットを作っていて、楢葉町の紹介をしたいと思ったんです。以前は木戸川の鮭や冬のハクチョウなど、もうそれだけでパンフレットができてしまうような、自然豊かな場所でした。でもそれが今は、鮭も上がってこないしハクチョウも来ない。こういう**自然の恵みは戻ってくるのかな**。

——周囲の自然を含めてパンフレットを作られているんですね。

昔は双葉郡の町村の写真を入れていました。今は楢葉町と広野町にまたがっているの、ここが我々のホームタウンだ

Jヴィレッジ

と思っています。なので、町の紹介を含めたパンフレットを作ろうと思ったんですが、「かつての楢葉がなくなってしまったな」というかね。

■小名山さん

町民が帰還して住み始めることありきで、何も整備されていないような気がします。「とりあえず住んで」って言われているような。そうじゃなくて、「これだけ生活インフラが揃ったから住んで」という順番の方が、戻りやすいんじゃないかな。

——今一番足りていないものはなんでしょうか。

■明石さん

やっぱり、子どもが動かないと親も動かないです。Jヴィレッジも塾や学童保育をやるとか、そういうことも考えられるのかなと思います。

——雇用源としてのJヴィレッジの雇用創出効果はどのくらいあるのでしょうか。

■小名山さん

これからは芝の関係や警備、ホテルスタッフで多くの人員が必要ですね。

■澤上さん

近辺に住んでいる人が少ないので、働き手の確保が難しいです。県外の人で興味を持って下さっている方からの問い合わせはあります。

——人がいないのに仕事は発生するのは、この地域独特の問題ですね。

■後藤さん

不安ですよ。働き手がいないと、結局自分の首を絞めることになるのではないかと思います。

■明石さん

Jヴィレッジに人が来てほしいという点では同じです。**ここ**

での生活環境がない限り、子どもがスポーツをしたいという需要にはつながらない。まずは人が生活できるような環境です。それから足を運びやすいような施設にすること。震災前のJヴィレッジにもどすだけでなく、震災前を超えるようなJヴィレッジにしていくことを目標にしていくことが大事だと思います。

もともと震災前の半分しか人が来ないのでは、というところからのスタートです。じゃあどうしたら人が来るのかと考えたとき、子どもが来れば親も来るし、高齢者も孫に戻るなら自分も戻るよと言うかもしれない。**この地域を、教育分野や子ども関係に特化した場所にして、「ここに子どもを住ませたい」と思わせるような仕組みを考えていく必要があるんじゃないかな。**

楢葉町も小学校が再開して、100人弱の子どもが戻ってきています。いわき市から通ってくる子も多いそうですけれど。**勉強とスポーツに関して、いかに子どもを安心して預けられる環境作るかということが重要です。いわき市に住んでいる人が憧れるくらいの場所にしないといけない**と思っています。

■後藤さん

廃炉に30年、40年かかるということは知っているんですが、**作業のスケジュールがわかりやすく発表されていないのではないかと思います。発表自体はされているんでしょうけど。人類が初めて挑戦するようなことも今後行われるわけですから。そして、今決まっているスケジュールが本当に最善なんでしょうか。ときどきロボットが入って失敗したというようなニュースは見ますけど、実際に福島第一の中で何が行われているのかという情報が入ってこない**ので。

■小名山さん

我々も、本当はサッカーを売りにしたいですけど、廃炉ビジネスやダークツーリズムとかホープツーリズムとしてPRしていかななくてはいけないのかな。

——外から来た人がまず立ち寄るような拠点にしていけるかもしれませんね。

イノベーションコースト構想として、新しい研究所もできてきました。Jヴィレッジでコンベンションホールも作る予定です。展示会ができる施設はこのあたりにはないので、ビジネス

スとしては成り立つかもしれませんが。イノベーションコースト構想は、大手の研究所などには魅力があるんでしょうけれど、中小以下のところについては行けないんですよね。本当に底上げになってるのかなというのは疑問です。中小も潤うようなシステムができないかな。

■澤上さん

一時帰宅で度々双葉町に帰っているんですが、行く度にちょっと心が折れるような状況なので、せめてもうちょっとクリーンな感じになればいいなと思います。特別何かほしいわけじゃなくて。

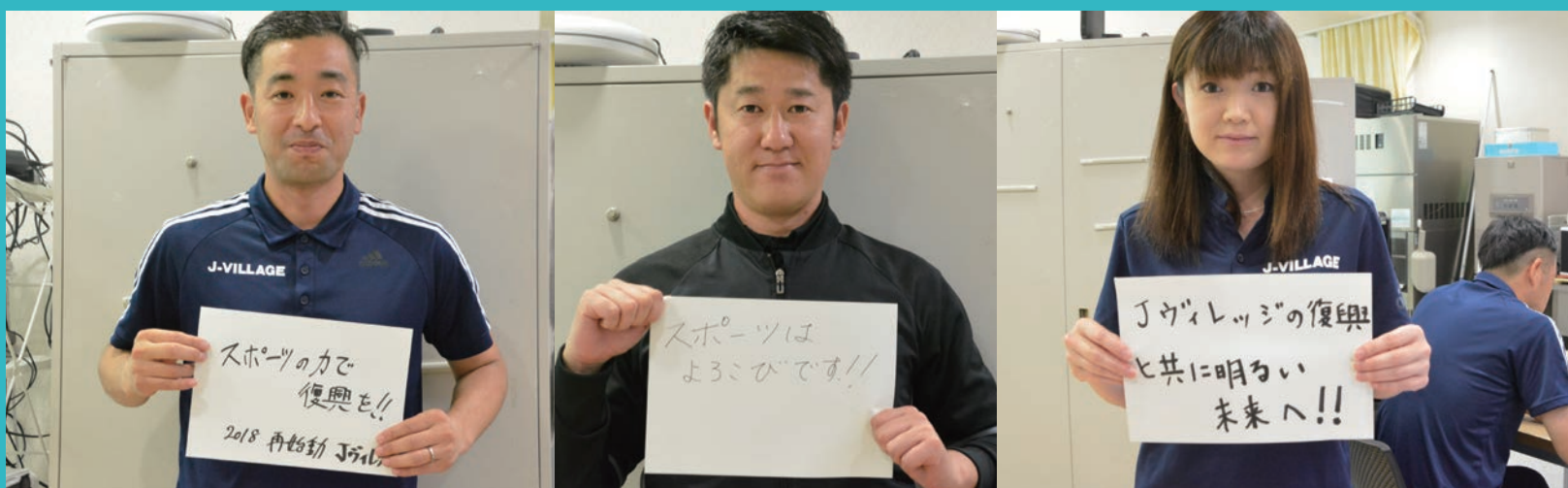
■明石さん

私はチェルノブイリを見ていないのですが、町の再興はどうなっているのでしょうか。

——原発周辺からの移住者向けに新しく作られた町があり、そういうところはとても綺麗ですね。チェルノブイリの場合は何もなかったところに町を作らないと住む場所がない状況

でした。一方、福島の場合は、放射性物質の量の問題をはじめとして状況が大きく違い、新しく大がかりなことをしなくてもうまくいく部分もあるのかもしれないね。

双葉郡は狭いエリアにスポーツ施設が点在していますよね。いわき市にも大きな施設がポーンとできましたが、広野町、浪江町、富岡町、双葉町、大熊町と、それぞれの町の思惑があります。でも、広域連携という考え方は必要になってくるのではないかと考えています。双葉郡に大きなショッピングモールを作るとか、広野町だけではできないようなこともできますし。今だといわき市の人々が広野町、楢葉町に買い物に来ることはないですよ。そういった意味でも、**町同士の連携がもう少しできてもいいんじゃないかな。**



終わりに

東京電力福島第一原発事故から6年以上の時間が過ぎています。

いまだ避難を余儀なくされる人が存在し、いわゆる「風評被害」が残る一方、被災した沿岸部や建造物の修復は進み、新たな施設がオープンし、かつては人の立ち入りが禁じられ荒れ放題になった地域での避難指示が解除され、3・11前には無かった新たな風景が生まれつつもあります。

この地域は数十年以上かかる廃炉と向き合い、付き合いながら日常を送っていくことを求められています。しかしながら、その現実を直視して語り合う場が用意されてきたのかということそれは十分ではありませんでした。透明性と住民参画の可能性を大切にしながら、福島第一原発の廃炉と地域の再生を語り続ける場を作っていくことは今後、極めて重要なことです。

本日の議論を今後につなげ、地域の未来を語り合う土台になっていけばと思います。

ファシリテーター・開沼博

今日のリサーチ・セッションは、
「福島第一原発廃炉や周辺地域についての正確な事実の共有をすることで、
地元の幸せな未来を考える場」です。

「全ての問題に答える場」ではありません

長いようで短い、時間が限られた場です。住民が廃炉主体に直接納得行くまで質疑応答ができる貴重な時間を有効に使うために、論点を「福島第一原発の廃炉」と「それに向き合う人の生活」について絞ります。

「全ての地元住民の全ての思いに答える場」でもありません

そもそも「地元」という言葉自体曖昧です。ただ、避難指示等があった地域の住民の方々の声を聞くところから始まります。何度も座談会をしたのもそのためです。

「一回で終わらせる場」でもありません

地元の多様な言葉を拾い上げていくにはこの場だけでは足りない。人の気持ちは移ろい続ける。言い足りないこと、拾えてない声、あって当然。「もっと言いたい、聞きたい」という方、ぜひ、今日以降も続くこのフォーラムへ参加しましょう。

要望を伝えて意思決定を迫る「陳情の場」や「吊し上げの場」でもありません

目的は「正確な事実の共有」を通して、「住民と地域の幸せな未来を描く」準備をすることにあります。まずは「何が分からないか分からない」を少しでも「分かった」状態にすることが今日の目標です。

マニアックな最先端の専門性を追求する場ではありません

今日(7/2)のフォーラムは、マニアックな最先端の専門性を追求する場ではありません。

専門的なことは、明日(7/3)、いわきのワシントンホテルで開催する「技術専門家と考える1F廃炉」で議論されます。

ぼいすふるむふくしま

2017年7月2日発行

『ぼいすふるむふくしま』編集委員会・編

マクマイケル・ウィリアム 坂上英知 山根麻衣子 開沼博

構成・編集協力：服部美咲 デザイン：藤城光 グラフィックレコード：清水淳子

調査協力：インタビュー・座談会を受けてくださった皆様、西本由美子様、芳門里美様、原尚志様、よりあい処 華様、その他多くの方々のご協力がありました。心より御礼申し上げます。

『ぼいすふるむふくしま』について

本冊子『ぼいすふるむふくしま』は、原子力損害賠償・廃炉等支援機構から依頼を受け、「第二回福島第一廃炉国際フォーラム」のファシリテーターを務める開沼博が独自の調査として草稿案を作成し、最終的に2017年6月9日に川内村で行われた編集委員会での議論を経て作られました。

編集委員会では、「表現に曖昧な部分・分かりにくい言い回しがないか」、「地元には多様な意見・立場がある。地元の声をまとめるにあたり一部の声が福島全体の声であるかのようにとらえられる表現がないか」といった点についての議論がありました。

